六朝志怪小説から見た中国中世

―『太平広記』「神」部より―

研究会「中国中世の研究－『太平広記』を題材に－」

六朝志怪小説から見た中国中世
―『太平広記』「神」部より―

研究会「中国中世の研究―『太平広記』を題材に―」

都築晶子

はじめに

本篇は、中国の六朝志怪小説を収めた『太平広記』「神」部から一六話を取り上げ、その読解を通して中国中世という時代にひそむ当時の人びとの心象風景を探っていくことを目的とする。なお、「六朝志怪小説」、『太平広記』の詳細、本篇全体の構成は、次の「二　中国文言小説と『太平広記』」（以下、「二」と略記）を参照されたい。

一　中国「中世」と六朝志怪小説

（1）六朝志怪小説の時代

それでは一体、六朝志怪小説の背景となった時代とはどのようなものだったのだろうか。

後漢末以降、中国では戦乱と分裂の時代が続いた。前漢・後漢のほぼ四〇〇年間は比較的安定していたが、後漢後半の二世紀に入ると自然災害・飢饉・疫病の連鎖が繰り返される。当時の社会の基層であり人びとの日常空間であった「郷里」からは多数の流民が流出し、後漢は混乱に陥った。後漢末に「黄巾の乱」と呼ばれる大規模な宗教叛乱が勃発、後漢は崩壊する。それ以降、中国は魏・蜀・呉の三カ国に分裂、三世紀後半、西晋がかろうじて再統一をはたした。しかし、四世紀初めに北方諸民族の自立をめざす「五胡十六国の乱」が起こり、華北には北方諸民族による国家が乱立する。華北のいわゆる漢民族の多くは、難民となって大挙して長江流域をめざして南下した。西晋の旧支配者層も南下し、長江中流域の呉の旧都・建業（現在の南京）に新たに東晋を建立する。東晋は安定した政権を樹立できず、ほぼ一世紀後には宋によって滅ぼされ、その後は引き続き南斉、梁、陳と次々に短命な王朝が交代していく。この建業、東晋以降は建康に首都を置いた呉および東晋以下の五つの王朝を併せて「六朝」と呼び、呉から陳までを六朝時代ともいう。

東晋では華北から流入した「貴族」と呼ぶ有力な家柄の出身者が重要な官職を独占し、「寒門」「寒人」と称された低い家柄の出身者は決して高官には就けず、

中下層の官職に甘んじた。南朝に入ると貴族は実権を失っていくが、貴族と寒門・寒人の隔絶は続いていく。本篇に収めた『太平広記』「神」部の各話は、三、四例を除いてすべてこの時代の長江流域の寒門・寒人によって書き記されたものである。

ここで、本篇においてこの時代を中国「中世」と表現するのは何故かという事由を説明しておきたい。従来、漢代以前を「古代」、魏晋南北朝から隋唐までを「中世」とする説と、隋唐までを「古代」とする説の二つの時代区分が学界を二分してきた。ある意味ではヨーロッパ史をモデルとしたこの時代区分は近年ではほとんど言及されなくなり、ヨーロッパ史研究でも中世の見直しが進められ、「中世」という概念そのものが揺らぎはじめている。

しかし、少なくとも中国宗教史の流れからみると、後漢末に黄巾の乱を起こした「太平道」、ほぼ同じ頃に四川に広がった「五斗米道」という道教の登場は、時代を画期するものであった。太平道・五斗米道は病気の原因が個人の罪にあるとし、罪の懺悔によって治癒するとした。つまり、道教は個人の罪の意識を覚醒させたといってよい。もちろん、道教の「個人」はヨーロッパのキリスト教支配下の「個人」とは異なっている。ここでは詳しくは立ち入る余地はないが、道教では個人の罪に対する罰は本人だけでなくその家族や親族、さらに直系の子孫にまで及ぶと説いた。その本人にもまた、祖先の罪に対する罰が及ぶのである。その意味では、「個人」はあくまでもこの「家」に包摂された存在であった。

こうした「個人」の意識の誕生をもたらし、さらに地域社会の枠組を超えて全土に広がった道教の成立は、後漢後半の郷里社会の崩壊と無関係ではなかったろう。太平道に集結したのは、流民が多かったという。

このように、後漢末の太平道・五斗米道の登場は中国宗教史の流れに大きな転換をもたらした。インドで誕生した仏教が中国文化と混淆しながらも五胡十六国、東晋の頃から急速に社会に浸透したのも、このような人びとの意識の変化が背景にあったのではないだろうか。さらにまた、「二」に述べるように六朝志怪小説の登場が中国文学史を画期するものであったこととも呼応するだろう。

とはいえ、このような中国宗教史の画期を中国の古代から中世への転換とみなし、魏晋南北朝時代つまり六朝時代を「中世」と位置づけるにはなお逡巡がある。道教の「個人」はヨーロッパ中世の個人とは異なる。また、ヨーロッパ中世ではキリスト教が政治の次元まで掌握したのに対し、中国では皇帝が道教や仏教に傾倒することがあっても、王朝の体制は清末に至るまで一貫して儒教を基盤とした。しかし、この後漢末の道教という新たな宗教の登場をキリスト教の拡大がヨーロッパ中世を生みだしたことに比して、後漢末以降の魏晋南北朝時代つまり六朝時代をとりあえず中国「中世」と位置づけておきたい。

（2）歴史としての六朝志怪小説

「二」にも述べるように、六朝志怪小説の各話は、現代の私たちにとっていかに荒唐無稽にみえようとも、実際に人びとが体験した事実であることが前提になっている。そもそも「小説」は王朝の公式の記録である正史には採用されない、いわば野史を意味する。しかし、六朝時代の正史の列伝には怪異譚がその人物の逸話として記録されるようになる。志怪小説を代表する『搜神記』という書物がある。著者の干宝は祖父の代に華北から長江流域に移住し、呉郡（現在の蘇州近辺）に居住していた。祖父、父と二代にわたって呉に出仕し、三代目の干宝ともなればもはや呉に土着化していたといえよう。干宝は西晋末に史官に就任、次いで東晋に同じく史官として出仕し、西晋の歴史を記録した『晋紀』を編纂している。干宝は幼少のとき不可解な体験をしたという。正史である『晋書』に記載する干宝の伝記におよそ次のように記す。

干宝の父には寵愛していた婢がいた。父が死去すると、嫉妬していた母はこの愛妾を父の墓に推し込めた（おそらく石造りの墓で、内部に棺を置く石室が設けられていたのであろう）。十数年後、母が亡くなり、墓の扉を開けると愛妾が亡父の棺に伏しており、まるで生きているかのようだった。そこで墓から担ぎだしたが、その日のうちに息を吹き返し、亡父がいつも飲食を用意してくれ、生前と同じように恩情をかけてくれたと語った。その後、嫁いで子供も生まれた（略）。干宝はそこで古今の神祇・霊異・人物の変化を集めて『搜神記』と名付けた（『晋書』巻八二 干宝伝）。

この記事は現行の『搜神記』にはみあたらないが、遅くとも東晋末には類似した干宝の逸話が伝わっていたようである。『晋書』をはじめ南朝の正史は唐初に編纂されるが、干宝のような官僚をめぐる怪異を史実として記録している例は少なくない（「温嶠」参照）。

志怪小説には、正史に伝記が記載されるような官僚層だけではなく、農民、商人、兵士などの市井の庶民の名前や出身地、一人一人に降りかかった怪異と年代が記録されている。一人が体験した怪異は周辺の人びとに共有され、伝聞の過程で語る人の創意工夫などが加わり、やがてはその地方に赴任していた寒門の地方官の耳に届く。地方官はその怪異を地方の官庁あるいは中央の朝廷に持ち帰り、寒門官僚が集う談論の場で語り伝えたのではないだろうか。この談話の場では、赴任地で聞いた怪異だけでなく、自らの体験や祖先に起こった怪異なども話題になったという（*）。こうした怪異譚が書き記され、志怪小説としてまとめられたのだろう。さらに、時代が下るにつれて別の書き手が現れ、新しい情報や価値観を加えて当初の志怪小説とは少し違った形のものが書き継がれていったようである（「白道猷」「陽雍」参照）。

（3）六朝志怪小説の鬼神と異界

最後に、本篇の各話に共通する鬼神とその境域である異界（幽界、鬼界）について、そのおよその見取り図を示しておきたい。

そもそも「鬼」と「神」の区分は明確ではない。鬼はもっとも身近な存在だった死者の亡霊を指すことが多いが、動物や植物の精怪、山川の主もまた鬼と呼ばれた。非業の死を遂げた厲鬼（猛威を振るう亡霊）や山川の鬼も祠廟に祀られて多くは神に変化する。一方、こうした祠廟神もそれに対峙する人物の価値観によっては鬼とみなされた（「顧邵」参照）。ここでは鬼神と表現することにしよう。

①人界と異界の境界

儒教の古典では、人・鬼（生者と死者）の間に明確な境界を設けるよう繰り返し説く。後漢末の『論衡』死偽篇にも儒教の古典を踏まえて「生死異路、人鬼殊処」（生と死とでは道が異なり、人と鬼は居処を別にする）という。ただし、同じく儒教の古典『春秋左氏伝』には、厲鬼が現れて人びとを脅かした事件を記す。

しかし、六朝志怪小説では、死者の鬼はもとより、さまざまな鬼神の棲む異界と人の住む人界の境界はきわめて曖昧であり、鬼神と人とが入り雑じっている。鬼神はしばしば人界に姿を現し、逆に人もまた異界に迷い込んだ。その体験は周囲の人びとに伝えられ、鬼神と異界へのまなざしも共有されていったのだろう。

②鬼神の変貌

死者の鬼は当然ながら人の姿をしていた。亡霊の中でももっとも畏怖された「厲鬼」もまた、先述した『春秋左氏伝』が描くように生前を彷彿させる姿で現れる。この厲鬼の姿形は連綿として六朝時代にも継承されていくが、その位置づけには変化がみられる。

戦国時代の『墨子』明鬼篇に、西周末に宣王に無辜の罪で殺害された杜伯が「白馬素車」という死者を象徴する姿で現れ、宣王を射殺したという（「伍子胥」参照）。宣王と杜伯とは生前は君臣関係にあり、厲鬼の出現は君臣関係の乱れ、ひいては国の滅亡を予言するものでもあった。

六朝志怪小説にも非業の死を遂げた男女の怪異を記す。ただ、六朝時代の年中行事や習俗が遠い昔に非業の死を遂げた鬼神に由来することを説く話も少なくない。もちろん、この時代にも厲鬼は現れた。たとえば『搜神記』は、後漢末に戦死した武将・蔣子文の厲鬼が白い馬に乗り、白い羽の矢尻の弓矢をもって呉初の建業に現れ、次々に災厄をもたらしたという。杜伯と同じく蔣子文も「白」という死者の象徴を帯びていた。厲鬼の姿形は共通するが、六朝時代の厲鬼は都市や郷村（六朝では里は村となる）などの地域社会に災厄をもたらす存在であり、政治や王朝に関わるものではなかった（「袁双」参照）。

一方、天界や自然界の鬼神は、西周に遡る『山海経』や『墨子』明鬼篇では異形の存在として描かれている（「鄭繆公」の勾芒参照）。しかし、六朝志怪小説に

登場する大半の鬼神は人の姿をしており、言語も衣服も人のそれと同じであった。死者の鬼だけでなく、すべての鬼神は人に近しい姿へと変貌したのである。

③異界の風景

それと同時に、鬼神の棲まう異界もまた変容した。漢代までは、異界は地下深く、山川の奥深く、遙か天上にあって茫漠としていた。だが、志怪小説の描く異界には地上の都市に似た光景が広がり、この異界を統轄する鬼神はこれも地上の官庁に似た偉容を誇る建物に住んでいた。異界の風景は地上さながらだったのである。さらに、異界には地上と同じく官僚組織が存在した。一定の地域の異界を統轄する神である長官、その周囲を取り巻く役人、家事をとりしきる婢女など、これもまた地上の官僚の暮らし振りの写し絵であったといえる。

後漢末の五斗米道教団は魏に投降して華北に移る。西晋末、五斗米道の指導者たちもまた戦乱を避けて難民とともに南下し、長江流域にも五斗米道が広がった。東晋末には五斗米道信者だった寒門の家を舞台に、新たな教義が展開される。この新しい道教では、山中の洞窟に「洞天」と呼ぶ仙界を見いだし、そこでは多くの仙官(仙界の官僚)が立ち働いているという。道教では天界を頂点とする仙界の官僚組織が想定され、地上では高位の官僚には就任できなかった寒門・寒人もこの洞天では高位の仙官に任命されたのである。本篇に登場する洞庭湖の山(島)や天台山系の赤城山にもこの洞天があるという(「聖姑」「白道猷」参照)。志怪小説の異界と東晋末の寒門・寒人の家で誕生した新たな道教の仙界とは同じ土壌に根ざしていたといってよい。

六朝志怪小説の舞台となった長江流域やその南方の地域では、人界の周縁に動物や植物の鬼が徘徊し、山川の大小の鬼神が鎮座し、非業の死を遂げた男女の鬼が跳梁していた。さらには、不思議な力をもった道士や僧侶が通り過ぎた。そこで目撃した異界や鬼神への畏怖や尊崇、驚異や憧れといった心情は、この時代を生きた庶民や寒門・寒人の歴史のリアリティーであり、「中世」世界にひそむ心象風景ではなかっただろうか。

本篇に紹介した一六話は、膨大な数の志怪小説のほんの一部にしか過ぎない。本篇がこの志怪小説の根ざした時空にどれほど迫ることができたのかは心もとないが、少しでもこの時代を生きた人びとの姿に触れていただければと思う。

＊小南一郎「干宝『搜神記』の編纂(上)(下)」(『東方学報　京都』六九、七〇、一九九七、九八年)参照。

二　六朝志怪小説と『太平広記』

道家春代

（1）中国古典小説における志怪小説

中国の古典小説は、文語体で書かれた文言小説と口語体で書かれた白話小説に大きく分けられる。日本語の「文語」が、「竹取物語」や「源氏物語」が「語り」であるように、当時の話し言葉であったのとは違い、中国の文章には「白話文」と「文言文」というはっきりした区別がある。「文言文」はわれわれが読んでいる所謂「漢文」であり、「白話」は現代中国語につながっている。漢文を読むときは漢和辞典、中国語を読むときは中国語辞典を用いるといえば、イメージがわくだろうか。

ここでいう「小説」は、ノベルやロマンの翻訳語としての「小説」ではなく、また個人による創作作品を意味しない。

一般的に小説の起源は、神話や民間伝承、歴史語りなどに求められる。中国の文献では、諸子百家の『孟子』『韓非子』などにみられる遊説家や思想家が語る話や『荘子』に見られる寓話、また『春秋左氏伝』『戦国策』などの歴史書の中の事件語りがそれに当たる。

「小説」という言葉は古くすでに『荘子』外物篇に見える。「小説を飾りて以て県令に干（もと）むるは、その大達に於けるや亦遠いかな（つまらない論説をもったいらしく飾りたて、これによって県令の職を求めるようなものは、大きな栄達には縁が遠いというよりほかはない〈森三樹三郎訳〉）。」ここでの「小説」は「大達」の対になっており、小さな説、些細で価値のない言説という意味である。

漢代の宮中図書館の解説付き図書目録『漢書』芸文志の「諸子略」には、諸子百家を十家に分け、その十番目に「小説家」を立てている。小説は「街や巷で聞いたことを路傍で伝え説くような者が造ったものである」といい、孔子のことばを引いて「小道にも、必ず観るべき道理はあるが、小道に拘泥して大事を忘れることを恐れ、君子はそうした小道を学ばない」と述べている。小説は小道なのである。

このように、漢代に支配的な思想となった儒教の態度が、「君子は小道を行わない」、また『論語』にいうように「述べて作らず」「怪力乱神を語らず」「鬼神は敬して之を遠ざく」であったために、長らく小説は民間の話芸や伝承のうちに留まり、文学史の表には現れてこなかった。

ところが、魏晋六朝時代に、おびただしい「志怪」という文言小説が出現することになった。「志怪」とは「怪を志（しる）す」、すなわち不思議な出来事を記録する、という意味で、上記のような孔子の態度に反するものであった。その内容は、神

仙・鬼神・応報・妖怪・再生・道術・草木動物の怪など多岐にわたる。後漢末の黄巾の乱から始まる、長い戦争と分裂の混乱した社会の中で、士大夫知識人たちが儒教の説く「現実主義」に懐疑的になった現れでもあり、仏教・道教といった宗教の強い影響もあった。

これらの話は創作としてではなく、「本当にあった不思議な事実を書き留める」という態度で書かれている。たとえば、代表的な志怪小説集『搜神記』の著者干宝は歴史家であり、公的な歴史書には書けないが、捨てることは出来ない怪事をここに書き留めている。

志怪小説の特徴は、簡潔に「事実」だけを書き留めるため非常に短いことである。作品を面白くするための構成や虚構、登場人物の心情に言及したり、書かれた事件に対して意味を問うことはまれである。その為、読んだときにあっけなさを感じたり、いったいなんだったのかと感想をもつことも度々あるが、そこに独特の余韻を感じ、奥に有るものは何か、と考えさせられる。これが志怪小説の魅力であろう。

この時代にはまた、『世説新語』のような貴族社会に生きる人物たちの逸話を集めた書物も著され、これを「志人小説」と呼んでいる。

唐代に入ると「伝奇小説」が現れる。「伝奇」は「奇を伝える」という意で、内容は志怪小説の流れを汲みながら、奇特な人物の伝記なども加わっている。書き方は意匠に富んでおり、物語の構成に意を用いて明らかな虚構が差し挟まれたり、登場人物の心情への想像も書き込まれ、そのため志怪に比べて数倍、数十倍の長編となっている。伝奇小説が流行した背景には、古文復興運動や科挙の事前運動、転任のための旅行中に旅籠で出会った官僚たちの交流などがあったと言われている。

文言小説は志怪・伝奇ともに宋・元・明にも書き継がれ、清に至って傑作志怪伝奇集『聊斎志異』も誕生している。

白話小説は文言小説よりはるか後に生まれた。よく知られる『三国志通俗演義』『水滸伝』『西遊記』などは明代に成立した長編白話小説である。白話小説の源は唐代の寺院などで参詣者向けに語られた俗講の台本「変文」にまで遡り、その後宋代に民間の講談などの話芸の台本が絵入りで刊行されるようになって、それが明代に長編小説にまで発達する。白話小説には短編もあり、『古今小説』など短編小説集も刊行された。白話小説は文言小説からも数多くの題材をとりこんでいる。白話小説が生まれた背景には、商業の発展に伴う庶民の経済力の増大と文化の大衆化が認められる。

今回私たちが読むのは文言小説のなかの「六朝志怪小説」である。

（2）『太平広記』「神」の部

『太平広記』は、北宋の建国紀念事業として、太宗の命により、『太平御覧』とともに、九八〇年代に編纂され、太平興国年間に成立したため「太平」の名が冠された。全五〇〇巻、目録一〇巻から成っており、当初は写本で伝わり、明代に至って木版本が出版された。

『太平広記』には、漢代から五代までに書き記された四七五種もの書物から膨大な数の話が抽出され、九二の項目（神仙、報応、定数、婦人、夢、神、鬼、妖怪、再生、草木、竜、虎など）に分類して収録されている。各項目に収録された話は、原則として話の時代順に配列されている。これらの話の大半は、「志怪」もしくは「伝奇」と称される所謂文言小説で、出典となった書物の多くは現在すでに散佚している。そのため『太平広記』は中国文言小説研究にとって欠かせない重要な価値を有している。

「神」の部は、巻二九一から巻三一五まで全部で二十五巻が当てられている。この中から、古代から六朝までの話（巻二九一・神一～巻二九四・神四）を、数話ずつ以下のようにテーマ別に取り上げた。

第一部　天の神

第二部　死後に神として祀られた人物

（1）悲劇の死を遂げた男性

（2）神になった女性

第三部　自然神

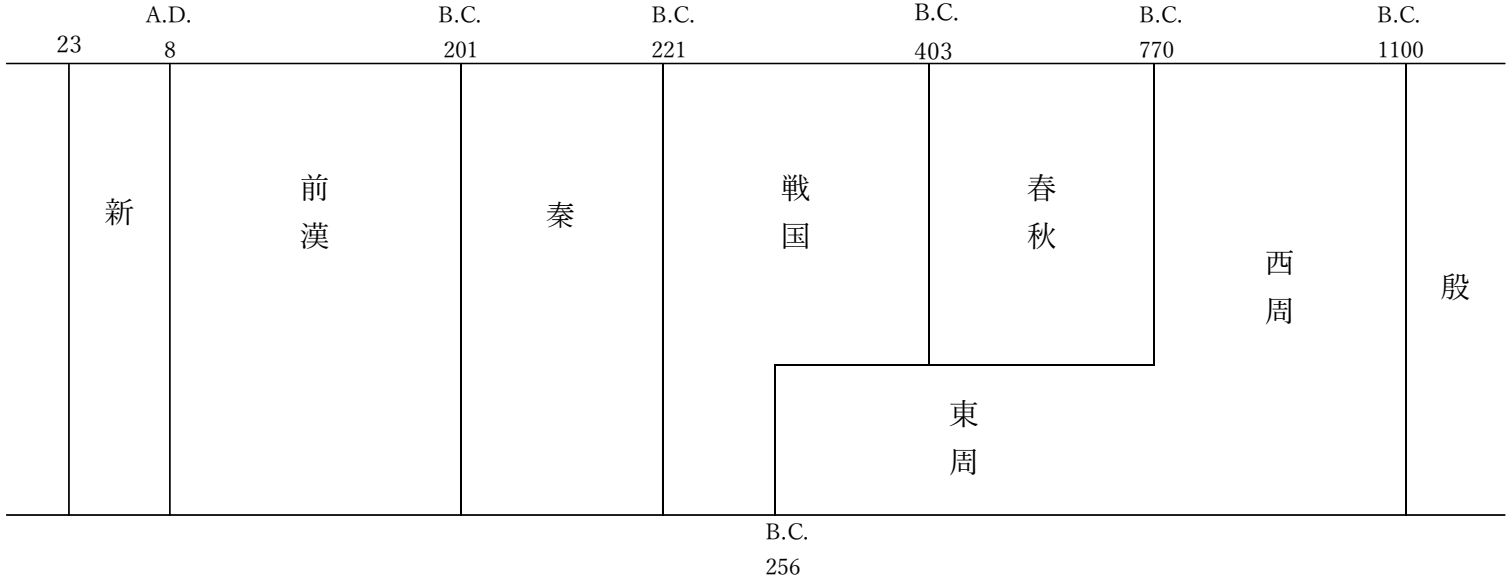
（1）水の神

（2）山の神

この研究会の目的は、六朝志怪小説を通して、作品が生み出された社会とそこに生きた人びとの生活、祈りと神への畏敬を探ることにある。従って単なる作品の訳注にとどまらないよう、各話の訓点を施した原文、読解に必要な注、書き下し文と現代語訳を作成した上で、その後に作品世界に関連する解説とコメントを加えた。これによって読者が六朝時代を生きる人びとの生活と息づかいをすこしでも感じてもらえれば幸いである。

【関連年表】

黒字は主な政治史的事項、赤字は文化的事項と本発表に関わる事項



周の武王、太公望呂尚と共に殷を滅ぼす
武王死し、成王即位、周公旦、摂政となる

平王、犬戎を避け、洛陽に遷都（以後東周と呼ぶ）
斉の桓公、覇者となる（前六七九）
晉の文公、覇者となる（前六三二）
鄭の繆公の在位（前六二七～六〇六）
孔子、誕生（前五五一、四七九没）
呉の伍子胥自殺（前四八八年頃）
晉、韓・魏・趙の三国に分裂、以後戦国時代と呼ぶ
『墨子』この頃成立
楚の屈原の死（前二七七年頃）
秦、周を滅ぼす

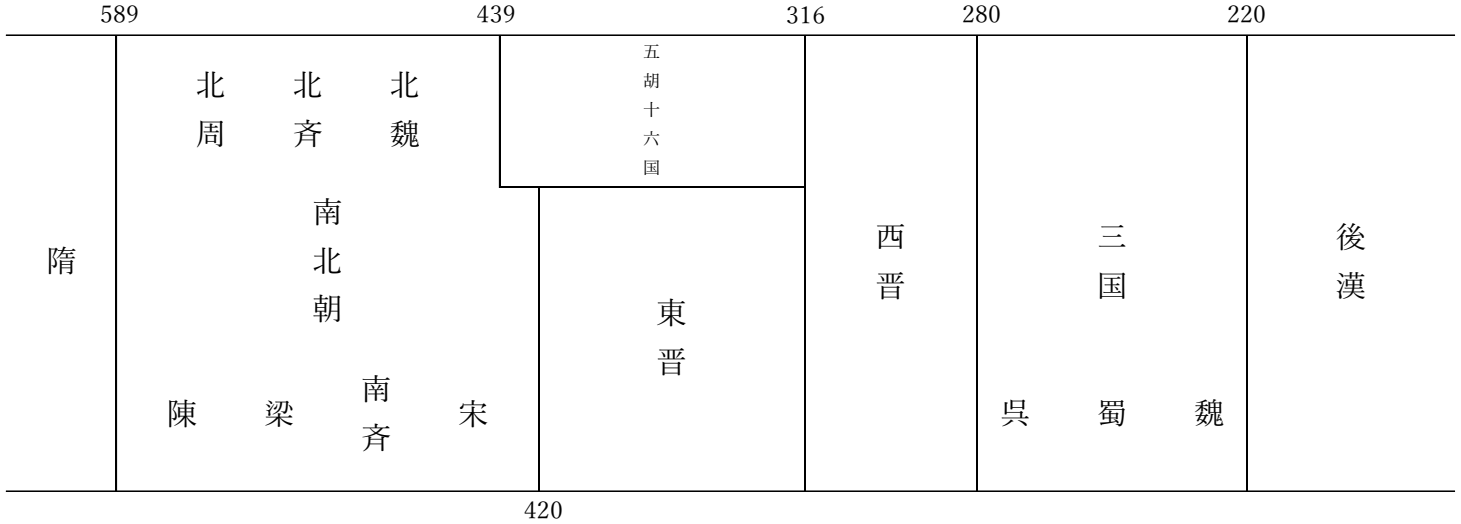
秦の始皇帝、天下統一

劉邦、秦を滅ぼす（前二〇六）
劉邦、項羽を滅ぼし帝位に就く

司馬遷の『史記』、完成（前九七年頃）

王莽の簒奪

劉秀、王莽を滅ぼす
劉秀、洛陽に遷都

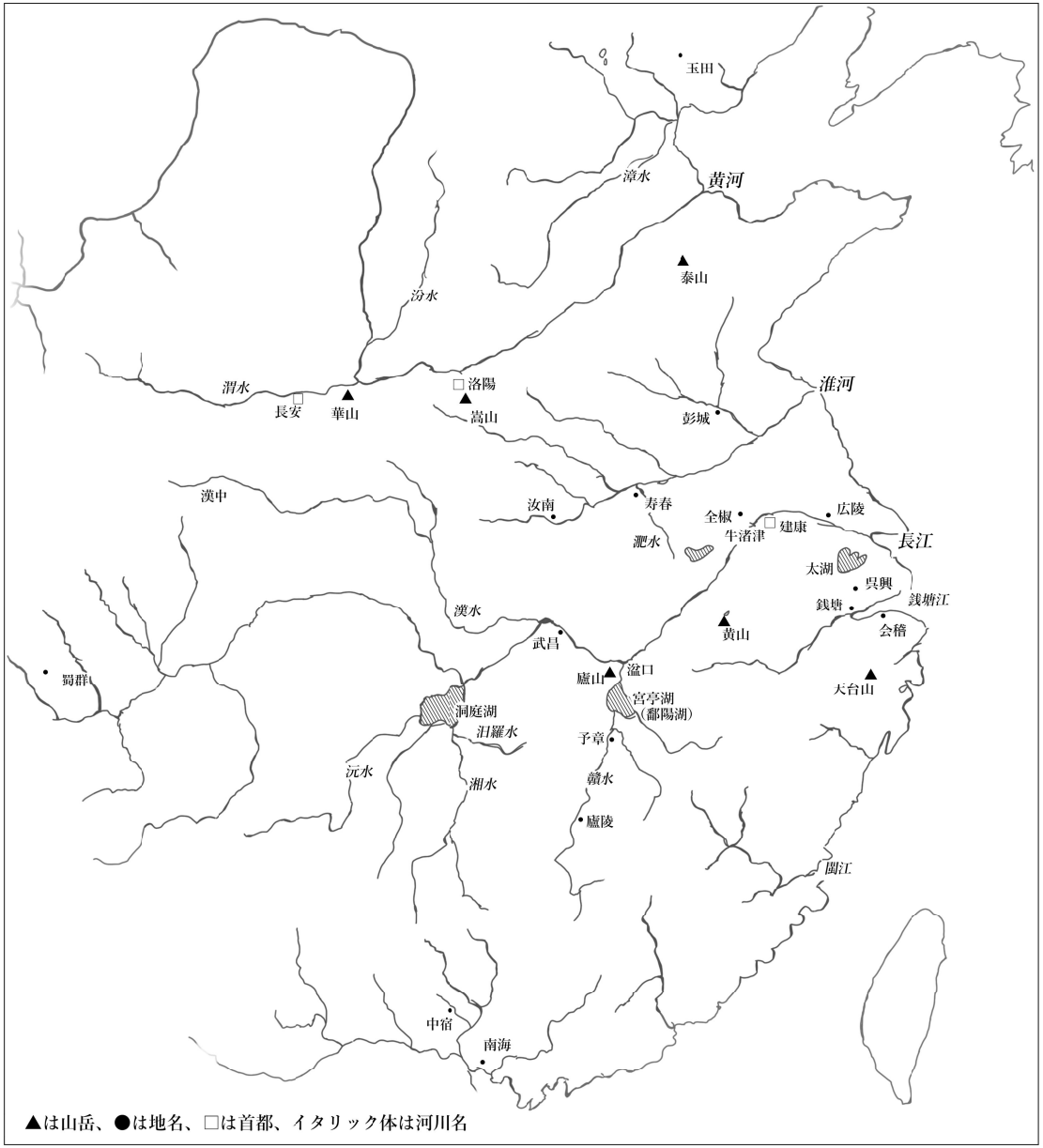


匈奴、南北に分裂（四八）
党錮事件（一六六）欒巴はこの頃の人
黄巾の乱（一八四）
曹操、王朝の実権を掌握
曹丕、後漢を廃し帝位に就く
蜀の劉備、帝位に就く（二二一）
呉の孫権、帝位に就く（二二九）
五丈原の戦い・諸葛亮の死（二三四）

西晉の武帝、天下統一
八王の乱（三〇〇）
五胡十六国の乱始まる（三〇四）
西晉滅び、東晉の元帝即位　葛洪の『神仙伝』この頃成立
『山海経』郭璞注、この頃成立　温嶠の死（三二九年）
『搜神記』の編者干宝の死（三三六年頃）
桓温、寿陽の袁氏一族を滅ぼす（三七一）
王羲之死亡（三七九）
淝水の戦い（三八三）
劉裕、東晉を滅ぼし帝位に就く
陶淵明の死（四二七年頃）
北魏の太武帝、華北統一、この頃『異苑』成立
南斉の高帝、宋を滅びし帝位に就く（四七九）
梁の武帝、南斉を滅ぼし帝位に就く（五〇二）
『文選』『荊楚歳時記』、この頃成立
陳の武帝、梁を滅ぼし帝位に就く（五五七）
西魏滅び、北周建国（五六一）
隋の文帝、北周を滅ぼし、帝位に就く（五八一）
隋、天下統一（五八九）

【関連地図】

主に本篇に関わる地名を記載、地名は各話の時代のもの



＊『太平広記』の版本は、汪紹楹点校『太平広記』（中華書局、一九六一年、以下「中華書局本」と略記）、張国風会校『太平広記会校』（北京燕山出版社、二〇一一年、以下「会校本」と略記）を用い、適宜に校合した。

＊『中国学研究論集』二四～二七号（二〇一〇～二〇一一年、広島大学広島中国学会）に連載された太平広記研究会による「太平広記訳注⑮～⑱　神①～④」（以下、『訳注』と略記）を参照した。

＊各話の標題の下に付した巻数は、『太平広記』の巻数を指す。

＊表紙：天台山系赤城山（個人撮影）

第一部　天の神

「天」は、そこから雨や風、雷などがやって来て、農作物を育てたり水害や干害を起こしたりする。人々の生活を左右するので、感謝したり畏怖したりして祭るようになった。山や川、動物なども祭祀の対象であったが、重んじられたのは天の神と祖先神であった。殷の時代では、帝（上帝ともいい、天の神とみなされる）は天候や農作物、戦争や祭祀などあらゆる事象を主宰するとみなされ、王は占いによって予知したり被害を防ごうとした。殷に代わった周王朝になると、天の神は天帝と呼ばれて至上神であり続けるが、徳のある者には福を不徳の者には禍を与える意思を持つ人格神と意識されるようになり、周王は天からの命（天命）を受けて天子として統治することになった。周王は天命を保持し続けるために徳を身につけ、天神の加護を受けて統治した。天には天帝のほかにも神がいて、なかでも祖先神は地上の子孫たちのために天帝に働きかけてくれると見られていた。それゆえに祖先神の崇拝には、天の神が下す恩恵（長寿や豊作）への期待がこめられていた。天界にいた神々は、『太平広記』所収の説話のなかにも登場しているが、どのように語られているのであろうか。

次に天の神の登場する話を三つ紹介する。（1）鄭繆公、（2）四海神、（3）陽雍の三編で、（1）と（2）は周～春秋時代を、（3）は三国時代を舞台にしている話である。

（1）鄭繆公

巻二九一

鄭の繆公（正しくは秦の穆公）のもとに奇怪な姿の者が現れた。いったいどういう者だったのか。

鄭繆公昼日処廟、有神。人面鳥身素服、面状方正。繆公大懼。神曰「無懼。帝厚汝明徳、使錫汝寿十年、使若国昌。」公問神名、曰、「予為勾芒也。」

『墨子』

【注】

○鄭繆公…本文の出典『墨子』によると、正しくは秦の穆公（在位は前六五九～六二一）である。穆公は西の戎を討伐して領土を広げ、秦が強大になる基礎を

築いて春秋の五覇に数えられる。鄭の繆公（在位は前六二七～六〇六）も国力を高めた君主であり、在位が近いこともあって混同が起きたのかもしれない。ここでは『太平広記』の記述に従って鄭の君主繆公として訳す。

○廟…みたまや。先祖の霊を祀る建物。
○人面鳥身…顔は人間で体は鳥の姿をしている。
○素服…白い服。
○面状方正…厳つい顔をしている。「方」は「四角」をいう。
○帝…万物を主宰する最高の天の神、天帝、上帝ともいう。
○使錫汝寿十年…「使○ー」は使役形。「○をしてーしむ」と読み「○にーさせる」の意味。ここでは○は省略されている。錫は賜う・与える、寿は寿命。
○予為勾芒…「予」は「余」と同じく一人称で「わたし」の意味。「勾芒」は四方の神の一つで東方を司る神で人面鳥身であったという。

【書き下し文】

鄭の繆公昼日廟に処るに、神有り。人面鳥身にして素服、面状方正なり。繆公大いに懼る。神曰はく、「懼るる無かれ。帝 汝の明徳を厚くし、汝に寿十年を錫はしめ、若の国をして昌えしむ」と。公 神の名を問ふに、曰はく、「予は勾芒たり」と。

【現代語訳】

鄭の繆公が昼間に宗廟にいると、神が現れた。顔は人間で体は鳥の姿、白い服を着て角ばった厳つい顔をしていた。繆公はひどく畏れた。神が言うには、「畏れるではない。天帝はおまえの立派な徳を重んじ、おまえに寿命を十年（余分に）与えるようにさせ、おまえの国が繁栄するようにさせなさるのだ」と。繆公が神の名前を尋ねると、神が言った、「私は勾芒である」と。

【出典】

『墨子』 戦国時代の墨子（名は翟）の思想を述べた書。この話は「明鬼」篇（コメントⅡを参照）にある。諸子百家の一つに数えられる墨子は「兼愛非攻」を説いた。「兼愛」とは「博愛」、「非攻」とは「攻撃を非難」つまり侵略を否定することである。墨子が生きた時代は国と国との抗争や君主と臣下、親と子の争いなどが多発し、それは自分の利益を優先して他人を害することから起きるものだとして、戦いを否定し世の中を救うには博愛が必要だと説いた。墨子の学は戦国末期には儒学と世間を二分するほどの勢力であったが漢代に入ると衰微してしまった。

【コメントⅠ　天神とは？】

鄭の繆公のもとに「人面鳥身」の勾芒（こうぼう）が現れ、帝すなわち天帝の意向を伝えに来た。天帝は繆公の徳の高さを認めて寿命が十年延びるように、また繆公の治める鄭国が繁栄するようにしてやるというのである。本文は繆公の寿命が延びたかどうか触れることなく終わっているが、この話は、天の神は徳のある人に恩恵を与えるものだという認識をもとに生まれたのであろう。

周の時代に、天帝は有徳の為政者には福を不徳の為政者には禍をもたらす神とみなされていた。周王は至上神の天帝に徳を認められて命（めい）（天命）を受け、統治をする天子となった。周王や諸侯たちは徳がなくてはならないのであった。小南一郎氏によると、本来「西周的な支配体制の理念からすれば、天が降す命は、周王が独占的にその身に受け、その命を臣下たちに分配すべきものであった」※。つまり天命は周王の独占物であった。

ところが春秋時代には状況が変化する。小南氏は鄭の繆公と同じ春秋時代の虢（かく）公の話を紹介している。虢公が夢を見た。虢公が廟にいると天帝の使者蓐収（じょくしゅう）が現れ、「天帝が命を下して晋の国をおまえの一族に継がせようと言っている」と告げたという話である。小南氏は「これでは、周王を頂点とする命のヒエラルヒーから独立して、虢君自身が頂点に位置する、別個の命の体制が作られてしまうことになる」と述べている。春秋時代になると周王の権威が衰退して天命を独占するのは困難になり、繆公や虢公といった諸侯も天命を受けるようになっていたのである。

天帝は人々の善悪や徳の有無を観察して禍福を下す人格神なのであるが、自ら直接行うことはない。この話では勾芒が天帝の指示によって繆公に寿命を与えると伝えに来ているし、虢君の話では、天命を授けに来たのは蓐収であった。勾芒と蓐収は次の「四海神」にも四海神の一人として登場する。そこでも天帝は姿を現さずに命令・指図をし、その命令・指図を伝えに来る使者が勾芒・蓐収などの天神なのである。また天神が現れたのは、繆公が宗廟にいたときであり、虢公も夢の中で宗廟にいたときであって、ともに先祖の霊を祀る宗廟という場であった。天にいる祖先神と交感する場、祖先神に福を願う場とみなされていたために天神が降ることになっていたのであろう。

「四海神」では祝融や勾芒・蓐収などは人の姿で現れたのだが、この話では勾芒は「人面鳥身」であった。それは天帝の指示を伝えるために天から降りてくるには、鳥のような羽が必要だから、言葉を発するためには鳥ではダメ、口を備える人の顔が必要であったからであろう。天帝との間を往来する神としては空を飛ぶ鳥の要素が想起されたのである。

※小南一郎『古代中国　天命と青銅器』第七章２

【コメントⅡ　墨子にとっての天神とは？】

周王は天命を受けて統治をする、至上神の天帝に認められる天子だったのであるが、春秋～戦国期になると周王室の宗教的権威も政治的権威も衰微し諸侯間の戦争が頻発する混乱の時代になる。徳の有無にかかわりなく強者が弱者に勝利し、天帝は善人や有徳者に恩恵を与えるものだという通念もゆらぎはじめた。

本文が収められているのは『墨子』の「明鬼」篇で、「明鬼」とは「鬼神※の存在を証明」するという意味である。当時すでに天神に対する信仰がゆらぎはじめていたために、鬼神が存在することを証明しようとしたのである。鄭の繆公に天が恩恵を与えた話のほかに、暴君として有名な夏の桀王と殷の紂王は、それぞれ天に命じられた殷の湯王と周の武王に誅伐されたという例を挙げ、善を勧め悪を懲らしめる鬼神が存在するのだと説いている。善人には天から福が、悪事・不正を働く者には天から誅罰が下されるのだから鬼神は存在するのだと説いたのである。

※鬼神とは、日本の「鬼」とは違い、天の神、山や川などの自然神、死者の霊魂などをいい、天帝・天神も鬼神になる。

天・天神の存在をどうとらえていたのか

中国の昔の人々（といっても知識人）は鬼神や天神の存在を信じていたのだろうか。

孔子（春秋時代の末、墨子より少し前）は「敬鬼神而遠之」（鬼神を重んじはするが近づきはしない）と鬼神を敬遠しているが、弟子の顔淵が死んだときのこととして、「噫（ああ）、天喪予、天喪予。」（ああ、天はわたしを滅ぼした、天はわたしを滅ぼした。）と嘆いたとある。孔子は「噫」と悲嘆の言葉を発し、「天は…」と繰り返しただけであった。最愛の弟子顔淵の死を天の意思によるものだと観念したのであろうか。

時代が少し下った漢代の中頃、『史記』を著した司馬遷は、清廉を貫いた伯夷と叔斉は餓死し、孔子の愛弟子顔淵は夭折したのに、暴虐を尽くした盗跖は寿命を全うしたと述べ、「余甚惑焉，儻所謂天道，是邪非邪（わたしはとても当惑する、もしかすると天道といわれているものは、正しいのか正しくないのか）」と言葉を発している。天の道理は勧善懲悪であるはずなのに、そうなってはいないことに対して感じた苦しみを吐露したのであろう。

鬼神や天の神に対する疑問は古くからあったようだが、それでも人の生死や善悪の大きな問題に直面したとき、思わず知らず天の存在が浮かび上がるのではないだろうか。

（藤堂光順）

【参考図書】

・『墨子』　森三樹三郎訳　ちくま学芸文庫　筑摩書房
・『墨子』　草野友子著　ビギナーズ・クラシックス　角川ソフィア文庫

（2）四海神

巻二九一

周の武王が殷を滅ぼすと四海神（四方の神）たち神々が来訪した。そのとき臣下の太公望が見事な対応をしたという話である。

武王伐紂都洛邑。明年陰寒、雨雪十余日、深丈余。甲子平旦、五丈夫乗馬車、従両騎、止王門外、欲謁武王。

武王将不出見。太公曰「不可。雪深丈余而車騎無跡。恐是聖人。」師尚父使人持一器粥出曰「大夫在内、方対天子。未有出時、且進熱粥以御寒。未知長幼従何起。」両騎曰「先進南海君、次東海君、次西海君、次北海君、次河伯雨師。」粥皆畢、使者具告太公。師尚父曰「客可見矣。五車両騎、四海之神与河伯風伯雨師耳。南海之神曰祝融、東海之神曰勾芒、北海之神曰顓頊、西海之神曰蓐収。河伯風伯雨師。請使謁者各以其名召之。」

武王乃於殿上、謁者於殿下門内、引祝融進。五神皆驚、相視而歎。祝融等皆拝。武王曰「天陰乃遠来、何以教之。」皆曰「天伐殷

立レ周ヲ。謹ンデ来リテ授レ命ヲ。願ハクハ勅ニ風伯雨師ニ、各使メヨトレ奉ゼ二其ノ職ヲ一也。」

『太公金匱』

【注】

○武王伐紂…周の武王（姓は姫、名は発）が、即位後十二年二月甲子の早朝に牧野の戦いを起こし、殷の紂王を殺し殷（王朝の名称は商）を滅ぼした。紀元前十一世紀後半のことだという。

○洛邑…今の河南省洛陽市。「邑」は「村落、都市」などの集落をいう。武王は牧野の戦いの後、新たに支配下に入った中原地域やその周辺地域を安定的に統治するために、洛陽に都を設置しようとしが、完成しないうちに亡くなった。

○甲子平旦…「甲子」は十干（甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸）と十二支（子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥）の最初の甲と子とを組み合わせたもの。暦の上では元日や一日のように歳や月の最初をいうことがある。

「平旦」は明け方。『史記』周本紀には、牧野の戦いの日を二月の「甲子」としており、『尚書』牧誓にも「甲子」とする。これら文献の記述には疑われるものが多いが、利簋（青銅器）にも「甲子」の日だと記されているので、文献の記述が正しいということになる。

○丈夫…立派な男。

○将不出見…「将…」は「将に…んとす」と読む再読文字。ここは意思を表して「…しようとする」と訳す。「出見」は「建物から出て会う」こと。

○師尚父…周の名臣呂尚のこと。釣りをしていたときに周の文王に見いだされ、武王（文王の子）を助けて周王朝の樹立に功績を挙げたという。後述する。

○使人持一器粥出…「使○…」は使役形で「○をして…しむ」と読んで「○に…させる」の意味。ここは「人に器に入った粥を持たせて宮殿から出て行かせた」と訳す。後文の「使謁者各以其名召之」も使役形。

○大夫…天子や諸侯に仕えた官吏の身分。卿・大夫・士のうち、卿の下、士の上であった。ここで天子（武王）に対面していたのは師尚父であろう。

○方…「まさに」と読み、ここでは「今ちょうど」の意味。

○且…「しばらく」と読み、「とりあえず・少しの間」の意味。

○長幼従何起…「長幼」は「年長者と年少者」をいう。ここは「長幼有序（年長者と年少者の間には守るべき序列がある）」というように「年齢による序列」の意味を込めている。「従何起」は「どこから始める」の意味。粥を配る順序

について、「どこから（誰から）始めるのか」と尋ねている。
○御寒…「御」は「禦」と同じで「防御・防ぐ」の意味。
○河伯雨師…河伯は黄河の神、雨師は雨の神。後に「河伯風伯雨師」と出てくるが、ここは「風伯（風の神）」が抜けている。
○具…「つぶさに」と読んで「詳しく、すべて」の意味。
○祝融・勾芒・顓頊・蓐収…四書五経の一つ『礼記』月令には、これらが四季の神であって、句芒は春の神、祝融は夏の神、蓐収は秋の神、顓頊は冬の帝（冬の神は玄冥）と記されている。こうした観念は五行説（戦国時代の鄒衍が主張した）とも関係がある。五行説とは、万物を構成する木火土金水の五つの元素が循環するという考えであり、この五つの元素が季節・色彩・方角などに配当されている。

春ー青ー東ー木　…句芒
夏ー赤ー南ー火　…祝融
秋ー白ー西ー金　…蓐収
冬ー黒ー北ー水　…顓頊
土用ー黄ー中央ー土　…ここに該当する神は何であろうか

○謁者…宮中における賓客の取り次ぎをする役人。
○武王乃於殿上、天陰乃遠来…「乃」は「すなはち」と読み、前者は「そこで」、後者は予想外の事態を表して「意外にも・なんと」と訳す。

【書き下し文】
武王紂を伐ち、洛邑に都す。明年陰寒、雪雨ること十余日、深きこと丈余。甲子の平旦、五丈夫馬車に乗り、両騎を従へ、王門の外に止まり、武王に謁せんと欲す。
武王将に出でて見ざらんとす。太公曰はく、「不可なり。雪深きこと丈余なるも車騎に跡無し。恐らくは是れ聖人ならん」と。師尚父人をして一器の粥を持ちて出でしめ、曰はく、「大夫内に在り、方に天子に対す。未だ出づる時有らず。且らく熱粥を進め以て寒を御げ。未だ長幼何れより起くるやを知らず」と。両騎曰はく、「先づ南海君に進めよ。次は東海君に、次は西海君に、次は北海君に、次は河伯雨師にせよ」と。粥皆畢はり、使者具に太公に告ぐ。師尚父曰はく、「客見るべし。五車両騎は、四海の神と河伯風伯雨師とのみ。南海の神祝融と曰ひ、東海の神勾芒と曰ひ、北海の神顓頊と曰ひ、西海の神蓐収と曰ふ。河伯風伯雨師なり。請ふ謁者をして各其の名を以て之を召さしめよ」と。
武王乃ち殿上に於てし、謁者殿下の門内に於て、祝融を引きて進ましむ。五神皆驚き、相ひ視て歎ず。祝融等皆拝す。武王曰はく、「天陰なるに乃ち遠来す、

何を以て之に教へん」と。皆曰はく、「天殷を伐ちて周を立つ。謹んで来りて命を授らん。願はくは風伯雨師に勅し、各其の職を奉ぜしめよ」と。

【現代語訳】

武王は紂を征伐すると、洛邑に都を置いた。年が明けると空は曇って寒く、雪が十日あまり降り続き、一丈あまり積もった。甲子の明け方に、五人の立派な男が馬車に乗って二人の騎馬を従え、王の宮殿の門のところまで来ると、武王への面会を求めた。

武王は会いに出ないでおこうとした。太公は言った、「いけません。一丈あまりの深い雪に車馬の跡が無いのです。恐らく彼らは聖人なのでしょう」と。太公はそこで使いの者に器に入った粥を持たせ、（使いの者に）こう言わせた、「大夫が宮殿の中におられて、ちょうど天子に応対なさっています。まだ（天子が）お出ましになる時間はないのです。ひとまず熱い粥を召し上がって寒をしのいでください。さし上げる順番はどなたからにしましょうか」と。騎馬の二人が言うには、「最初は南海の神にさし上げ、次は東海の神に、その次は西海の神に、その次は北海の神に、その次は河伯と雨師にお願いします」と。粥を食べ終わると、使いの者は太公にありのままを告げた。太公は（武王に）言った、「客人にお会いなさるのがよろしい。馬車の五人と馬に乗った二人は、四海の神と河伯風伯雨師なのです。南海の神は祝融といい、東海の神は勾芒といい、北海の神は顓頊といい、西海の神は蓐収といいます。（他の者は）河伯風伯雨師です。どうか謁者に彼らの名前で呼び出させてください」と。

武王はそこで宮殿の上に出ると、謁者は宮殿の下の門の内側で祝融（たち）を引き入れた。（名前を呼ばれた）五人の神々はみな驚き、顔を見合わせて感嘆した。祝融たちはみな（武王に）拝礼をした。武王が言った、「寒い中なのにはるばる来られた、どのようなことを指導したものか」と。（神々は）みな言った、「天は殷を征伐して周を建てました。謹んで指示を受けにやって参りました。風伯と雨師に、それぞれの職務を行うように命じてください」と。

【出典】

『太公金匱（きんき）』　書名の太公とは太公望とも呼ばれる呂尚のことで、本文中では「師尚父」と称されている。金匱とは銅製の箱。太公望呂尚の優れた事績を集め、大切にしまっておくという意味を込めた名称なのであろう。著者や成立年代についてはコメントⅢを参照されたい。

『太平広記』の文章では話の展開に不明な部分がある。原文の一部が欠落したと思われるので、『太平御覧』巻八二二に記載されている文章に基づき適宜補訂した。

【太公望呂尚と本文の内容】

『史記』斉太公世家によると、呂尚が周の文王の臣となるに至った話が三つ述べられているが、その一つは文王が渭水のほとりで釣りをしていた呂尚に出会い、祖の太公が待ち望んでいたとして太公望と呼び、師としたというものである。文王の死後、武王に仕えて周公らとともに政治を補佐した。功績によって斉（山東省の地）に封じられ、斉の開祖として仰がれた。また牧野の戦いになどの軍事や策謀が高く評価されたのであろう、司馬遷は、軍事を論じ、周の策謀を語る者は、皆太公を祖とし、謀略を始めた人とするのである」と述べている。コメントⅢで述べるように、漢代までに「太公」名を冠する書物、その多くは兵書であるが数多く著されている。

この話では、周の武王が殷を倒した直後に七人の人物が現れ、応対した太公望は彼らが神であると見抜き、武王に名前を呼んで招き入れるようにと進言した。武王がその言葉に従った結果、神々は「天が殷を征伐して周を建てた」と述べている。武王が殷を征伐したのは天帝の命に従ったものである、つまり武王が殷を征伐した戦いが「天命」に従った正当なものであったというのである。後になって殷の紂王の「酒池肉林」という暴虐の話が作られているが、それも殷との戦いを正当化するためのものであった。この話は武王の戦争を正当化し、王を支えた太公望の行為を顕彰するために作られたものと考えられる。これについて次の三つ点から考える。

①太公望のどこが優れているのか。

②登場する四海神や風伯、雨師はなぜ登場するのか。

③この話はいつ、どこで作られたのか。

【コメントⅠ　太公望の優れた行い】

周王朝が開かれた翌年、早朝の雪が積もった中、車に乗った五人の男と騎乗の二人の男が武王のもとに現れた。太公望は雪の上に車や馬の跡がないのを見て尋常の人物ではなく聖人であろうと判断した。武王への面会を許すには、誰なのか正体を知る必要がある。（優れた洞察力）。そこで使いの者に命じて、誰から順番に粥を配ればよいのかと問いかけさせた。最初は誰それに、次に誰それに…という返答を聞きだそうとした。このやり方で見事に訪問者の素性を聞き出すことに成功した（優れた判断力）。素性を聞いた太公望はそれらの神の名前を知っていたので（博識）、武王に神の名前を知らせて、訪問した神を名前で呼び出すようにと進言した。名前で呼ばれた神々が「みな驚いて、顔を見合わせて感嘆した」というのは、武王が自分たちの名前を知っていることに驚いたのである。自分たちが誰で何者であるのかを知っている、武王は一面識もない自分たちの素性を見抜く能力を備えているのだと思い、臣下として仕えるに値する王であると認識し

たというのである。名前を知ることには大きな意味があり、太公望はそれを巧みに利用している。

太公望は相手の素性を見抜く洞察力、神々の名前を熟知している知識力、名前の持つ力を利用する賢明さも備えていたことがわかる。王朝を開いた武王の手柄話ではなく、武王に仕えてその大業成就を支えた太公望呂尚の才能を説いた話なのである。

名前を知ること

・工藤男氏は次のように述べている。

旅に出る人が身につける護符には鬼神・妖怪に投げつけるとそれを「劾」（調伏）する力があった。…（漢代遺跡から発掘された）護符の文中に「已に汝の名を知る」という文言 が見える。そう叫ぶと、鬼神は自分の素性を相手に知られてしまったと思い通力を失ってしまうのである。

（『中国古代文明の謎』光文社文庫）

・雄略天皇が詠んだ長歌に、嬢子に「名前を告げてください」と語りかけるものがある。

籠もよ（こ） み籠持ち ふくしもよ みぶくしもち 家告らせ（の） 名告らさね
そらみつ 大和のくには…

武田吉氏は「古代に在っては、人々は名に対して特別の意味を感じていた。人に名を知られることは、その人に自己の全人格を支配されることである。それ故嬢子に名を問うことは、婚姻を申し入れることになり、嬢子が名を教えることは、申し入れに応じたことになる。…」と述べている。

（『萬葉集全註釋一』角川書店）

名前を知ることには、この話で太公望が相手の名前を聞き出したことに通じる働きがあるように思われる。

この話に述べられている武王や太公望は実在したし、武王が洛邑に都を築いたというのも、牧野の戦いの後に都の造営を始めて完成しないうちに亡くなったが、やはり事実とみなすことができる。では四海神や他の神々はどのような存在だったのか、この点を検討しよう。

【コメントⅡ　四海神や風伯、雨師とはどのような神なのか】

この文章には武王や太公望呂尚など実在したであろう人物の他に、四海神、河伯、風伯、雨師などの神々が登場するが、どのような役割を果たしているのだろうか。勾芒は「鄭繆公」の話では天神に従属する神として登場していが、四方神

の一人でもあった。四海神は『礼記』などに四季や四方（方角）を司る神として記されているが、この話のように人の姿をもって描かれてはいない。また太公望や武王は『史記』周本紀や斉太公世家に記述があるが、これらの神々については記述が無い。

ではこれらの神々が武王のもとに現れたのはなぜなのか。まず車に乗った「五人」とは、四海神（四方の神）とあと一人の神である。彼らが従えていた騎乗の二人は風伯（風の神）と雨師（雨の神）であるから、あと一人の神とは河伯（黄河の神）なのであろう。これら七神のうち四海神と河伯は空間・地域を司り、風伯と雨師のは天候を司る神である。四海神は東西南北の四方を司る神であるが、河伯（黄河の神）はどうなのか。その空間的な位置を考えると、黄河は華北（殷・周の領域にあたる）を流れる大河で、武王が都を置こうとした洛邑（今の洛陽）の直ぐ北を流れている。四海神の四方を意識するには中央の視点が必要になるが、洛邑は「中国」つまり「国の中央」に位置すると認識されていたので、洛邑の神が中央の神にあたると意識され、黄河の神の河伯が登場することになったのであろう。これには【注】でも触れた五行説が関係していると考えられる。

春ー　青ー東　ー木　…句芒
夏ー　赤ー南　ー火　…祝融
秋ー　白ー西　ー金　…蓐収
冬ー　黒ー北　ー水　…顓頊
土用ー黄ー中央ー土　…ここに該当する神は河伯

四海神は四方を司る神であるが、中央を司る神が必要なので河伯が加わることになった。これら「五人」の神は、東西南北と中央の領域を司るつまり全土を司る神になる。このほかの「二人」風の神と雨の神は天候に関わっており、農耕を生業とする人々に大きな影響を与える神である。「五人」は周の支配地域を司る神、「二人」はそこに暮らす人々に天の恵みをもたらす神なのであった。

これらの神々は至上神の天帝の配下にあって命令に従う存在であり、その神々が殷を滅ぼした武王のもとを訪れて、「天が殷を征伐し周を建てましたので、（職務についての）命令を授かりに参りました。…」と語っている。つまり武王が殷を滅ぼし新しい王朝を開創したのは天帝（天の神）の意向に沿っており、武王は天命を授けられるべき天子であるということを述べているのである。

【コメントⅢ　この話はいつどこで作られたのか】

太公望呂尚の優秀な点を述べた話であるが、積もった雪の中訪れた人物の足跡が無いことから神であろうと見抜くことや、温かい粥を勧めて神の名を聞き出すこととか、呂尚の優れた知恵を示す叙述には、言い伝えとは見なしがたい巧みな筋立てがある。そこにはこの話を創作した語り手の優れた知恵が感じられる。ま

た登場人物や、殷を滅ぼした後に洛陽に都を置こうとしたこと、「甲子平旦」に出来事が起こったことなどは、伝承によって受け継がれてきたとも考えられるが、やはり知識人でなければこの叙述はできないであろう。描かれている時代は西周の初めと古いのだが、巧みな筋立ての創作はこの時期（後漢～魏晋南北朝期）の志怪小説（事実として伝承・筆録された）には見られないものである。やはり単なる伝承ではなく、太公望呂尚を顕彰しようとする知識人、おそらく南北朝の後半期の人によって創造されたのではなかろうか。

この話を収めた『太公金匱』が成立した時期を考えると、唐初に編纂された『隋書』の経籍志（図書目録）兵家に記されているので、『太公金匱』は七世紀の初頭には存在していたのである。『隋書』には他にも『太公六韜』・『太公陰謀』など「太公」を冠する書物が全部で十種記されている。さかのぼって漢代の図書目録『漢書』藝文志には、「太公　二百三十七篇。呂望為周師尚父，本有道者。或有近世又以為太公術者所增加也。謀八十一篇、言七十一篇、兵八十五篇」とある。全部で二百三十七篇と大部で謀・言・兵と分けられているが、「太公」とあるだけで「金匱」「六韜」などの名称を欠いている。また「呂望は周の師尚父である」というが、もちろん著者ではなく、呂望に仮託したのである。おそらく漢末から唐初の間に、謀・言・兵に分けられていた二百三十七篇が十種の書物に編まれ、書名が与えられたのであろう。また『漢書』に「或有近世又以為太公術者所增加也」とあるが、「近世」とは秦・漢の時期（戦国時代も含むかも）、その時期に太公の術を修める者が増やしたものを含むというのである。この記述から考えると、その後も南北朝時代にかけて太公望呂尚に仮託する文書が補足されていった可能性は否定できないのである。なお、鈴木達明氏は『六韜』の成立について考察し、現存の『六韜』の文章と『太公金匱』の文章とを比較検討して、次のように述べている。

『六韜』に比べ、『金匱』には神秘的・呪術的な内容や、箴・銘・説話の形式に傾く性質があったと考えられる。ただ１４（この話を指す）などは、武王の即位後に天下の神々が訪ね来て王を試すのを太公が計を用いて対処するという志怪小説に類する説話であり、六朝期以降の成立の可能性が強く疑われ、それらの例にどこまで『金匱』本来の姿を求めることが許されるかは、難しい問題である。（『中国文学報』第八十冊）

やはり六朝期に作られた話とみなすことができるのであろう。

（藤堂光順）

（3）陽雍　　巻二九二

三国時代のこと。陽雍という男が天の神の援助を受けた結果一族が繁栄することになったという話。天の神はどのように登場するのだろうか。

魏陽雍、河南洛陽人。兄弟六人、以傭売為業。公少修孝敬。達于遐邇。父母歿、葬礼畢、長慕追思不勝心目。乃売田宅、北徙絶水漿処、大道峻坂下為居。晨夜輦水、将給行旅、兼補履屩、不受其直。如是累年不懈。

天神化為書生、問曰「何故不種菜以給」。答曰「無種」。乃与之数升。公大喜種之、其本化為白璧、花為銭。書生復曰「何不求婦」。答曰「年老、無肯者」。書生曰「求名家女、必得之」。

有徐氏、右北平著姓、女有名行、多求不許。乃試求之、徐氏笑之、以為狂僻。然聞其好善、戯答媒曰「得白璧一双、銭百万者、与婚」。公即具送。徐氏大愕、遂以妻之。生十男、皆令徳俊異、位至卿相。今右北平諸陽、其後也。

『孝徳伝』

【注】

○陽雍…この人物については不明であるが、本文にあるように右北平郡の有名な一族陽氏の基を築いた人物とされている。

○河南洛陽…魏の都の河南郡洛陽県。今の河南省洛陽市の東約六十キロにあった。
○遐邇…遐は遠い、邇は近いこと。
○傭売…行商などをする人、小商人(こあきんど)。
○不勝心目…「心目」は「まのあたりに記憶しているたとえ」をいう。「心目に勝へず」とは、両親のありありとした記憶に伴う悲しみに耐えきれないということ。
○絶水漿処…ここの「水漿」は飲用水。「絶水漿処」は飲用水が入手できない所。
○晨夜…晨は朝、早朝のこと。「晨夜」は、「朝早くから夜遅くまで」の意味。
○将…「以」と同じく手段などを提示して「ーによって・ーでもって」と訳す。
○補履屩…履は履物、草履。屩も麻やわらを編んで作った履物。補は、①繕う・補修する、②不足の物を補うの意味がある。ここは①として訳した。
○何故不…「何故不ー」は疑問文、「どうしてーしないのか」の意味。後ろの「何不ー」も同じ。
○数升…中国のこの時代の一升は、約二〇〇cc。
○白璧…白い玉(ぎょく)の璧。璧は玉器の名で、平たい円形で中央に孔がある。
○肯…許可する、承知するの意味。
○右北平…郡の名、当時の役所は今の河北省唐山市豊潤区に置かれていた。
○著姓…有名な家柄。
○名行…名声と品行。
○狂僻…僻はかたよっていること、狂僻は今でいう「いかれたやつ」。
○媒…結婚の仲立ちをする人、仲人。
○得〜者…ここの「者」は仮定条件を表し、「〜ば」と読む。ここでは「ば」を「得れば」としているので置き字扱いになる。
○具…「つぶさに」と読んで「すべて」の意味。ここでは白璧一対と百万銭を両方ともということ。
○卿相…天子や諸侯の政治を補佐する大臣。

【出典】
『孝徳伝』は南朝梁の元帝（蕭繹）撰。現在では数条の断片的な記事を除けば、この「陽雍」一編のみが完全な形で『太平広記』に残っている。

【書き下し文】
魏の陽雍、河南洛陽の人なり。兄弟六人、傭売を以て業と為す。公少(わか)くして能く孝敬を修め、遐邇(かじ)に達す。父母歿し、葬礼畢(を)はるも、長慕追思し、心目に勝(た)へず。乃ち田宅を売り、北のかた水漿を絶つ処に徙り、大道峻坂の下に居を為す。晨夜水を輦(はこ)び、将て行旅に給し、兼ねて履屩(りきゃく)を補ふも、其の直(あたひ)を受けず。是の如

きこと累年懈(おこた)らず。天神化して書生と為り、問ひて曰はく、「何の故にか菜を種ゑて以て給せざる」と。答へて曰はく、「種無し」と。乃ち之に数升を与ふ。公大いに喜びて之を種うるに、其の本は化して白璧と為り、花は銭と為る。書生復た曰はく、「何ぞ婦を求めざる」と。答へて曰はく、「年老ひ、肯(がへ)んずる者無し」と。書生曰はく、「名家の女を求むれば、必ず之を得ん」と。

徐氏有り、右北平の著姓にして、女に名行有り。多く求むれども許さず。乃ち試みに之を求むれば、徐氏之を笑ひて、以て狂僻と為す。然れども其の善を好むを聞き、戯れに媒に答へて曰はく、「白璧一双、銭百万を得れば、婚を与さん」と。公即ち具に送る。徐氏大いに愕き、遂に以て之に妻す。十男を生むに、皆令徳俊異にして、位卿相に至る。今の右北平の諸陽は，其の後なり。

【現代語訳】

魏の陽雍は河南洛陽の人である。六人兄弟で、日雇いで働いていた。陽公は若いころから孝行を実践し、その評判は遠近に広がっていた。父母が亡くなり、葬儀も終わったが、両親のことをずっと慕い思い続け、ありありとした（両親の）記憶に耐え切れないほどであった。そこでなんと家・田畑を売り払い、北方の水の便の無い場所に移り、大道の急な坂の下に家を構えた。朝な夕なに水を車に乗せて運び上げ、それによって旅行く人々に与え、さらに履物を繕ってやったが、その代金を受け取らなかった。このようなことを何年も続けて、決して怠らなかった。

天神が書生に姿を変え、尋ねた、「どうして野菜を植え収穫しないのだ」と。陽公は、「種がないので」と答えた。すると神は公に数升の種を与えた。陽公は大いに喜びこれを種まきしたところ、野菜の根元は白璧となり、他の部分は銭となった。書生がまた尋ねた、「どうして妻を娶らないのか」と。「年を取ってしまい、妻になろうと人がいないのです」と答えた。書生は言った、「名家の娘を求めたら、きっと妻にすることができますよ」と。

徐氏という右北平郡の著名な一族がいて、その娘は行い正しいと評判だった。求婚するものが多かったが、誰も認めなかった。そこで陽公は試しに求婚した。徐の家では笑い飛ばし、陽公をいかれたやつだと思った。しかし陽公が善行を好むと耳にすると、ふざけて仲人に返答した、「白璧一対と百万銭をくれるのなら婚姻を許そう」と。陽公は直ちにそれらをすべて揃えて送った。徐の家は大層驚き、遂に娘を陽公に娶(めあわ)せた。息子が十人生まれたが、みな徳は高く人並外れた才能を備えており、位は大臣に至った。今の右北平郡の陽氏の人々はその後裔である。

【コメントⅠ　主人公陽雍の「孝」と「義」】

主人公陽雍は貧しいけれども親孝行ということで大変評判だったというが、生前に両親にどのような孝行をしたのかは書かれていない。書かれているのは両親の葬儀が終わった後も長く両親のことを慕い続けていたことだけ。主人公はさらに赤の他人の旅人に対しても水や履物をふるまい、代金を受け取らない自発的な道徳行為、一言でいえば「義」なる行為を行った。天の神がその行為に感動し、主人公を助けて財貨を与え、主人公はその地方の有名な一族の娘を妻にすることができ、子々孫々朝廷の高官を輩出する一族の祖になったという。

この話のように、孝行とは生きている親に対する行為のみをいうのではなく、その死後も立派に葬儀を執り行い、さらに長く追慕することもまた孝行であった。さらにこの主人公のように優れた子孫を残し、代々高官を輩出し、一族を有名にすることもまた「孝」の要素になっている。この点、生きている親に対する行為のみを「孝行」と捉える我々現代の日本人とは大きく異なっている。そして天の神を感動させた主人公の「義」なる行為は、家庭内の道徳的行為「孝」の実践者であった主人公が、家庭外・家族外にも道徳的行為を行いうる人格者であることを意味し、それが子々孫々高官を輩出するというさらに次元の高い「孝」を達成する要因とされている。いわば身近な家庭内の道徳は家庭外の義なる行為に繋がり、それがまた家庭内・一族内の孝に戻るという循環回路になっている。

【コメントⅡ　お話の陽氏と歴史上の陽氏】

ところで末尾に右北平（郡）の陽氏の名が挙がっているが、この一族は実際に存在し、西晋末（三〇〇年ころ）から河北地方で著名な人物を輩出している。その一人は、戦乱のなか河北地方に流れつきそこで息絶えた人々を埋葬し、その遺児たちを養うなど、あたかもこの話の主人公を彷彿とさせる行為を行っている。おそらくこの話は、陽氏の実際の在り方を踏まえて、その「義」なる行為こそ、人々から高貴な人物として尊敬されるもとであることを強調するものとして、いつしか形成され、梁の元帝によって文章として纏められたものと考えられる。

この話のいま一つの中心は、天の神から与えられた野菜の種を植えたところ、玉と銭が生えてきたということである。実はこの部分の話には先行する類話があり、志怪小説集、即ち怪異を志（しる）した話を集めたものとして有名な『搜神記』（四世紀、東晋の干宝撰）に収められている。そこでは神が野菜の種ではなく、石ころを与えて畑に植えさせた、そしてその畑が後に玉田と呼ばれるようになったという。また六世紀前半に成立した地理書『水経注』には、陽氏の出身地である右北平郡の無終山には玉田という土地があることが記されている。そして玉田の名は、現在にも河北省唐山市玉田県として引き継がれ残っている。歴史上の陽氏とこのお話の主人公陽雍、そして河北省唐山市の玉田県、『水経注』に記載された

無終山中の玉田と『捜神記』の話の中の玉田は、歴史の中の現実と、お話（小説）とが遠く離れたものではないことを感じさせる。中国の人々の過去の捉え方の一つを示しているとも言えるであろう。

（榎本あゆち）

（4）「天の神」のまとめ

「鄭繆公」の話が生まれたのは戦国時代のころ、「四海神」や「陽雍」が生まれたのは南北朝の時代。およそ五百～九百年の隔たりがある。この時間の経過とともに、天神の世界にも変化があったように思われる。そこでこの期間に生まれた天神の登場する三話を、粗筋にして紹介しよう。

・「劉向」…学者として学問に励む劉向（前漢時代の人）の話。出典は『王子年拾遺記』

前漢の終わりごろ、劉向が夜中に宮中の図書館で仕事をしていると黒い服の老人が現れ、劉向に天地開闢以前の事柄を説き、さらに五行洪範を教授した。劉向は服を裂いてその言葉を書き記した。夜が明けると老人は去って行くが、向がその名を尋ねると、老人は「私は太一の精である。天帝が金卯（劉）の一族で博学な者がいると聞いて、私に地上に降りてその者に学問を教るようにと命じたのだ」と応えた。…

この話では、劉向のもとに現れた老人は「太一の精」と自称し、天帝から金卯（劉）の一族で博学な者に学問を教授させるために遣わされたと語っている。「太一精」とは太一神のことであろう。『楚辞』東皇太一にも登場するが、戦国から秦漢時代にかけて楚地方の民間信仰における神であった。それが「天の神の中で最も貴い」と言う方士の言説に従った漢の武帝によって都の南東の郊外で祀られるようになった。この話では、その太一神が天帝からの指示で劉向のもとに遣わされている。天帝は従属する神々を遣わすのだが、楚の地方で生まれ、武帝によって国家祭祀に取り入れられることになった太一神も天帝に従属する神となった。天帝のもとに祖先神や天神のほかに太一神（これも天神であるが）が新たに加わったのである。

また天帝が女性を遣わしたという話がある。

・「董永」…両親を亡くした孝行息子、前漢時代の貧乏で独身の董永の話。出典は『搜神記』と『孝子伝』

董永は父が亡くなったのに葬式の費用が無かったために身を売り、その代金を葬式に充てたが、主人は永の心がけに感じて自由な身にしてやった。永が三年の喪を終え、主人のもとに戻って働こうと帰る途中で女性に出会った。女性は永の妻になりたいと言い、二人して主人の家に行った。妻は主人の求めた百疋の絹をわずか十日で織り上げると、自分は天の織姫であり、永が親孝行なので天帝が借金の返済を助けるようにと遣わしたのですと言い終えると、あたり一面に霧が立ちこめると、突然飛び去ってどこに行ったのかわからなくなった。

・「白水素女」…両親を亡くした貧乏で独身の謝端という東晋時代の男の話。出

典は『搜神記』。

身寄りの無い謝端という真面目な若者が大きな田螺を拾って家に持ち帰り、水がめに入れておくと、野良仕事から帰るたびに食事の支度ができていた。何日も続いたので不思議に思い、出かけたふりをして様子を窺うと、水がめの中から少女が出てきて食事を整えた。謝端が尋ねると、自分は天の川の白水素女で、天帝が真面目で貧しく独り身の端を哀れんで遣わしたのですと答えた。端はずっとここに留まってほしいと頼んだが、正体を知られたのでもうここには居られないと断り、田螺の殻に入っている米は無くなることがないので大丈夫と言い残すと、突然去って行った。端は祠を建てて神として祀った。

董永も謝端も両親を亡くし、貧乏で独り身という哀れな男の共通点があり、真面目、親孝行という徳目もある。またどちらの話も女性が天帝に遣わされ、哀れな独身男性の妻となり将来の暮らしに困らないようにと手配している。親孝行な陽雍では天神が書生に姿を変えて現れ、結婚できるようにと手助けをしている。

董永は漢の時代、陽雍は三国時代、謝端は西晋時代の話であろう。漢代から時代が下ると「孝」の人物が天神に認められるようになっている。「孝」とは人間の基本的で普遍的な道徳規範であるが、この時期に儒教の経典『孝経』が幼児教育のテキストとして普及し、「孝」が人々の間に徳目として広がっていく。そのような状況が親孝行な男が天帝の恩恵を受けるという話の誕生に影響したのであろう。また三つの話に共通する、貧乏で独身な男が親孝行、勤勉、義などを徳として天帝に認められて恩恵を受けるという筋立ては、当時の庶民の生活状況や雰囲気を背景にして生まれ、語られることになったと考えられる。

『太平広記』の中から天の神が登場する話を紹介してきた。その話に取りあげられた人物に着目すると、周の武王や太公望、鄭の繆公の話と董永、謝端や陽雍など三国～南北朝時代の話とには違いがみられる。それをまとめると、次のようになる。

○周王は天帝の下す命を受けるべき人物であるが、武王は殷を滅ぼしたという働き＝徳と周王朝の開創を天帝に認められ、遣わされた四海神、勾芒などの天帝の代理の天神に承認を告げられている。民の統治が認められたというのである。

○春秋時代の繆公は諸侯、すなわち領国の統治者であるが、天帝に徳を認められて、長寿と国の繁栄を保証されている。天帝の下す命は西周の時代には周王だけが受け、その命を諸侯・臣下に分配するものであったが、時代が降って春秋期になると諸侯の繆王自身が命を受けるようになっている。

○董永と謝端、陽雍は無名の庶民であって、周の武王や鄭の繆公のような政治上の地位は無く天帝の命を受ける存在ではない。親を亡くし貧乏で独身という哀れな男である。彼らが親孝行、勤勉で生真面目、義などを天帝に徳として認められ、遣わされた女性（陽雍では天神）に資産や生活に対する支援を受けてい

る。

最後に、これらの神々は「天の神」として天界に居ると見なされていたはずだが、天帝（上帝・帝）は天界にいても姿を現していない、天帝の他に天界には祖先神や天神（祝融、蓐収など）も居たのだが、紹介した話に祖先神が登場することはなく天神が天帝の命の代理執行者として登場していた。また時代が降ると、董永や謝端のもとには女性が遣わされているが、この女性たちもやはり天界に居て天帝から地上に派遣されたのである。『史記』天官書によると、織姫は天帝の孫娘であったという。

また姿を消す場面では、「董永」では「忽飛而去」、「白水素女」では「翕然而去」と、どちらも「突然去って行った」という。逆に登場する場面では、四海神たちは積もった雪の中に現れたのだが足跡が無かったし、鄭の繆公は白昼に先祖の霊を祀った宗廟に居たところ、人面鳥身の天神が現れたという。これらは、天界から降りてくる、天界へと去って行く際の不思議な状況を述べていて、説話的な叙述とも思える。しかし、遙か遠くの天界、異界に住む天神が、困難であるはずの境界を越えて地上との間を移動するのである。あっという間に移動する、鳥の姿で移動するなどというのは、当時の人々が境界を越える移動を意識していたから生まれたのではないだろうか。

・『諸子百家〈再発見〉』（浅野裕一・湯浅邦弘編　岩波書店　二〇〇四年）第三章所収菅本大二著「天と人との距離」。中国古代において「天」をどのように考えていたのか述べられている。

（藤堂光順）

第二部　死後に神として祀られた人物

一　悲劇の死を遂げた男性

悲劇的な死を遂げた男を人々が祀るようになったというもので、伍子胥、屈原、袁双の三つの話を紹介する。

（1）伍子胥　　巻二九一

父と兄を殺され、復讐心に燃えた伍子胥の話である。恨みと怒りをのんで死んだその霊魂が、銭唐江の海嘯と呼ばれる大逆流とともに姿を現すという凄まじい情景が描かれている。

伍子胥累諫呉王、賜属鏤剣而死。臨終、戒其子曰、「懸吾首於南門。以観越兵来。以鯲魚皮裹吾尸、投於江中。吾当朝暮乗潮、以観呉之敗。」自是自海門山潮頭洶高数百尺、越銭塘漁浦、方漸低小。朝暮再来、其声震怒、雷奔電走、聞百余里。時有見子胥乗素車白馬在潮頭之中。因立廟以祠焉。廬州城内淝河岸上、亦有子胥廟。毎朝暮潮時、淝河之水、亦鼓怒而起、至其廟前、高一二尺、広十余丈、食頃乃定。俗云、与銭塘潮水相応焉。

『録異記』

【注】

○伍子胥…（？～前四八四）　春秋時代楚の臣。名は員、子胥は字。父と兄を

平王に殺され、呉に亡命して闔閭（かふりょ）に仕え、楚を討って報復をとげた。後に夫差を諫めたが退けられ、讒言（ざんげん）によって自害を命じられた。

○属鏤剣…呉王夫差が伍子胥に与えて自害を命じた名剣。

○鯥魚…鯰。『史記』伍子胥列伝には「鴟夷（酒を貯える革袋）」とある。

○当…当然の意を表して「…しなければなせない」などと訳す。

○方…「まさに」と読み、「やっと、ようやく」の意味。

○漸…「やうやく」と読み、「だんだんと」の意味。

○数百尺…一尺は約二五センチ。

○銭唐漁浦…銭唐は現在の浙江省杭州市。漁浦は浦の名称、現在の紹興市蕭山区の西南にあった。

○震怒…おおいに怒る。ここでは激しい音のさまを表す。

○百余里…一里は約四五〇メートル。

○雷奔電走…雷鳴や稲妻が瞬時に光り鳴り響くように、速く進み伝わるさま。

○素車白馬…白馬が牽く白い車（白木の車）。葬式、降伏など凶事に用いた。

○廬州…現在の安徽省合肥市を治所としておかれた州。

○淝河…淝水、合肥市から北流して淮河に注ぐ。

○岸上…岸辺。「上」は「ほとり」の意味。

○鼓怒…水などが大きい音をたてて鳴り響くこと。

○十余丈…一丈は約二・五メートル

○食頃…食事をするほどの短い時間、まもなく、しばらく。

【書き下し文】

伍子胥　累（しき）りに呉王を諫め、属鏤剣（しょくるけん）を賜はりて死す。終りに臨み、其の子を戒めて曰はく、「吾が首を南門に懸けよ。以て越兵の来るを観ん。鯥魚（ていぎょ）の皮を以て吾が尸（しかばね）を裹（つつ）み，江中に投ぜよ。吾当に朝暮に潮に乗じ、以て呉の敗るるを観るべし」と。是れより海門山より潮頭洶高すること数百尺、銭塘の漁浦を越え、方（はじ）めて漸（やうや）く低小たり。朝暮に再来し，其の声震怒し、雷奔電走して百余里に聞こゆ。時に子胥の素車白馬に乗りて潮頭の中に在るを見る有り。因りて廟を立て以て焉（これ）を祠（まつ）る。廬州城内の淝河の岸上に、亦た子胥の廟有り。朝暮の潮の時毎に、淝河の水、亦鼓怒して起（た）ち、其の廟前に至れば、高さ一二尺、広さ十余丈、食頃にして乃ち定まる。俗に云ふ、銭塘の潮水と相ひ応ずと。

【現代語訳】

伍子胥はたびたび呉王夫差を諫め、呉王から属鏤（しょくる）（という名剣）を下賜され（その剣で）自死した。死に臨んで息子を戒めた、「わしの首を（都の）南門に懸けよ。それで越の軍勢が都に攻め入るのを見届けよう。鯰の皮でわが遺体を包

み川に投じるのだ。わしはきっと朝夕に満ち潮に乗じて、呉が滅びるのを見届けよう」と。それ以来、海門山のあたりから（満潮時に遡る）波は盛り上って数百尺にもなり、銭塘県の漁浦を越えると、やっと（波は）段々と低くなるのだった。朝と夕の二度波は遡り、その音は激しく響き渡った。雷や稲妻のように速くその音は百里四方に響き渡った。時には伍子胥が白馬の牽く白木の車に乗って波頭に立っているのが見えることがあった。そこで人々は廟を建てて子胥を祀った。廬州城内の肥水の岸辺にも伍子胥の廟がある。朝夕の満潮時にはいつも肥水の波が激しく沸き上がり、廟の前までくると、高さ一二尺、幅十丈あまりになり、しばらくしてやっと収まるのだった。世間では銭唐江の潮水と呼応していると言っている。

【出典】

『録異記』。この話を収めた『太平広記』にはもともとその出典が書かれていない。『太平広記会校』では、唐末五代の道士杜光庭が編纂した『録異記』が出典だとしている。

【コメントⅠ　『史記』に描かれた伍子胥】

『史記』によると、伍子胥の先祖は諫言をしたことで名を著し、その子孫は楚の名家となった。父の伍奢は楚の平王の後継ぎを巡って平王を諫めたが、讒言にあって伍尚（子胥の兄）ともども殺された。子胥は宋へ、そして鄭へと逃れ、呉に亡命して呉王闔廬に仕えた。呉が楚を攻撃して都に入城したとき、子胥は平王の墓を暴いて屍を取り出し、三百回も鞭打ってからやっとやめた。復讐のための激烈な行為であった。その後闔廬の後を嗣いだ夫差は南方の越（王は句践）との戦いを始めたが、寵臣の太宰嚭が説く講和策に従おうとした。子胥は諫めたが、夫差は子胥とは不仲であった太宰嚭の讒言を信用してしまい、使者に属鏤の剣を持たせ、子胥にこの剣で死ねと言わせた。子胥は家来にこう言い残した、「わしの墓に梓の木を植えよ。（呉王の）棺桶にできるように。わが目をくり抜いて呉の都の東門の上に懸けよ、それで越軍が都に攻め入り呉を滅ぼすのを見届けよう」と。それを聞いて怒った呉王夫差が、遺骸を鴟夷（酒を貯える革袋）で包み川に投げ捨てた。呉の人々は哀れに思って川のほとりに祠を建て、そこを胥山と呼んだと書かれている。

【コメントⅡ　大逆流と復讐心】

ただ『史記』の記述との違いがあり、この話では伍子胥自身が我が遺骸を川に投げ捨てよと言っている。また『史記』では「鴟夷」つまり馬の皮を用いた酒を貯える革袋が、この話では「鯪魚」つまり鯰の皮になっているが、これは伍子胥

が葬られた河川との関わりを示唆していると思われる。また子胥の遺体を川に流したのは、『史記』では呉王、この話では子胥の子と違っている。しかし一般的な土葬でも貴族に行われていた墳墓への埋葬でもなく、遺体を川に流したのは罪人の扱いだったからであろう。

こうした河川との関わりは、銭塘江の荒波にも表れている。朝夕の満潮時に数百尺もの高さの波が遡ると述べられているが、これは中秋の満月のころに銭塘江で起こる大逆流、海嘯と呼ばれる現象を朝夕の満潮時の現象に置き換えている。荒波が海から遡るというのは海に流れ去った伍子胥が復讐のために戻っているのであり、その数百尺もの荒波の波頭に伍子胥が素車白馬に乗っているのが見えるというのは、人々の脳裏にある伍子胥の復讐心に燃える凄まじい姿が表されている。

伍子胥の生涯においては二つの大きな事件があった。一つは殺された父と兄のための復讐である。楚の平王の墓を暴き、取り出した屍を鞭打ったという行為は、すさまじい怒りに発したものである。もう一つは、呉王に自死を命じられ死に臨んで言い残した言葉、呉王の棺桶を作るために墓に梓の木を植えよ、呉が滅びるのを見届けるために目をくりぬいて都の東門に掛けよと。ここにも自分を死に追いやった呉王に対する復讐の激しい怒りがある。人々はこうした話を伝え聞いて、復讐心の凄まじさを感じ、それを荒波という自然現象に重ね合わせていたと思われる。慰霊のために祠を建てたのは伍子胥が怨霊となってこの世に現れることを恐れたからであった。

【コメントⅢ　伍子胥の乗った素車白馬とは？】

現在の日本において喪服など葬儀にまつわる色といえば黒を思い浮かべるが、そうした習慣は比較的新しく、以前は喪主の服は白色であり、それには中国の葬礼が影響していた。中国では白は死にまつわる色なのである。この話で伍子胥が「素車白馬」に乗って出現するのは、それが死者の亡霊だからである。また葬儀の参列者も素車白馬に乗った。例えば後漢の范式は、遠隔地で死亡した友人張劭の葬儀に駆けつけたが、「素車白馬、号哭して来るあり」と記されている（『後漢書』独行伝）。また戦いに敗れ国が滅亡する際、その君主はやはり「素車白馬」に乗って降伏している。三国呉が滅亡した時、最後の君主孫皓が西晋の将軍王濬に降伏する際に、「素車白馬」に乗り、肌脱ぎになり、自ら後ろ手に縛り、後ろには棺を担いだ兵士を引き連れていた。それを史書は「亡国の礼」（『晋書』王濬伝）と記している。さらにこの話のように恨みを抱いて死んだ者がこの世に出現する際に「白馬素車」に乗って現れたものとして、周の宣王に無実の罪で殺された杜伯の例がある。無実を訴える杜伯の言葉を聞きいれず死刑を言い渡す宣王

に対して、杜伯は「死んでも意識が残るのなら、三年後にそれを知らしめましょう」と言い残す。三年が経って宣王が戦車千台を動員し狩をしていたところ、朱色の衣冠をまとい、朱色の弓矢を持った杜伯が「白馬素車」に乗って現れ、王を射貫き殺害したという（『墨子』明鬼下）。このように「素車白馬」は人間の死を表象する言葉となっていた。

（榎本あゆち・藤堂光順）

（2）屈原

巻二九一

戦国時代、楚の政治家・文人として有名な屈原をめぐる話で、端午の節句の粽の起源譚にもなっている。

屈原以五月五日投汨羅水而死。楚人哀之、至此日、以竹筒貯米、投水以祭之。漢建武中、長沙区曲、白日忽見一士人自云三閭大夫。謂曲曰「聞、君常見祭。甚善。但常年所遺、恒為蛟竜所窃。今若有恵、可以楝葉塞其上、以綵糸纏之。此二物蛟竜所憚也。」曲依其言。今世人五月五日作粽、并帯楝葉及五色糸、皆汨羅水之遺風。

『続斉諧記』

【注】

○屈原…前三四三？～前二七七？、戦国時代の楚の文人・政治家。名は平、原は字。『史記』巻八四に伝がある。楚の王族に生まれて出世するが、政争で追放されて失意のうちに汨羅に身を投げた。優れた詩人でもあり、その作品は『楚辞』に収められている。ただ『史記』以外の書物には名前が見られないことから実在したかどうか疑われている。

○汨羅水…湖南省の大河湘水の支流汨水と羅水が合流したあたりで、汨羅淵・屈潭ともをいう。今の湖南省岳陽市汨羅市内にある。

○漢の建武…後漢光武帝の年号、紀元二十五年から五六年まで。

○長沙区曲…後漢時代に今の湖南省北部一帯に長沙郡が置かれた。治所は現在の長沙市。区曲は人名だが、どのような人物なのかわからない。

○白日…白昼、真昼。

○三閭大夫…戦国時代の楚の官名。楚の王族の昭・屈・景の三氏を司る。屈原はこの職にあった。

○君常見祭…「見」は「る・らる」と読んで受け身を表すことがあり、害を受ける場合は「～される」と訳し、恩恵や利益を受ける場合は「～してくださる」

と訳す。この場合は後者で「祭ってくださる」の意味。
○為蛟龍所窃…「為○所□」は受身形で「○に□される」の意味。蛟竜は「みずち」水中に棲む竜の一種。
○楝葉…楝は喬木の名。おうち、栴檀。
○並…すべて、そろっての意味。
○綵糸…色糸、後出の五色（黄・青・赤・白・黒色）の糸。

【書き下し文】

屈原、五月五日を以て汨羅水に投じて死す。楚人之を哀れみ、此の日に至れば、竹筒を以て米を貯へ、水に投じて以て之を祭る。漢の建武中、長沙の区曲、白日に忽ち一士人の自ら三閭大夫と云ふを見る。曲に謂ひて曰はく、「聞く、君 常に祭らるると。甚だ善し。但だ常年遺る所は、恒に蛟龍の窃む所と為る。今若し恵む有らば、楝葉を以て其の上を塞ぎ、綵糸を以て之に纏ふべし。此の二物は蛟龍の憚る所なり」と。曲 其の言に依る。今世人 五月五日に粽を作るに、并びに楝葉及び五色の糸を帯ぶるは，皆汨羅水の遺風なり。

【現代語訳】

屈原は五月五日に汨羅水に身を投げて死んだ。楚の人々は哀れんで、その日になると竹筒に米を入れ、汨羅の川に投げ入れ、屈原を祭った。後漢の建武年間に、長沙郡の区曲が白昼に突然自ら三閭大夫と名乗る士人に出会うと、曲に対して言うことには、「聞くところでは、あなたはいつも私を祭ってくれているそうだ。大変結構なことだ。しかし毎年贈ってくれる物はいつも蛟竜に盗まれている。今もし恵んでくれるなら、竹筒の口を楝葉でふさぎ、色糸で筒に巻き付けるのがよい。この二物は蛟龍が嫌がるものなのだ」と。区曲はその言葉通りにした。今世間の人々が五月五日に粽を作るのにみな楝葉と五色の糸を巻き付けるのは、すべてこの汨羅水の故事のなごりである。

【出典】

『続斉諧記』は呉均撰。呉均は南朝梁の人。詩人として名高く、その詩は呉均体と呼ばれた。本条の『続斉諧記』の記事は、端午の節句と粽の起源を、不遇の死を遂げた屈原への祭祀に結びつけて説明したものとして、現存するものでは最も古いものであり、後述する『荊楚歳時記』などに引用されている。

【この話の内容】

この話では、①屈原が五月五日に入水し、哀れんだ人々が供養のために竹筒に米を入れて水に投じていることが述べられ、②漢の建武年間に区曲という男が屈

原に出会い、供物が蛟竜に盗まれるので楝の葉と色糸で包むのがよいと教えられたことが、最後に、③この対処法が現在では五月五日の粽作りに継承されていると述べられている。

「現在」とは、この話が記された南朝の梁時代のことであろう。そのころ五月五日の端午節句に屈原を弔う行事が行われ、包んだ粽が用いられていた。遠い昔に死んだ屈原が白昼に姿を現し、粽を楝の葉や五色の糸で包むように要求したというが、粽や五色の糸といった端午の節句の風習と屈原の伝説が結びついて語られるようになったと考えられる。この点を検討する。

【コメントⅠ　『史記』に述べられている屈原】

屈原は、現代の中国でも愛国詩人として有名な人物である。高い地位に昇ったうえ文才もあったが、政治上で不遇な扱いを受けて失意のうちに亡くなった。人々は哀れんで神として祭ったのである。『史記』によると、彼は楚の王族の出であり、三閭大夫（王族の三姓を司る官）となって懐王に仕え厚く信頼された。しかし屈原の才能を妬んだ上官大夫が屈原は才能を自慢していると讒言したため、懐王は疎んじるようになった。やがて外交政策に失敗した懐王が亡くなり、頃襄王が即位するとその弟の子蘭と上官大夫とが屈原を讒言し、王は屈原を都から追放した。その後を『史記』は『楚辞』の漁父篇を引いて記しているが、そのあらましは次のようである。

すっかりやつれた姿になった屈原が長江のほとりにやって来ると漁父に出会い、二人の会話がはじまる。漁父が、三閭大夫のあなたがどうしてこんなところに来たのかと尋ねると、屈原は、世の人々はみな酔っぱらい濁っているのに、わたしだけが醒めていて清らかだ。それゆえに追放されたのだと世間の汚濁と自己の潔白を語る。漁父は、聖人は物事に執着せず、世の中とともに流れていくものだ、世の中すべて濁っていたらその流れに乗って波をあげればよいと説く。屈原は、真っ白なこの身に世俗のどす黒い汚れを受けいれることなどとてもできないと答えた。そして「懐沙」という賦を作ったあと、石を抱えて汨羅に身を投げて死んだ。

屈原と漁父の会話は、潔白な生き方と隠遁者的な生き方を対比させているうえ、まるで劇中におけるやりとりのようである。しかし、『史記』の他に先秦時代の書などには屈原の名は見られないので、実在したかどうか疑われている。次に、この話の舞台である揚子江中下流域における端午の節句の風習・行事について検討する。

【コメントⅡ　江南地域の端午の節句】

『続斉諧記』が記された時期の、長江中下流域の地理や歳時風俗を記した書と

して、晋の周処撰『風土記』と梁の宗懍撰『荊楚歳時記』がある。両書の端午の節句に関する記述をまとめると、五月五日は浴蘭節ともいい、菖蒲を刻み、あるいは粉にして酒に浮かべて長寿を得ようとした。楝の葉を頭に挿したり、五色の糸を臂に掛けたりして流行病を避けた。また五色の糸を川に投じて水厄（水難）を防いだ。薬草となるヨモギを摘んで人形に作り、戸口の上に掛けて邪気を払ったし、競渡（ボート競争）も行われたなどと記されている。

これらの五月五日の風俗・行事は、その多くが健康や長寿の祈願と辟邪（魔除け）に関するものであった。五月五日は旧暦では夏至に近く、季節の変わり目で暑気が厳しくなる。長江の中下流域は日本の本州の気候に似ているから梅雨に入る時期である（北を流れる黄河と南方の長江の中ほどを流れる川を淮水といい、年間雨量が七五〇ミリの淮水を境として、北は降水量が少なく南は多い）。上述の様々な健康祈願、魔除けの行事・風習もこうした気候との関連によるものである。

端午の節句に、粽を楝の葉と五色の糸で包み、川に投じるのは水厄（水難）を避けるためだと記されているが、魔除けの物で粽を包んで水に沈める風習は、古い時代の水神祭祀から始まったのであろう。この話ではそれらを「粽が蛟竜に奪われないように」用いたというのは、この風習を川に沈んだ屈原の伝説に結びつけて語ったものと考えられる。わが国の端午の節句に見られる粽と五色の吹き流しは、この話の舞台である長江中下流域の節句の風習・行事と深い繋がりがあった。

粽は、周処撰の『風土記』に記載があり、その注記に、「五月五日と夏至の一日前に、真菰の葉を用いて黍米を包み、濃い灰汁でそれを煮て爛熟させ、五月五日と夏至にそれを食べる」と書かれており、端午の節句だけでなく夏至の食べ物でもあった。この話に出ている粽は竹の筒に米を入れたもので、それを楝の葉で包み五色の糸で括っている。米（たぶんもち米）を包むものとして竹筒、真菰の葉、楝の葉と違いがある。わが国の粽は笹の葉や竹の皮で包むが、これらは地域の料理法の違いによると言えるであろう。

競渡は、細長い舟を複数の人が漕ぐもので、わが国にも伝わって沖縄ではハーリー、長崎ではペーロンなどと呼ばれている。中国の競渡は、やはり『風土記』に五月五日に行われていると記されている。もとは古くから各地で四月や五月に行われていたのが、三世紀初に五月五日が節日となったことから五月五日に行なわれるようになったという。その由来については水に沈んだ屈原を救うためとの伝説もあるが、競渡の舟が龍の形をしていることから雨乞いを目的とし、農耕の豊穣を祈る意味があったという説や、江中において船で水神祭をおこなったなどの説がある。

【コメントⅢ　節句における水神の信仰】

この「屈原」と似た話がある。それは『太平広記』巻二九一に所収の「延娟」（東晋の王嘉著『拾遺記』所収）で、その粗筋は次の通りである。

周の昭王が東甌（浙江省温州付近にあった国）から貢がれた二人の女性延娟と延娟（塵の上を歩くと足跡は無く、日中に影は無い女性）を連れて南方へと征伐に向かった。漢水を渡る際に舟が沈没して三人とも溺死した。後に人々は祠を建てて祭るようになった。いつも二人の娘が昭王を抱きかかえるようにして船に乗り、水辺で遊んでいるのを見た。三月上巳になると禊ぎのために集まり、旬の物や果物を蘭や山梨の葉で包んで川に沈め、五色のひもで包んだり金具で吊るしたりした。すると蛟竜は食べ物を奪いはしなかった。

三月上巳の日に漢水（長江の中流域）で亡くなった周の昭王※たちの祭祀が行われていて、蛟竜の害を避ける方法が語られている。そこで「延娟」と「屈原」との要点を対照させると次のようになる。

延娟	屈原
①昭王と寵姫二人が漢水で溺死した	屈原が汨羅江に投身自殺した
②人々が三人の姿が現れるのを見る	区曲のもとに姿を現した
③三月三日の禊に集まって祭祀を行う	五月五日の端午節句に祭祀を行う
④旬の物や果物を川に沈める	竹筒の粽を川に沈める
⑤蛟竜に奪われないように蘭や杜で包み	蛟竜に奪われないように楝（栴檀）や五色の糸
五色の糸で括ったり金属に吊したりする	でくくる

二つの話には共通する点がある。どちらも川に沈んだ悲劇の人物だが、人々の前に姿を現している。また慰霊の祭礼が重数（三月三日と五月五日）の節句の日に行われ、川に沈める供物を木の葉や五色の糸で包んでいるが、それは蛟竜に奪われないためだという。屈原の祭祀は五月五日であったが、昭王たちの祭祀は三月上巳（三日※）、現在の四月十日頃にあたり、川の水が緩む頃である。中村喬氏によると、上巳の祓禊（災いや汚れを祓うために川で身を清める行事）は、前漢時代には既に行われていて、「上巳に行われる川禊は、…日常生活において心身に付着堆積してくる汚穢や身心を害するものを洗い清めるものであった」という。その禊ぎの行事に蘭や杜（やまなし）の葉、五色の糸が用いられたのは、端午の節句の楝（栴檀）や五色の糸と同様に健康祈願・魔除けの習俗だったのであろうが、中村氏は。粽を水中に投じたのは水神を祭る古い形式で、粽は水神への神饌（神を祭るときに供える酒食）であり、楝と五色の糸で包んだのは「蛟竜も憚る辟邪の力によって筒粽を潔め、その神饌たることを示したもの」と論じている。屈原の沈んだ汨羅水、昭王たちの沈んだ漢水はともに長江の中流域にあるが、こうした習俗はより広い中国南部一帯にも見られたものであろう。長江の中下流域は河川・湖沼が数多く、交通や運輸に利用されていて人々の生活に深い関わり

があった。

春と夏に水辺で行う祭祀では、河川や湖沼の水神が対象となり、川に沈められる粽は水神への神饌であった。この話で屈原は「わたしを祭ってくれて…、毎年贈ってくれる物は…」と語っているが、それは屈原が粽を神饌として受ける水神であったことを示している。三月上巳と五月端午の節句の日に、川に沈んだ昭王、屈原を水神とみなして祭るようになったのは、人々がその死を哀れんだからであろう。

三月三日と五月五日の節句という季節の変わり目に行われた祭祀行事は、もともと河川において行われていた健康祈願・魔除けの習俗であったが、河川で不幸な死を遂げた人物が混ざり込んで祭祀の対象とされるようになったのである。

※周の昭王…『史記』周本紀に引く『帝王世紀』によると、周王の四代目の昭王は徳が衰えており、王を憎んでいた船頭は膠（にかわ）の船に王を載せた結果、膠が溶けて船は沈んだという。悲劇的な死を遂げた人物である。

※三月上巳…三国の魏の時から、上巳を三月三日とするようになった。『宋書』巻十五礼志に「魏より以後、但だ三日を用い、巳を以てせず」とある。

なお、コメントを作成するに当たって、次の書を参考にした。

・『楚辞』（小南一郎訳注　岩波文庫　二〇二一年）

・『荊楚歳時記』（守屋美都雄　訳注　布目潮渢他　補訂　平凡社東洋文庫　一九七八年）

・『中国の年中行事』（中村喬著　平凡社　一九八八年）

・『中国古代の年中行事』第二冊夏（中村裕一著　汲古書院　二〇〇九年）

・池田温「中国古代における重数節日の成立」（『中国古代史研究』第六所収　一九八九年）

（藤堂光順）

（3）袁双

巻二九四

南北朝時代の南朝における出来事。袁氏一家は実権を握った桓温に殺害されたが、袁双の亡霊が現れて廟を建てるようにと要求したという話である。

丹陽県有袁双廟、真第四子也。真為桓宣武誅、便失所在。霊在太元中、形見於丹陽、求立廟。未即就功、大有虎災。被害之家、輒夢双至、催功甚急。百姓既立祠堂、於是虎暴用息。

今道俗常以二月晦、鼓舞祈祠。爾日常風雨忽至。元嘉五年設奠訖、村人丘都於廟後見一物。人面鼉身、葛巾、七孔端正、而有酒気。未知為双之霊、為是物憑也。

『異苑』

【注】

○丹陽県…建康（今の南京）。

○袁双…東晋の人。袁真の息子。袁真は桓温の部下として北伐に従ったが、敗戦するとその罪を着せられて争った結果、前燕に寝返り、温と戦うなかで病死した。袁真については後述する。

○桓宣武…東晋の政治家桓温（三一二～七三）、宣武は諡。三四六年に成漢の李勢を、三五六年には姚襄を討伐した。政界で実権を握り、政権の簒奪を謀ったが実現しないうちに病死した。

○便失所在…「便」は事態や行為がただちに起こることを表して「～するともうすぐに」と訳す。「失」は「見失う・わからなくなる」の意味。

○在太元中…この「在」は「在り」と読むが、前置詞として場所・時間を示す。太元は東晋の年号、三七六～九六年。

○未即就功…「即」は「ただちに・すぐに」の意味。「未即…」は「まだすぐには…しない」と訳す。
○催功…事業を行うようにと催促する。
○今…『異苑』が著された南朝宋の時代であろう。
○道俗…出家者と世俗の人、または巫祝と庶民。ここは後者であろう。
○晦…月の終わりの日。
○鼓舞祈祠…「鼓舞」は鼓を打って舞をまうことで、巫祝が祭祀のときに行う行為、「祈祠」は祈り祀ること。
○元嘉五年…元嘉は南朝宋の年号、四二八年。
○奠…神前に供え物をする。
○丘都…人名。どのような人物であるのかわからない。
○葛巾…葛の布で作った頭巾。庶民や田舎に住む人などが着用した。
○人面鼉身…鼉はワニ。人間の顔でワニの身体をしている。
○七孔…七孔は、耳目口鼻の七つの穴。
○未知為双之霊為是物憑也…「未知為○為□也」は「○であるのか□であるのかわからない」、「憑」は「憑依する・乗り移る」の意味。

【書き下し文】

丹陽県に袁双の廟有り、真の第四子なり。真 桓宣武に誅せらるるや、便ち在る所を失ふ。霊 太元中に在りて、形丹陽に見(あらは)れ、廟を立てんことを求む。未だ即ち功に就かざるに、大いに虎災有り。害を被(かうむ)るの家、輒ち夢に双の至りて、功を催(うなが)すこと甚だ急なり。百姓既に祠堂を立つ、是に於いて虎暴用(もつ)て息(や)む。

今 道俗常に二月の晦(みそか)を以て、鼓舞祈祠す。爾(そ)の日常に風雨忽ち至る。元嘉五年 奠(てん)を設け訖(お)はるに、村人の丘都 廟後に於いて一物を見る。人面鼉身(だしん)、葛巾(かつきん)し、七孔端正にして、酒気有り。未だはた双の霊たるか、はた是れ物の憑(よ)るかを知らざるなり。

【現代語訳】

丹陽県に袁双の廟がある。双は袁真の四番目の息子であった。袁真が桓温に誅せられると、(双は姿をくらまして)すぐにどこにいるのかわからなくなった。その霊が太元年間に、丹陽に姿を現し、廟を建てるようにと要求した。すぐには着手しないでいると、虎の害が頻発した。被害に遭った家の者は、夢の中に双が現れて、工事を厳しくせき立てた。人々が祠堂を建て終わると、すると虎の乱暴は終息した。

今ではいつも巫祝や人々が二月の晦日に、鼓を打ち舞をまって祀りを催している。その日になると、いつも急に風雨が起こるのだった。元嘉五年に廟に物を供

え終わると、村人の丘都は廟の裏である物を見た、人の顔でワニの身体をしていて、葛布の頭巾をかぶり、目鼻立ちは端正で、酒気を帯びていた。それが双の霊であるのか霊が物にとりついたのかはわからない。

【出典】

『異苑』は南朝宋の劉敬叔の撰。

【コメントⅠ　袁真の死は？】

皇帝の一族の起こした八王の乱（三〇〇～〇六）や異民族の起こした永嘉の乱によって西晋が滅び、東晋が成立したのが三一七年のこと、都は建康（長江の南、現在の南京市）に置かれた。異民族の手に落ちた華北の地を取り返すための北伐が三六九年に起こされた。政治、軍事の実権を握っていた桓温が軍隊を率い、袁真に軍糧を届けるようにと指示した。ところが戦いに敗れると、桓温は敗戦の罪を袁真になすりつけ、真は誣告を主張したが、実力者桓温の意向をくんだ朝廷は真の言い分を認めなかった。そこで袁真は東晋朝から寝返り、これまで敵であった前秦や前燕と通じ支援を受けて、交通の要衝でありまた当時の南北の境界に位置した寿陽（安徽省淮南市寿県）を本拠地として東晋朝に敵対するようになる。

翌三七〇年二月に袁真は病死するが、息子の袁瑾が後を継いで東晋朝と戦うようになる。三七一年一月、袁瑾は敗れて生け捕りにされ、宗族数十人や部下ともども都（建康）に送られて斬り殺された。袁真が侍養していた乞活数百人はみな穴埋めにされ、その妻子は褒美として分け与えられた。以上が『晋書』の桓温伝による記述である。当時の南北間の抗争の狭間で存続を図った袁氏一族やそれに乞活と呼ばれる流民が加わっていたこと、また桓温の残忍さがうかがえる。

袁真の死後、袁瑾が後を継いでいるが、真の息子は瑾だけではなく、『晋書』によると「双之」「愛之」もいた。この「双之」が『異苑』の話に四番目の息子と記されている袁双だと思われる。袁真の後を継いだ袁瑾が長男で、四番目が「双（双之）」、その下に「愛之」がいたのであろう。『晋書』によると、袁氏の宗族はみな都の建康で殺されたというから、これらの息子たちも殺されたはずである。『異苑』の話では、袁双は真が桓温に殺されるとどこに行ったのかわからなくなり、太元年間（三七六～九六年）になってその「霊」が姿を現したというが、やはり瑾等とともに三七一年に都で斬殺されていたのであろう。とすると姿を現したのは死後五～二十五年経ってからのことになる。

【コメントⅡ　廟を建てろという亡霊の要求】

袁双の廟が建立されるまでの経緯は、丹陽（都の建康）に姿を現した霊は廟を建設するようにと要求し、着工しないでいると虎の害が頻発した。虎に襲われた

人の夢に袁双が現れて工事をせき立てたが、廟が完成すると虎の害は収まったというものであった※①。虎の害は死者の怨霊の仕業とみなされ、慰霊のために廟の建立へと向かったのであろう。しかし袁双は東晋朝への反逆者として斬殺されており、その霊を祀る廟を建てるのは憚られたはずである。それが可能になったのは、①政治上の動きがあったこと、②袁双の死を哀悼する人物がいたことなどが考えられる。

①について考える。桓温は袁氏一族が殺された二年後、三七三年七月に死亡している。桓温の死後、温の子弟たちは政権への意欲を削がれて都を離れている。ただ温の庶子の桓玄は勢力を蓄えて都に入り、朝廷を威圧して暴虐な政治を行い帝を称するまでになったが、兵を起こした劉裕に討たれてしまう。劉裕は東晋朝を滅ぼして新たに宋朝を起こすことになった。したがって袁双の廟の建立について、大きな障壁は無くなった。そのうえ桓温は政治上の敵が多い人物でもあったから、人々の間には温からひどい目に遭わされた袁双の死を哀悼する気持ちを表すことができる時になっていたと思われる。

②についてはどうだろうか。人々には温からひどい仕打ちを受けた袁双への哀悼の気持ちを形にしようという意識が生まれたと思われる。しかし、それとは別に『晋書』桓温伝の記述に、袁瑾が侍養していた乞活数百人がみな穴埋めにされ、その妻子は褒美として分け与えられた、とあるのに着目したい。

「乞活」とは、四世紀初頭、永嘉の乱の時に并州（山西省）に現れた流民の集団である※②。三世紀末から華北の地では八王の乱、永嘉の乱と混乱が続いたため、人々は「塢」と呼ばれる要塞で自衛したり、故郷を離れて南方へと移住したりした。彼らは地縁や血縁によって集団を組織して定住し、流人を集団に加えたりもしていた。こうした流民集団の中で、団結が堅固、戦いに優れていて、活動した地域が広範囲で期間の長かった「乞活」と呼ばれる集団がいた。彼らは并州（山西省）から幽州（河北省）へと移動し、北の王朝と東晋朝の狭間で活動して四世紀の中頃には黄河の南へと移り、安徽省の淮南市付近にいた。おそらくその頃に袁真の指揮下に入ったのであろう。この流民の集団乞活は、袁真が死ぬと、真の長男瑾に「侍養」されることになったという。「侍養」とは子どもが親の側について養うことをいう。まだ経験の未熟な瑾は、父の指揮下にいた乞活に対してぞんざいに扱うことなどできず、鄭重に待遇したのであろう。そのためか、乞活は袁瑾の親ではないのだが、瑾から寝返ることもなかった。乞活の妻子は褒美として分け与えられが、おそらく従軍した兵士や都の高官に与えられたのであろう。

この数十人を斬殺し、数百人を穴埋めにするという事件は、袁氏や乞活の関係者だけではなく人々にも衝撃を与えたはずである。中国社会のしきたりとして、死者の霊魂は子孫が祭祀を行って弔うものであって、子孫が絶えてしまい、祭祀

を受けられなくなった霊魂は厲鬼となって祟りを起こすと考えられていた。袁双一族は皆殺しにされ、祭祀を行う者がいなくなってしまった。廟の建立に動いたのは、生き残った乞活の妻子だったのかもしれないが、廟を建てるようにという要求は、むしろ人々のそうしなければ厲鬼の祟りを招いてしまうという恐れから生まれた。頻発する虎の被害は厲鬼の起こす祟りと思えたのであろうし、それによって建立をせき立てられることになり、建立が済むと被害はなくなったのである。

また、袁瑾たちは一月に捕らえられて都建康へ送られたが、斬殺されたのは二月になってからなのであろう。この話で、二月の晦日に祭祀をしているのは、袁氏一族の命日に当たるからとも思われる。

※①死後、祠を建てて祀るようにと要求したことを伝える話に「蔣子文」（『太広記』巻二九三）がある。

※②周一良氏の「乞活考」（『魏晋南北朝史論集』所収）をもとに記述した。

（藤堂光順）

（4）「悲劇の死を遂げた男」まとめ

ここに取りあげた三人は『太平広記』神の項に収められているのだが、絶対的な力を持つ神でもなく、イザナギ、イザナミのような国産みの神でもない、わが国の死後に神社に祭られるようになった神に似ているところがある。以下にその点を述べる。

伍子胥は、その死後に呉の人が憐れんで祠を建てているが、この話では人々が目にしたのは、子胥が死者を象徴する白馬の牽く白木の車に乗り、激流の波頭に立って川を遡るという凄まじい姿である。子胥は「厲鬼（凶悪な死者）」と見られていたのである。父と兄を殺され、讒言によって自殺を命じられた、この悲惨なしを遂げた子胥を知る人々は、怨霊となって祟り、復讐するときの強烈な姿をイメージしたのであろう。祠の建立は人々の憐憫の情に発したのであろうが、この話からは人々が怨霊の祟りを恐れていたことを読み取ることができる。

屈原が端午の節句における祭祀の対象とされたのは、讒言によって入水自殺することになったという伝説が人々に共有されていたからである。それが長江の中下流域で端午の節句に行われていた水神祭祀の習俗に結びつき、神として祭られるようになった。この話は水神信仰に死者の慰霊が重なって生まれた説話なのであろう。

袁双は、政権を掌握した桓温との戦いに敗れて斬殺され、兄弟やその妻子、指揮下の乞活も含めて皆殺しにされた。人々が戦慄する大規模で非劇的な死であった。人々は、霊魂を弔わないと厲鬼が災いをもたらすに違いないという畏怖心を抱いていたのであろう。廟の建立に着手しないと虎による被害が起こったというのは、怨霊の祟りであろう。

三人は悲劇的な死を遂げた人物であるが、神として祀るようになったのは、人々がその死を哀れに思ったからでもあろうが、死者の霊を慰めないと厲鬼となって祟りを起こすのだという観念が規定にあったからであろう。

（藤堂光順）

二　神になった女性

『太平広記』には女性の神の話が多く載せられている。その中でも非業の死を遂げて神として祀られた女性の話が目立つ。ここでは（1）丁氏婦、（2）阿紫、（3）聖姑の三つの話を取り上げる。彼女たちはなぜ死んで、どんな神となったのか。

（1）丁氏婦　　巻二九二

黄巾の乱に始まる動乱の時代を経て、西暦二二〇年に後漢は遂に滅び、中国は魏・蜀・呉に分裂する三国時代となった。二六三年に三国のうちまず蜀が魏に滅ぼされ、その二年後、魏が司馬氏に乗っ取られて滅び晋王朝が成立した。残る呉も二八〇年に晋に滅ぼされ、久々に中国が統一された。そのころ、長江の下流にあったかつての呉の都建業（現在の江蘇省南京市。東晋時代には建康と改称された。）の近くに、「丁姑」と呼ばれる神が現れた。

淮南全椒県有丁新婦者。本丹陽丁氏女、年十六、適全椒謝家。其姑厳酷、使役有程、不如限者、即便笞捶、不可堪処、九月七日自経死。遂有霊響、聞於民間。発言於巫祝曰「念人家婦女、作息不倦、使避九月七日勿用作。」

【注】

○淮南全椒県…現在の安徽省全椒県。南京市の西方、長江の北側に位置した。

○丹陽丁氏…丹陽は現在の安徽省当塗県東北の小丹陽鎮。呉都建業の南西にある。長江の南側に位置した。

○使役有程…「使役」は「仕事をさせる」、「程」は「きまり・規程」。ここでは「これだけの仕事をしなさい」とか「いついつまでに仕事を終わらせなさい」など、姑が丁新婦に仕事の内容や期限を指示したことを述べている。

○笞捶…鞭打つ。

○不可堪処…「処」は「居住する、暮らす」。

○自経死…自分で首をくくって死ぬ。
○霊響…霊験。
○巫祝…鬼神に仕え祭礼を司る人。みこ、男性も女性もいる。
○作息…労働する。
○不倦…「仕事を怠りもせずに続けている」状態をいう。

呉平後、其女幽魂思レ郷欲レ帰、永平元年九月七日見レ形、著二縹衣一、戴二青蓋一、従二一婢一、至二牛渚津一、求レ渡。有二両男子一、共乗レ船捕レ魚。仍呼求レ載。両男子笑、共調二弄之一言「聴二我為レ婦、即当二相渡一也。」丁嫗曰「謂二汝是佳人一、而無レ所レ知。汝是人、当レ使二汝入レ泥死一。是鬼、使二汝入レ水。」便却入二草中一。

＊「呉平後」から「九月七日」は、『捜神記』に拠り補った。

【注】
○呉平…呉は二八〇年に西晋に亡ぼされた。
○永平元年…永平は西晋の恵帝の年号。元年（二九一）三月に元康に改元されたので、九月七日は永平元年ではなく、実際は元康元年。
○縹衣…「縹」は、はなだ色。空色、うすい青色。
○青蓋…青色の笠。
○婢…下女、侍女。
○牛渚津…現在の安徽省馬鞍山市当塗県の西北、牛渚山下にある長江の渡し場。南京の西南にある。都建業（建康）から長江を渡って北方に向かう際によく利用された。
○調弄…嘲弄と同意。からかう、戯れる。
○嫗…年老いた女性をいうこともあるが、ここでは女性の通称。

須臾有一老翁、乗船載葦。嫗従索渡。翁曰、「船上無装、豈可露渡。恐不中載耳。」嫗言、「無苦。」翁因出葦半許、安処著船中、径渡之。至南岸、臨去、語翁曰、「吾是鬼神、非人也。自能得過、欲使民間粗相聞知耳。翁之厚意、出葦相渡、深有慚感、当有以相謝者。翁速還去、必有所見。亦当有所得也。」翁曰、「媿燥湿不至、何敢蒙謝。」翁還西岸、見両少男子覆水中。進前数里、有魚千数跳躍水辺、風吹置岸上。翁遂棄葦載魚以帰。

於是丁嫗遂還丹陽。江南人皆呼為丁姑。九月七日不用作事、咸以為息日也。今所在祀之。

『捜神記』

【注】

○装…装置、ここでは船の上にしつらえた屋形のこと。

○恐不中載耳…「恐…耳」は推量を表して「…であろう」と訳す。「中」は、適合する。

○燥湿不至…「燥濕」は生活状況のたとえ。人の住まいの様子。ここでは船の居住環境をいう。「至」は周到にゆきとどいたさま。老人の船は屋形が無くて人を載せるような立派な船ではないと恐縮しているのである。

○粗…「ほぼ」と読んで、あらまし、だいたい、少しばかりの意味。

○丁姑…「姑」は、しゅうとめ（夫の母親）や、おば（父親の姉妹）をいうこと

もあるが、ここでは女性の通称。
○所在…いたるところ、あちらこちら。

【書き下し文】

淮南の全椒県に丁新婦なる者有り。本丹陽の丁氏の女、年十六、全椒の謝家に適ぐ。其の姑厳酷、使役に程有り、限のごとくせざれば、即便ち笞捶し、処るに堪ふべからず、九月七日自ら経死す。遂に霊響有りて、民間に聞こゆ。言を巫祝に発して曰はく、「人家の婦女の、作息して倦まざるを念ひ、九月七日を避けしめ、作に用ふること勿かれ」と。

呉平らぐの後、其の女の幽魂 郷を思ひ帰らんと欲し、永平元年九月七日形を見すに、縹衣を著、青蓋を戴き、一婢を従へ、牛渚津に至りて、渡すを求む。両男子有り、共に船に乗りて魚を捕らふ。仍りて呼びて載せんことを求むるに、両男子笑ひ、共に之を調弄して言ふ、「我の婦と為すを聴さば、即ち当に相ひ渡すべきなり」と。丁嫗曰はく「汝は是れ佳人なりと謂ふに、而して知る所無し。汝是れ人ならば、当に汝をして泥に入りて死せしむべし。是れ鬼ならば、汝をして水に入らしめん」と。便ち却きて草中に入る。

須臾にして一老翁有り、船に乗りて葦を載す。嫗従りて渡すを索む。翁曰はく、「船上に装無し、豈に露渡すべけん。恐らくは載するに中らざるのみ」と。嫗言ふ、「苦しむ無かれ」と。翁因りて葦の半ば許を出し、安処して船中に著け、径ちに之を渡す。南岸に至り、去るに臨みて、翁に語りて曰はく、「吾は是れ鬼神なり、人に非ざるなり。自ら能く過ぐるを得るも、民間をして粗ぼ相ひ聞知せしめんと欲するのみ。翁の厚意、葦を出して相ひ渡す、深く慚感有り、当に以て相ひ謝する者有るべし。翁速かに還去すれば、必ず見る所有らん。亦当に得る所有るべきなり」と。翁西岸に還り、両少男子の水中に覆るを見る。進前すること数里、魚の千数 水辺に跳躍する有り、風吹きて岸上に置く。翁遂に葦を棄て魚を載せて以て帰る。

是に於いて丁嫗遂に丹陽に還る。江南の人、皆呼びて丁姑と為す。九月七日事を作すを用ひず、咸以て息日と為すなり。今所在之を祀る。

【現代語訳】

淮南郡全椒県に丁という若嫁がいた。もとは丹陽県の丁氏の娘で、十六歳のときに、全椒県の謝家に嫁いだ。姑はたいそう酷くて、仕事には決まりがあり、それを守らないと、すぐにむち打ったので耐えられなくなり、九月七日に首をつって死んだ。その後丁氏の神霊の評判が人々の間に広まるようになった。丁氏は巫に乗り移って語った、「嫁たちが休む間もなく仕事をしているのが思いやられ

る。九月七日は休ませよう、仕事をさせてはならない」と。

呉が平定された後、その女の霊魂は故郷を思って帰ろうとし、永平元年九月七日に姿を現した。空色の服を着て青い編み笠を頭に載せ、婢を一人連れていた。牛渚の渡し場にやって来ると、渡してくれる人を捜した。二人の男が船に乗って魚を捕っていた。そこで呼んで載せてくれと頼んだところ、二人の男は笑い、一緒にからかって言った、「私がおまえを妻にするのを承知してくれたら、川を渡してあげよう」と。丁女は、「おまえたちは立派な人だと思っていたが、物事を知らないね。おまえたちが人なら、泥につっこんで死なせてやろう。幽霊なら水につっこんでやろう」と言い、すぐに退いて草むらの中に入っていった。

間もなく老人が船に葦を載せて現れた。丁女は呼んで載せてくれと頼んだ。老人が「船には屋形もありません、むき出しで渡せましょうか。お載せするような船ではありません」と言うと、女は「ご心配には及びません」と言った。老人はそこで葦を半分ほど外に出し、（女を）船の中に落ち着かせ、すぐに渡した。南岸に着くと、立ち去り際に老人に話すには、「わたしは鬼神なのです、人ではありません。自分で渡ることも出来たのですが、人々に少しばかり評判を広めようと思ったのです。ご老人のご厚意、葦を下ろして渡してくれたことを、かたじけなく思います。お礼をしなくてはなりません。ご老人、急いでお帰りになれば、きっと目にする物があるでしょう。当然のお礼です」と。老人が言った、「至らぬ粗末な船で申し訳ありません。お礼をいただくことなどできましょうか」と。

老人が西岸に帰っていくと、若者が二人水の中にうつ伏せになって死んでいた。数里いくと魚が千匹あまり、汀で跳び跳ねており、風で岸に吹き上げられていた。老人はそこで葦を棄てて魚を載せて帰った。

それから丁女は（故郷の）丹陽に戻った。江南の人々はみな丁姑様と呼んでいる。九月七日は嫁に仕事をさせてはならず、みな休息の日としている。現在あちらこちらで丁姑を祀っている。

【出典】

『搜神記』東晋の干宝撰。神怪奇異な説話を集めた志怪小説集。

【コメントⅠ　この話の舞台と丁姑】

神となった丁姑が姿を現したのは、呉の滅亡後の永平元年(二九一年)とされている。自殺した年は書かれていないが、呉の滅亡よりも少し前のことと推測される。そのころは魏・蜀・呉のうち、蜀と魏がすでに滅び、呉は晋との戦いを繰りかえしていた。二六四年に孫皓が呉の君主となると政治が乱れはじめ、民に重税を課して人心の離反を招くようになった。二八〇年に孫皓が西晋に降服し、呉は滅んだ。この話はこのような政治の乱れと社会の不安を背景にしていると思われ

る。場所は、長江下流の一帯。丁女の嫁いだ全椒県は長江の北側、実家のあった丹陽郡は南側に位置し、呉の都建業があった。

淮南郡全椒県は丁姑が嫁いだときは呉の領域であった。亡くなった時は晋の領域となっていたが、長江の南岸はまだ呉だった。丁姑の霊（丁嫗）は、呉が滅亡して晋に統一されたので、長江の北から牛渚津を渡って南岸の実家へと帰ることにしたのであろう。

【コメントⅡ　九月七日、女性の休日】

この話は、江南の人びとが九月七日を嫁の休息日にしていることの由来を述べている。

当時は男尊女卑の時代で、女性は結婚前は父に仕え、嫁いだ後は家事を一手に担い、夫に仕えるだけでなく舅姑に孝養をつくすのが婦道とされていた。使用人が大勢いる裕福な家庭でないかぎり、庶民の家庭の主婦は一年中働き詰めで休むことは許されなかった。特にしゅうとめといえば、少し前の日本でも嫁に厳しく当たり、往々にして嫁いびりをするものだった。嫁はしゅうとめにどんなに理不尽なことをいわれても従わなくてはならず、反抗すれば離縁されても文句はいえない。丁新婦のように過酷ないじめに耐えきれず自ら命を絶つものも珍しくなかったことだろう。

そんな嫁が一年に一日だけ休息が許される、それは嫁となった女性の願いであり、江南社会の人びとが家庭を継続させていくための知恵だったかもしれない。この話は休息日の由来譚でもあるが、丁姑のご託宣によってこの日が休息日に指定されたのではなく、丁氏の若嫁の悲惨な死を憐れんでもともとあった休息日に丁姑を結びつけられたのではなかろうか。

【コメントⅢ　丁姑の実力と威厳】

丁新婦は姿を現して故郷に帰ろうと牛渚津にやって来ると、若者二人に長江を渡してくれと頼んだが、彼らは「嫁になったら渡してやる」と悪ふざけを言った。彼女は「お前たちを死なせてやろう」と言葉を返し、二人たちはその言葉通りに水中で死んでいた。一方彼女に丁寧に受け答えをして、船に積んでいた葦を半分降ろして親切に乗せてくれた老人には、お礼にと千匹あまりもの魚を贈った。登場したのは軽薄な若者と善良な老人と、昔話などによくあるタイプである。二者は彼女への態度も年齢も対照的で、彼らが受けた結果も溺死と贈り物と対照的だ。軽薄な若者たちは、現代の私たちからすれば殺されるほどのことをしたとは思えないが、丁姑の神としての実力と威厳を示すには必要だったのであろう。

それにしても、これだけの力を持つ丁姑が、しゅうとめに報復しなかったのはなぜか、ひっかかるところである。

（道家春代、藤堂光順）

（2） 阿紫

巻二九二

この話の主人公阿紫は、生前虐待され発狂して死んだ。彼女は妾で、死に追い込んだのは正妻だった。この神はどんな神になったのだろうか。

世有紫姑神。古来相伝「是人妾、為大婦所嫉、毎以穢事相次役、正月十五日感激而死。」故世人以其日作其形、夜于厠間或猪欄辺迎之、祝曰「子胥不在。」是其壻名也。「曹姑亦帰去。」即其大婦也。「小姑可出戯。」捉者覚重、便是神来。奠設酒果、亦覚貌輝輝有色、即跳躍不住。占衆事、卜未来蚕桑。又善射鈎、好則大儛、悪則仰眠。平昌孟氏恒不信、躬試往捉、便自躍穿屋、永失所在。

『異苑』

【注】

○阿紫…「阿」は名前の前につけて親しみを表す。～ちゃん、～さん。

○妾…正妻以外の妻。正妻と同居し、奴婢の仕事をさせられることもあった。

○大婦…正妻。

○穢事…トイレや家畜小屋の掃除など汚い仕事。

○役…働かせる、こき使う。

○正月十五日…唐代のころから上元節の日となるが、『異苑』の著者は南朝宋の劉敬叔であるから、この節日の行事とは無関係。「祈蚕」の風習と関係があるという（中村喬『中国の年中行事』平凡社）。後述を参照されよ。

○感激…強い刺激を受けて激情する。

○猪欄…豚小屋。

○曹姑…「曹」は正妻の姓。「姑」はここではしゅうとめではなく、女性の通称。

○是其壻名也、即其大婦也…直前の語句を説明する注であろう。これを省いて、「子胥はいませんよ。曹おばさんも出かけていますよ。おばさん遊びに出てお

いで」と訳した方がスッキリとする。
○小姑…ここでは紫姑を呼んでいる。大姑（正妻）に対して妾の意か。
○奠設…祀るためにお供えをする。
○跳躞…躞は小股で歩くさま、うろうろするさま。
○卜未来蚕桑…会校本は「卜行蔵、知蚕桑」とするが、『異苑』によって改める。
○射鉤…ゲームの一種。詳細はコメントⅢを参照されよ。
○大傩…傩は舞と同意。
○平昌…現在の山東省濰坊市安丘市。

【補注】
曹姑…王導（東晋の政治家）に「曹」姓の嫉妬深い正妻がいて、王導の妾を殺そうと刀を持った侍女たちを連れて妾の元に向かったところ、導が先に駆けつけようと牛車に乗り、足の遅い牛をむち打たせたという話がある。（『世説新語』劉孝標注引く『妬記』）。「曹姓の嫉妬深い妻」といえば、王導の妻が連想される。

【書き下し文】
世に紫姑神有り。古来相ひ伝ふるに、「是れ人の妾にして、大婦の嫉む所と為り、毎に穢事を以て相ひ次ぎ役せられ、正月十五日感激して死す」と。故に世人其の日を以て其の形を作り、夜厠間或いは猪欄の辺に于て之を迎へ、祝りて曰はく、「子胥在らず」と。是れ其の壻の名なり。「曹姑も亦た帰り去る」と。即ち其の大婦なり。「小姑出でて戯るべし」と。捉ふる者重きを覚ゆれば、便ち是れ神来るなり。酒果を奠設すれば、亦た貌に輝輝として色有るを覚へ、即ち跳躞して住まらず。衆事を占ひ、未来の蚕桑を卜す。又射鉤を善くし、好ければ則ち大傩し、悪ければ則ち仰眠す。平昌の孟氏恒に信ぜず、躬ら試みに往きて捉へんとするに、便ち自ら躍りて屋を穿ち、永く在る所を失へり。

【現代語訳】
世間に紫姑神というものがある。昔から言い伝えていることには、「この神はある人の妾で、正妻に嫉まれ、いつも汚れ仕事に次々とこき使われ、正月十五日に憤激して亡くなった」と。それで世の人々はこの日に彼女の姿をした人形を作り、夜に厠や豚小屋のあたりでこの神をお迎えし、祝詞をあげて言うには、「子胥はいませんよ」と。これは彼女の婿の名前である。「曹奥様は里帰りしていますよ」と。この家の正妻のことである。「おねえさん遊びに出ておいで」と。（人形を）掴んでいた手が重くなったのを感じると、神が降りて来たのである。酒や果物をお供えすると、人形の顔つきが生き生きと輝くようになり、跳ねたり歩い

たりしてじっとしていない。いろいろな事を占い、この先の養蚕の出来具合も占ってくれる。また射鉤の遊びにも長けていて、上手くいった（当たった）ときは盛んに舞い、上手くいかなかった（はずれた）ときは仰向けに寝ころぶ。平昌の孟氏は常々信用せず、自ら人形に紫姑神を降ろそうと試したところ、人形は勝手に躍り上がって屋根をつき破り、行方がわからなくなってしまった。

【出典】

『異苑』南朝宋の劉敬叔著の志怪の書。なお、『唐前志怪小説輯釈』（李剣国輯校、上海古籍出版社 二〇一一年）を参照した。李氏の書には、後世（特に唐・宋時代）における紫姑神に関する風習などが多く紹介されている。

【コメントⅠ　丁姑と同じく非業の死を遂げて神になった紫姑】

前話の丁姑はしゅうとめにつらく当たられて自ら首をくくって死んだが、この話の紫姑は正妻の嫉妬から汚い仕事にこき使われて憤慨して死んだ妾である。それがなぜ信仰されるようになったかはわからないが、同じく弱い立場の女性たちから同情され祀られるうちに、霊力が付加されたのではないだろうか。

しかし、神となったものの、紫姑の霊はこっくりさんのような素樸な神である。しかも降りて来るのは、自分を虐待した正妻や、かばってくれない夫の不在の時だけであり、恨みを晴らすような悪霊とは違う。酒や果物のお供えを喜び、ささやかな遊びに一喜一憂する愛らしくもけなげな神である。紫姑はさまざまな占いをしてくれ、特に養蚕の出来がよく的中する。養蚕の占いを紫姑神に頼ったのは、桑の葉を摘んで蚕を飼い、蚕の繭から絹糸を採って絹布を織り上げるという一連の作業は、女性の手に任されていた仕事だからであろう。

さて丁姑も紫姑も死んだ日が明らかになっている。丁姑の場合は嫁の休息日の風習に結びつけられているが、紫姑の命日、正月十五日はどのような日であろうか。

【コメントⅡ　紫姑神と正月十五日】

正月十五日は、日本では「小正月」と呼ばれ、松の内の最終日であり、地方によって左義長などの各種の伝統行事が行われる。中国ではこの日は「上元節」で前夜には灯籠まつりが行われ、町の至る所に灯籠が掲げられ賑わったことはよく知られている。しかしこれは道教が流行した唐代以降の風習であって、それ以前は祈蚕に関わる行事が行われていたという。この日は一年の最初の満月の日で，新暦では概ね立春の前後から三月初めにあたる。本格的な農作業が始まる直前で、その年の豊作を願うころである。そして正月十五日は中国の南方ではもともと祈蚕の日であった。

南朝梁の宗懍（りん）による『荊楚歳時記』に

正月十五日には豆粥を作り、その上に油膏を加え、それを門戸に供えて祠る。

と書かれており、その祠りについて、さらに次のように書かれている。

『斉諧記』に、「正月半ばに神が陳氏の宅に降臨し、『ここは蚕室である。もし祭るならば蚕桑を百倍にしてやろう。…』といった」とある。…『続斉諧記』には「呉県の張成が夜起きると、一人の婦人が宅の東南角に立っていて、『ここは蚕室で、私はこの地の神である。来年の正月半ばに白粥の上に膏を浮かべて私を祭りなさい。蚕桑を百倍にしてやろう』といってどこかへ行ってしまった。張成がその通りにすると、毎年蚕が大いに育った」とある。

＊『斉諧記』は、南朝宋の東陽無疑による志怪の書、『続斉諧記』は南朝梁の呉均の志怪の書。

＊蚕室は蚕を飼う部屋。蚕は桑の葉を餌にして、口から絹糸を吐いて繭を作る。

この記述から、荊楚地方（長江中流域）では、正月十五日に養蚕の出来を祈って神を祭る風習が行われていたことがわかる。なお原文にはこの引用部分の初めに、「按」があり、『荊楚歳時記』の隋の杜公瞻の注となっている。東洋文庫本には「（杜公瞻注は）厳密には（宋懍の）本文と区別できない部分も多い」という。この記述から、荊楚地方（長江中流域）では、正月十五日に養蚕の出来を祈って神を祭る風習が行われていたことがわかる。

『荊楚歳時記』にはこのあとに

その夜、紫姑を迎えてこの年の蚕桑を占い、あわせて衆事を占う。

といい、続いて『異苑』の文章を一部簡略して引用している。おそらく古くから行われていた「祈蚕」の風習がいつからか「紫姑神」と結びつけられていったと考えられる。

中村喬氏は、「正月十五日の行事は蚕桑と深い関係にあるが、それには月（太陰）が媒介となっている」という。（『中国の年中行事』平凡社）月は陰性の女性が拝するものであり、蚕桑は女性の仕事であるから、一年最初の満月の日であるこの日が蚕桑に結びつき、女性が女性神である紫姑を迎えて蚕桑を占うようになったというのである。

【コメントⅢ　射鉤の遊び】

紫姑が得意とする「射鉤（せきこう）」とはどんな遊びだろうか。

『唐前志怪小説輯釈』（李剣国輯校）は、「射鉤」は「蔵鉤」という遊びであると指摘する。「射」には、「当てる、推しはかる」の意味があり、鉤を手に蔵して相手にだれがもっているか当てさせるゲームで、李商隠（晩唐の詩人）の「無題」という詩に「座を隔てて鉤を送る　春酒暖かし、曹を分けて射覆す　蝋灯紅

し」と詠われているのがそれであるという。

「蔵鉤」は「蔵彄」ともいう。「彄」は指輪のような環状のもの。『荊楚歳時記』「十二月」に「蔵彄」の行事の項目があり、次のようにいう。

辛氏『三秦記』によれば、「蔵鉤」は、漢の昭帝の母（武帝の鉤弋夫人。玉鉤を握って生まれてきた）に因んで始まった遊びである。また周処『風土記』（周処は西晋の人）によれば、「蔵鉤」は俗に「行彄」と呼ぶ。婦人が作る金環、縫い物に使う指ぬきを使う。臘日（十二月八日）の祭の後にする遊びで、叟と嫗たちが二組（曹）に分かれて勝負する。

＊『藝文類聚』引く『風土記』は「叟と嫗」を「叟嫗児童」とする。

民国の王毓栄著『荊楚歳時記校注』は「今も行われている、太鼓を打っている間に背後で物を次々に隣の人に受け渡し、太鼓の音が止まったところでその物が誰の手の中にあるかを当てるゲームにほぼ相当する」という。

【コメントⅣ　厠神と紫姑】

紫姑を降ろすのは厠か豚小屋の辺りとされている。古代の中国では厠と豚小屋が一体化していて、排泄物や落とし紙代わりの藁を豚が餌としていた。発掘された当時の墓の副葬品に陶製の模型がある）。紫姑が生前やらされていた「穢事」は主に厠と豚小屋の清掃だったのだろう。では紫姑は厠神でもあったのだろうか。『荊楚歳時記』には前述の『異苑』の引用の後に

『雑五行書』に「厠神の名は後帝である」という。『異苑』に「陶侃が厠に行くと、自分は後帝だ、と名のる人に会った。単えの着物を着て平上幘をかぶっている。そして陶侃に、『三年私のことを黙っていたら、言いようのないくらい貴い身分になるだろう』と言った。」後帝の霊が紫姑に憑依して（衆事を占って）言うのだろうか。世間では「汚れた厠は必ず清潔に掃除をしないと紫姑を招くことはできない」と伝えている。

＊陶侃（二五七―三三二）は東晋初期に数々の戦功を立て、長沙郡公に封じられ死後大司馬の位を追贈された。詩人陶淵明の曾祖父に当たる。

中村喬氏は、「後帝」は「紫姑とは別系統の厠神」で「富神的性格をもつ」という。「糞土は古来農業生産の重要な肥料であった」ので、「糞土の作物を産み出す力が敷衍され、その中に富を産む力がひそんでいると考えられた」（糞土信仰）という。しかし、「物を産み出す力が女性の産子の力と同一視される」ので、男神の後帝より、女神である紫姑のほうが「厠神としてより原初的なかたちである」といい、「しだいに農桑のうち女性の仕事である蚕桑の面に片寄り、農産の部分は欠落していった」と論じている。

糞土信仰について論じたものに『中国古典文学に描かれた厠・井戸・簪』（山崎藍著　勉誠出版　二〇二〇年）がある。その「第一章　正と負の厠神―中国にお

ける厠観」では、守屋氏の「紫姑は初め厠神から出発した」という説や、中村喬氏の「紫姑はもともと厠神とする」説には異を唱えている。そして、正妻による虐待から非業の死を遂げた妾の紫姑という一女性への同情から、力を有する神として祀られたのであって、先に厠神ありきではなかった、と考えるのが妥当であろうと述べる。蚕桑の出来を占う側面が強調され、その後南朝梁代に荊楚地方の歳時行事として認知されるに至り、富貴の厠神、後帝が存在する一方、妾の立場から不遇の死を遂げた紫姑は、時を経て生命力や富貴をもたらす糞土信仰、そして鬼払いや治癒力という糞尿自体が有する力と結びつき、厠神の職能が付与されたとみるべきであろうという。

〈参考文献〉

『唐前志怪小説輯釈』（李剣国輯校、上海古籍出版社　二〇一一年）
『荊楚歳時記校注』王毓栄著　台湾文津出版社　一九八八年
『荊楚歳時記』守屋美都雄訳注、布目潮渢補訂　平凡社　東洋文庫　一九七三年
『訳注　荊楚歳時記』中村裕一訳注　汲古書院　二〇二〇年
『中国の年中行事』中村喬著　平凡社　一九八八年
平凡社ライブラリー版　二〇二六年
『中国古代の年中行事』第一冊「春」　中村裕一著　汲古書院　二〇〇九年

（道家春代、藤堂光順）

（3）聖姑

巻二九三

広大な太湖に浮かぶ洞庭山、そこに死後七百年もの間、生けるがごとく、眠るがごとく横臥する聖女がいた。彼女は一体何者だったのか。

呉興郡ノ界首ニ有リ二洞庭山一。山中ニ聖姑ノ祠廟在レ焉ニ。呉志ニ曰ハク、「姑姓ハ李氏、有リテ二道術一、能ヨクフミテ履レ水ヲ行ク。其ノ夫怒リテ而ストヲ殺レ之ヨリ。」自シテ死ルマデニ至レ今、向なんなんトスルモ二七百歳ニ一、而顔貌ごとククルガ如レ生、儼然トシテ側ス臥。遠近ノ祈スル禱者、心レバ至チ則能リ到レ廟ニ、心もシ若レバ不ラ至、風めぐラシノ二其船ヲ一、無シ二得ルヲ達スルヲ者一。今毎月一日ニ沐セシメ為ためニ二爪甲ヲ一、毎日ととのへ粧ス二飾ヲ之一。其ノ形質柔ニシテ弱タダ、只シ如いヌル二寝ノ者一。蓋ケダシ得タルヲ道か。

『紀聞』

【注】

○呉興郡…現在の浙江省湖州市を中心とした一帯。

○界首…他の境域と接する地点、境域のはずれ。

○洞庭山…江蘇省と浙江省の境に位置する太湖の中の東西二つの小島にある山。東山は元・明代以降土砂の堆積がすすみ、陸地とつながって半島となった。西山は別名包山。

○聖姑…姑は女性の総称、聖なる女性。

○祠廟…神をまつる施設

○呉志…一般に呉志は『三国志』の呉書のことであるが、同書にこの記事は見えない。晋代以降『呉地記』、『呉地誌』といったこの地方の記録（地方志）が次々と書かれているが、そうしたものの一つであろうか。

○道術…道教などの術。

○履水行…水の上を歩く。

○向…「なんなんトス」と読み、「もう少しで～になる」の意味。

○在焉…文末の「焉」は多くの場合語調を整える意味のない助字であり、置き字として読まないが、在に続く場合には「ここにあり」と読み、その存在を強調する働きをする。

○儼然…きちんとしたさま。

○心至…聖姑に対する信仰心があついこと。
○除爪甲…爪甲は爪、除はととのえる、の意味。伸びた爪を切り、整えること。
○形質柔弱…体全体が柔らかく、死後硬直やミイラ化がおきていないこと、仙人になったことの一つの証明とされた。
○蓋…「けだし」とよみ、文頭に置いて不確実なことに対し、およその見当を述べる際用いて、「たぶん・思うに」と訳す。
○得道…様々な方法によって不老長生の術を会得し、仙人となること。

【書き下し文】

呉興郡の界首に洞庭山有り。山中に聖姑の祠廟焉に在り。呉志に曰はく、「姑姓は李氏、道術有りて、能く水を履みて行く。其の夫怒りて之を殺す」と。死より今に至るまで七百歳に向とするも、顔貌生くるがごとく、儼然として側臥す。遠近の祈禱する者、心至れば則ち能く廟に至り、心若し至らざれば、風 其の船を廻らし、達するを得る者無し。今 毎月一日に沐浴せしめ、為に爪甲を除へ、毎日之を粧飾す。其の形質柔弱にして、只だ寝ぬる者のごとし。蓋し道を得たるか。

【現代語訳】

呉興郡のはずれに洞庭山がある。その山中に聖姑を祀った廟がある。呉志に次のような記述がある。「聖姑は李という姓で、道教の法術を会得し、水の上を歩くことができた。その夫は怒り、彼女を殺してしまった。」と。その死から今に至るまで七百年にもなろうとしているが、顔かたちは生きているかのようで、きちんと横臥している。あちこちから廟にお祈りしにやってくる者でその信心が篤ければその廟にたどり着けるが、そうでなければ風が船を吹き戻し、廟にたどり着ける者はいない。今毎月一日に沐浴をさせ、爪を切りそろえ整え、毎日聖姑を着飾る。その体は柔らかく、只々眠っている者のようである。思うに不老不死の術を会得し、仙人となったのであろうか。

【出典】

『紀聞』　唐玄宗・粛宗期の人牛粛の撰。
『太平広記』には『紀聞』を出典とする話が多数収録され、『紀聞輯校』（李剣国輯校　中華書局）の前言によれば全部で百二十六話ある。これらの話の多くは玄宗の開元・天宝年間（七一三～七五五）の事件を記したもので、最も遅いのは粛宗の乾元元年（七五八）の事である。
「聞を紀す」という書名のとおり、著者牛粛の見聞きした話を記録しており、内容は、神仙・仏道・鬼神・妖怪・予兆など、およそ志怪の題材となるものは概ねカバーしている。牛粛の伝記は新旧『唐書』になく、生没年もわかっていない

が、彼自身がいくつかの話に登場しており、それらからすると、懐州（現在の河南省、黄河を挟んだ洛陽の北側）の人で、乾元元年に六〇歳余りに至っており、最終の官職は岳州刺史であった。後述の洞庭湖は岳州治内にある。おそらく岳州刺史として岳陽に在った時に「聖姑」の話に聞き及んだのであろう。

【コメントⅠ　聖姑を殺したのは】

前の二話、「丁氏婦」と「紫姑」を虐待して死に追いやったのは、前者は姑、後者は正妻であり、当時の家庭における嫁と妾の地位の低さを示している。非業の死を遂げた無念がこの世に恨みを残させて彼女たちを神にさせ、またその境遇に同情した人びとが彼女たちを祀り信仰したのだろう。

聖姑を殺したのは夫であるが、その理由は彼女が水上を歩くことができるという、特殊能力を持っていたからである。おそらく彼女は丁姑と紫姑とは違い、生前から神仙となる資質を持っていたのだろう。聖姑に対する夫の怒りは、特殊能力を持った妻に対する恐怖心、自分に従うべき妻が自分を上回る力を有し、抑えきれないのではという恐怖心が変じたものであろう。とすれば夫が彼女を殺害するに至ったのは、やはり家庭における女性の地位の低さが根底にある。特殊能力を持ったのが夫ならば、妻は従うばかりで決して夫を殺さなかっただろう。

本文中に「死より今に至るまで七百歳に向んとす」とある。「今」が牛肅が岳州刺史であった七五八年頃であれば、聖姑は西暦六〇年前後、後漢の明帝（在位五七～七五年）の頃に死んだことになる。はるか過去のことであるせいか、「丁氏婦」「紫姑」のように、作者がほぼ同時代に書き記した作品と較べて、また『紀聞』中の他の作品と較べても、描写が淡々としているように感じられる。

【コメントⅡ　女仙について】

仙人といえば白い髭をはやし、杖をついたおじいさんを思い浮かべることが多いと思うが、この話に出てくるように女性の仙人も存在するとされていた。『太平広記』巻五六～巻七〇には神仙とは別に女仙という項目がたてられ、いろいろな女仙について述べられている。女仙のトップは崑崙山に住むという西王母なのだが、その侍女的な存在の女仙、深山の中で神仙道を求める若者を導く女仙などが語られている。中には普通の主婦として生活し、子供が手をはなれた後、家族と生活の場を隔て、道教の新派の開祖になったり、さらには仙人になったという、なにか身につまされる女性もいる。彼女は病気治療の知識や予知能力をも備え、西晋末期戦乱に見舞われた中国北部から南部へ家族を導いていったとされている。俗世を超越した仙人というよりも、時代の様相を色濃く反映した仙人といえるだろう。

巻六二に収録されている「紫雲観女道士」は『紀聞』が出典である。あらまし

は次のようである。

開元二十四年春二月、時の皇帝玄宗が東京（洛陽）に在った時、大風に乗って女道士が飛んできて玉貞観の鐘楼に止まり、見物人が押し寄せて取り囲んだ。河南尹（都の長官）が群衆に怒り、むち打ったが、風に乗ってやってきた女道士は打たれても平気で傷つくこともなかった。それを聞いた玄宗が女道士を呼び事情を聞くと、蒲州にある紫雲観の女道士で、長らく穀物を絶って身が軽くなり、風に乗ってここにやってきたという。玄宗は敬畏し彼女に金帛を賜わり蒲州に送り帰らせた。数年後、また風に乗り、飛び去って行方がわからなくなった。

＊紫雲観・玉貞観…観は道教のお寺、道観。

＊蒲州…現在の山西省の西南に位置する。洛陽から西北西に一六〇キロメートル余り離れている。

聖姑が水上を歩けたのも身が軽かったからだろう。夫に殺されなければ、彼女もこの女道士のように風に乗って飛び去ったかもしれない。

【コメントⅢ　洞庭山と洞庭湖】

洞庭という言葉から多くの人々が連想するのは湖南省にある淡水湖として中国第二の広さを誇る洞庭湖だろう。ではこの話にある太湖中の洞庭山の名前の由来は何なのか。

洞とは「押し広げる」の意味であり、広大な様を表す。庭は空間・広場を意味し、熟語として広大な空間ということになる。太湖の「太」も言うまでもなく広大なという意味がある。したがって洞庭湖も太湖ももとは広大な湖という普通名詞から長い歴史の過程で固有名詞化していったものである。その過程では二つの湖をともに太湖あるいは、洞庭湖と呼ぶという混乱も起きている。さらにややこしいことには湖南の洞庭湖湖畔にある君山を洞庭山ともいうことさえある。こうした洞庭という字義からくる共通性が、二つの湖・山がおなじ呼称を冠する一つの理由として考えられる。ただしこの現象の背景にはより奥深い事情が存在する。それを示すのが西晋から東晋にかけての人　郭璞の次のような言葉である。

洞庭とは洞窟のことである。長沙の巴陵にある。今呉県の南の太湖中に包山があり、その下に洞庭があり、その穴は湖の下を通り、ありとあらゆる所に通じている。これを地脈という。（『山海経』郭璞注）。

郭璞は名文家・学者であり、かつ天文と卜筮に通じた道教的占い師でもあった。長沙の巴陵とは今の湖南省岳陽市であり、そこには前述の君山（一名洞庭山）がある。この君山と太湖中の洞庭山（一名包山）とが洞窟によって相通じているという観念がいつしか生まれ、二つの山が同じ名称であることの遠因となっていたことを郭璞の言葉は推測させる。この地脈によってつながる地下深くのあちこち

には洞天という仙人がすむ世界があるという観念は、六朝期以降ますます拡大し唐代に至る。この聖姑の話も、この神秘的な太湖・洞庭山にまつわる洞天思想を背景として生まれたと考えられる。

【コメントⅣ　聖姑その後】

元末明初の人陶宗儀が編纂した一大叢書『説郛』に、唐代の陸長源の『弁疑志』が収められ、その中に「聖姑棺」という記事がある。その内容を簡単に紹介しよう。

太湖の洞庭山中に聖姑の棺がある。棺は聖姑を祀る祠の中にある。俗伝では聖姑は山中で死にすでに数百年たつが、その容貌は生きているかのようだとされている。遠近からやってきた人々は衣服や化粧品を奉納し絶えることがない。巫が、棺の中を覗けば風雨の災いが起きると脅すので、誰もその中を見ようとはしなかった。また巫は、中を見た者の話として、その衣装はきちんとしてまるで生きているかのようであると言いふらしていた。大暦年間（七六六～七七九）大官の息子で凶悪かつ親の威光をかさにきた男が使用人を引き連れて棺を開けさせたが、中には骨があるのみ、しかし風雨の災いは起こらなかったという。

ここには『紀聞』の記事とは異なり、棺と巫が登場する。おそらく毎月一日に沐浴させ、爪を切り、毎日着飾らせるというのも、巫の語った話であり、人々が目にしたことではなかったであろう。多くの神的現象が、実は巫の口を通して語られていることの一つの証左といえよう。

（榎本あゆち、道家春代）

（4）神になった女性のまとめ

丁姑・紫姑・聖姑の三人の女性神は、皆非業の死を遂げ、死後神となったことが共通している。非業の死の末に神になったのは、伍子胥・屈原など男性にも多い。男性神たちが政治の世界で敗北した末に死んだのと違い、彼女たちの非業の死の根底には、家庭内での女性の弱い立場があった。丁姑は姑に虐待されて自殺、紫姑は妾の身分で正妻に汚れ仕事に使役され続けて発狂死、聖姑はその超能力を夫に嫌悪され殺された。家庭内で厳しい立場に追い込まれていた女性は当時珍しくなかったことだろう。彼女たちに同情し我が身を重ねた人びとが、彼女たちを神とし拠り所とした。彼女たちはなぜか自分を死に追い込んだ仇に祟ることはない。おだやかに自分を信仰する人びとの願いを聞き、疑う者には罰を与えるだけである。

しかし、三神の祀られ方、信仰のされ方は、三者三様である。

丁姑は死後しばらくして姿を現し、パフォーマンスをしながら長江を渡り、その霊験を見せつけ、自分の命日を家庭婦人の休息日とし、各地に祠が作られ祀られた。丁姑が本当に姿を現したとは考えられない。おそらく実際は丁姑を神に仕立てた巫女がそのような宣伝活動をしたのだろう。

紫姑は自分の姿を現すことはなく祀る祠もなく仕える巫女もいない。彼女を信じる人びとが、人形を依り代として霊を降ろし、その年の養蚕や身近なことを占ってもらう。日本の「こっくりさん」のように素樸な神である。

丁姑と紫姑が生前の姓名に因んで呼ばれているのと違い、聖姑の生前の姓名は不明で、「聖なる姑」と呼ばれている。生前水上を歩けるという超能力を持っていたが、生得の能力ではなく、「紫雲観女道士」のように穀断ちをし修業をして得た能力ではなかろうか。道教には身体不滅の考えがあり、穀断ちや服薬、また修業をして得道したものは死後に仙となり、肉体がいつまでも原形を留めていたり、尸体が跡形もなく消失したり、時には剣や杖が代わりに残されていたりするという。水上歩行ができた聖姑は生前から仙道修業をする仲間たちから尊崇を得ていて、遺体を守られたからこそ「聖姑」という名を得たのだろう。

「丁氏婦」「阿紫」「聖姑」の三篇は、民間信仰の多様な形を示しているといえるだろう。

（道家春代）

第三部　自然神

一　水の神

人間社会に大きな影響力を持つ自然、特に山や河川・湖沼には神がすむとして世界の各地で信仰の対象となってきた。河川や湖沼は農業生産に深い関わりがあり、また交通往来にも利用されていた。中国には古来「南船北馬」ということばがあり、黄河流域以北では馬に代表される陸上交通、長江流域を中心とした南部では船に象徴される水上交通が盛んだった。南部ではそのため水上交通に関連し、河川や湖の神に関する話が残されている。また、第二部　神と祀られた人物で紹介されたが、伍子胥や屈原のように、その死が水に関する者には水神の祭りが関連していた。ここではまず川や湖の神々に関する話から紹介する。

（1）欧明　　巻二九二

欧明という男が、船行するたび水中に捧げ物を投下していたが、湖の神からお礼を受けることになった。与えられたのが如願（お望み通り）という名の召使いであった。彼女によって欲しいものを手に入れ富を得たが、…という話。

廬陵邑子欧明者、従賈客、道経彭沢湖。毎過輒以船中所有多少投湖中。見大道之上有数吏。皆著黒衣乗車馬。云「是清洪君使、要明過。」明知是神、然不敢不往。吏車載明、須臾見有府舎門下吏卒。吏曰「清洪君感君有礼。故要君以物送。君皆勿取。独求如願耳。」既至、果以繒帛贈之。明不受、但求如願。神大怪明知之、意甚惜之。不得已呼如願、使随明去。如願者、清洪婢、常使取物。明将如願帰。所須輒得之。

数年成二富人一。意漸驕盈不三復愛二如願一。正月歳朝、雞初一鳴、呼二如願一。如願不二即起一、明大怒欲レ捶レ之。如願乃走二於糞上一。有二昨日故歳掃除聚薪一、足二以偃レ人。如願乃於レ此逃得レ去。明猶謂三逃在二積薪糞中一、乃以レ杖捶レ糞使レ出。又無二出者一、乃知レ不レ能レ得。因曰「汝但使二我富一、不二復捶レ汝。」今世人歳朝雞鳴時、輒往捶レ糞云「使二人富一。」

『録異伝』

【注】

○廬陵邑子…廬陵は今の江西省吉安市付近に置かれた郡と県。邑はこの場合県のこと。邑子は一般的に同郷の人と訳すが、ここでは限定的に廬陵県の人という意味。

○賈客…商人。

○彭沢湖…別名彭蠡沢、今の鄱陽湖、欧明の郷里廬陵から贛水を北に下るとこの湖に至り、さらに北上すると長江に至る。

○清洪君…通行本『捜神記』第四巻にその名が見え、青洪君・青湖君とも表記される。彭沢湖の水神と考えられる。

○不敢不往…「不敢不ー」は二重否定で、「ーせずにはいられない」と訳す。

○須臾…またたくまに、の意味。

○繒帛…「繒・「帛」、ともに絹織物のこと。

○漸…「や（よ）うやく」と読んで、「だんだんに」の意味。

○驕盈…「驕」「盈」、ともにたかぶるの意味。

○不復愛如願…「不復ー」は「二度とーしない・もうそれきりーしない」と訳す。

○正月歳朝…正月歳朝、元旦の事。

○糞上…糞は掃除して出たごみ、ごみを集めた掃き溜め、ごみ捨て場の意味。上は、そば、ほとりの意味。

○薪…ここでは柴や草の意味。
○故歳掃除…故歳は去年のこと、年の暮れの大掃除のことか。

【書き下し文】

廬陵の邑子欧明なる者，賈客に従ひ、道 彭沢湖を経。過ぐる毎に、輒ち船中に有る所の多少を以て湖中に投ず。大道の上に数吏有るを見る。皆黒衣を著、車馬に乗る。云はく、「是れ清洪君の使ひにして，明の過ぐるを要ふ」と。明是れ神なるを知るも、然れども敢へて往かずんばあらず。吏 車もて明を載せ、須臾にして府舎門下に吏卒有るを見る。吏曰はく、「清洪君 君の礼あるに感ず。故に君を要へ物を以て送らんとす。君 皆取る勿かれ。独り如願を求むるのみ」、と。既に至るに果して繒帛を以て之に贈る。明受けずして、但だ如願を求む。神大いに明の之を知るを怪しみ、意甚だ之を惜しむ。已むを得ずして如願を呼び、明に随ひて去らしむ。如願なる者は，清洪の婢にして、常に物を取らしむ。明如願を将ゐて帰る。須むる所は輒ち之を得。

数年にして富人と成る。意漸く驕盈、復た如願を愛しまず。正月歳朝、雞初めて一鳴し、如願を呼ぶ。如願即ち起きざれば、明 大いに怒りて、之を捶うたんと欲す。如願 乃ち糞上に走る。昨日故歳の掃除に聚めし薪有りて、以て人を偃すに足る。如願 乃ち此に於いて逃げて去るを得。明 猶ほ逃げて積薪糞中に在りと謂ひ、乃ち杖を以て糞を捶うち出でしめんとす。又出ずる者無ければ、乃ち得る能はざるを知る。因りて曰はく、「汝 但だ我をして富ましむれば、復た汝を捶うたず」と。今世人歳朝雞鳴の時，輒ち往きて糞を捶うちて云ふ、「人をして富ましめよ」と。

【現代語訳】

廬陵県の欧明という者は商人とともに一緒に旅をし、彭沢湖を経由した。通過する際にはいつも舟の中にある物のいくらかを湖中に（捧げものとして）投じていた。（ある時湖に現れた）大道の傍らに数人の役人の姿が見えた。皆黒い衣を着て馬車に乗っていた。言うにことは、「私は清洪君の使いの者で、あなたがここを通られるのをお待ちしておりました」と。明はそれが神だと分かったが、行かないわけにはいかなかった。役人が明を馬車に乗せると、あっという間に役所の建物の門のあたりに役人たちがいるのを目にした。役人は言った、「清洪君はあなたが礼儀正しいのに感じ入り、そのためあなたをお迎えし贈り物をされようとしておられます。しかし何も頂いてはなりません。ただ如願をもとめなさい」と。明が清洪君のもとに至ると、果たして清洪君は絹織物を明に贈ろうとした。明は受け取らず、如願を下さいとひたすら要求した。清洪君は明が如願のことを知っているのを大変いぶかしく思い、また非常に惜しんだが、仕方なく如願を呼

び、明に従って行かせた。如願というのは清洪君の召使で、いつも（望んだ）物が手に入るようにしてくれるのだった。明は如願を連れて帰った。望んだものはすぐに手に入れた。

数年で金持ちになると、だんだんと驕慢になり、如願を大事に思うこともなくなった。正月元旦に一番鶏が鳴くと、如願を呼んだ。如願はすぐには起きなかったので、明は大いに怒り、如願を笞で打とうとした。如願はなんと掃き溜めに逃げ込んだ。そこには年末の掃除で集められた柴や草が積まれており、人が隠れることができるほどだった。如願はそこに逃げ（明のもとから）逃亡することができた。明は如願が逃げてまだ積んだ柴の掃き溜めの中にいると思い、掃き溜めを棒で打ちすえ、如願を出てこさせようとした。出てくるものが無かったため、ようやく捕まえることができないと思い知った。そこで明は言った、「おまえが私を豊かにしてくれさえすれば、もう打ちすえたりしないから」と。今世間の人々は元旦に一番鶏が鳴くと、いつも掃き溜めに行って打ちすえ、「私を豊かにしてくれ」と言うのだった。

【出典】

『録異伝』　編者不明、その成立は南朝最後の王朝陳代頃とされている（李剣国『唐前志怪小説輯釈（修訂本）』上海古籍出版社、二〇一一）。

【コメント1　船旅と安全祈願】

この話の冒頭にあるように、古来船旅をする者は、安全祈願として水神に捧げ物をした。特に彭沢湖（鄱陽湖）は危険な水域として知られ、この湖を航行する者がその安全を廬山廟の神や宮亭湖（彭沢湖の別称）廟の神に祈願する話や、それらの神々と航行者をめぐる話が『搜神記』『異苑』『述異記』などの六朝志怪小説には多く見られる。廬山廟（宮亭湖廟）は、廬山の麓、湖の西岸にあった。廬山廟の信仰については、宮川尚志氏『中国宗教史研究』第一　第七章　孫恩・盧循の乱、特にその第二節　宗教史的考察　廬山廟の信仰に詳しい。この点については、次の「山の神」の「顧邵」「欒巴（らんは）」においても触れるので、そちらも参照していただきたい。

【コメントⅡ　如願の故事】

この『録異伝』の如願の話は、形を少しずつ変えながら、現代にまで伝わっている。中国文学研究者の内田道夫氏は、唐代伝奇「柳毅伝」（後掲「洛子淵」参照）にこの如願のモチーフが引き継がれているとする。「柳毅伝」の粗筋は以下の通り。

進士に落第した主人公が故郷への帰途、婚家で虐待されている女性に出会う。

彼女は洞庭湖の竜王（水神）の娘であり、柳毅の知らせにより竜王一族によって救われる。柳毅は竜王からお礼に多くの財宝を与えられ富人となり、最後には竜女を妻とした。

内田氏は、人が神から物品を与えられるという民話的要素は、水神説話の特徴であるとし、それがこの欧明（如願）の話に顕著にみられることを指摘する。そこから六朝志怪小説が、唐代伝奇成立の基盤をなしているとする（内田道夫『中国小説研究』　一一四頁）。唐代以降この話には仏教的要素が加わるなどさらに変化が生じるが、清代には雑劇の演目になり、現代でも民間伝承として継承されている。なお「柳毅伝」については、この項の最後「洛子淵」でも触れる。参照していただきたい。

【コメントⅢ　打糞の行事】

如願の故事とともに打糞も後世に引き継がれる。南朝期における長江中流域の風俗を記した『荊楚歳時記』元旦の項にも「又以錢貫繋杖脚、廻以投糞掃上、云令如願（又銭貫を以て杖脚に繋ぎ、廻して以て糞掃上に投じ、願いの如くせしめよ、と云う」とあり、こん棒の端に括り付けた銭指しの縄を握ってこん棒を振り回し、ごみ溜めの傍に投げ、「望み通りにさせよ」、と言う行事があったことが記されている。この記事に付されている隋の杜公瞻の注記には、本文とほぼ同じ『録異伝』の話が記され、末尾に「今　北人　正旦の夜、糞掃の辺に立ち、人をして杖を執り糞堆を打ち、以て仮痛に答えしむ。又細縄を以て偶人を繋ぎ、糞掃中に投じ、願いの如くせしめよ、と云う。意は亦た如願の故事たるのみ」との杜公瞻自身のの言葉が記されている。この注記から隋代には北方でも如願の故事が語られ、打糞によって「仮痛」即ち体の痛みの緩和を願ったり、如願の形代（かたしろ）である人形を掃き溜めに投げ入れ、富の獲得を願う行事があったことが知られる。さらに元旦の行事とされた打糞は大晦日や正月一五日の行事となって、富の追求から健康祈願にまでその目的を広げ、後世に受け継がれている。これらのことについては、謝明勲氏『六朝志怪小説故事考論―「伝承」・「虚実」問題之考察与析論―』（里仁書局　民国八八年）に詳しい。

【コメントⅣ　なぜ欧明は怒ったのか】

それでは如願が逃げ出す原因となった欧明の怒りとは何によるのか。『荊楚歳時記』の正月一日の項に以下の内容の記述がある。

鶏が朝一番に鳴いたならば人々は起床し、身なりを整える。息子は父母に、その妻は舅姑に恭しく仕えるが、鶏が朝一番に鳴いたなら、洗顔し口を漱ぎ整髪した後に両親舅姑のご機嫌伺いに伺候する。これは日常の事であるが、元旦

には官人であれば朝廷・役所の朝賀の儀式があり、私人であっても家の祭祀をするため、いつもより早く起床しなければならない。

いつもより早起きしなければならない元旦に如願が遅れたため、欧明が激怒したというのであろう。

（榎本あゆち）

（2）観亭江神　　巻二九一

前の話では、主人公の水神に対する敬虔な態度が神からお礼を受けるきっかけとなっていたが、不遜な態度をとるとどうなるのか。船の難破沈没や航行不能の事態などが当然思い浮かぶが、この話では、さらに恐ろしい罰が水神から与えられている。その水神の住む世界とはどのようなものだったのか。

秦時、有中宿県千里水観亭江神祠壇。経過有不恪者、必狂走入山、変為虎。

中宿県民至洛、反路見一行旅。寄其書曰「吾家在亭廟前。石間懸藤即是也。但扣藤、自有応者。」乃帰如言、果有二人従水中出。取書而淪。尋還云「江伯欲見君。」此人不覚随去、便覩屋宇精麗。飲食鮮香、言語接対、無異世間也。

『南越志』

【注】

○中宿県…今の広東省清遠市。

○千里水…清遠市を流れる北江（当時は溱水）の一流域、正しくは一里水。

○反路…帰り道。

○但扣藤…この「但」は、仮定条件を表す。「ただ藤を扣けば、…となる」の意味。

○尋…「ついで」と読んで、「間もなく、すぐに」の意味。

○江伯…川の神。

○接対…接待と応対。

【書き下し文】

秦の時、中宿県千里水観亭の江神祠壇あり。経過して恪まざる者有れば、必ず狂走して山に入り、変じて虎となる。

中宿県の民 洛に至り、反路に一行旅を見る。其の書を寄せて曰はく、「吾が家は亭廟の前に在り。石間の懸藤 即ち是れなり。但だ藤を扣(たた)けば自ら応ずる者有らん」と。乃ち帰りて言の如くすれば、果たして二人の水中より出づる有り。書を取りて淪(しづ)む。尋(つ)いで還りて云はく、「江伯 君を見んと欲す」と。此の人 覚えずして随去し、便ち屋宇精麗なるを覩(み)る。飲食は鮮香にして、言語接対は世間に異なる無きなり。

【現代語訳】

秦の時のこと、中宿県千里水の観亭に江神の祠壇があった。通り過ぎるときに敬虔な態度を取らない者がいると、必ず狂ったように走りだして山中に入り、変(へん)化(げ)して虎となった。

中宿県の民が洛陽に行き、帰路の路上で一人の旅人に出会った。その旅人は手紙を託して、「私の家は観亭廟の前にあります。岩の間に垂れ下がった藤こそが私の家なのです。藤を叩きさえすれば、応える者があるでしょう」と。そこで帰って旅人の言った通りにすると、やはり二人の人物が水中から現れ、手紙を受け取って水中に沈んでいった。まもなく戻ってきて言うには、「江伯さまが君(あなた)にお会いしたいとのことです」と。この人は知らずに二人についていくと、すぐに精緻で華麗な家屋が目に入った。飲み物も食べ物も新鮮で香りよく、言葉やもてなし、会話もこの世のものと変わらなかった。

【出典】

『南越志』 南朝宋の沈懐遠撰。当時の嶺南地方（今の広東省・広西チワン族自治区、及びベトナム北部を含む地域）について記した地方志。

【コメントⅠ なぜ手紙が登場するのか】

この世の人間が水神の世界に入るのには、この話のように水神の縁者に手紙を託され、水神のすみかに届けるというパターンが、この話の他にも見られる。神とその家族、彼も又神なのだから、消息のやりとりも超自然のやり方、例えば瞬間移動の神通力を使えばよいものを、とつい考えてしまうが、そこには当時の実際の社会の人々の手紙に対する特別な思いがあったように考えられる。この点については最後の「洛子淵」で詳しく触れられる。

【コメントⅡ 「恪(つつし)まざる者」とはどのような者か】

この話の舞台となった溱水の支流で、同じく広東省北部を流れる洭(きょう)水（現連江）、その川岸に聖鼓と呼ばれる枯木が横たわっていた。川を上下する船頭がそれを棹で突くと、祟りで船頭は瘧(ぎゃく)（マラリア）にかかったという（『始興記』

『太平御覧』巻七七一　所引、『荊州記』　同　巻七四三　所引）。またその『荊州記』には、次のような興味深い話が記載されている。所は変わって長江の難所として名高い三峡の一つ瞿唐灘のほとりに霊験あらたかな神廟があった。そこを舟で通過する刺史や太守（州や郡の長官）たちのおともの楽隊は、神廟の前では太鼓や笛の音を鳴らすのを慎んだという。またその舟の船頭は棹が岩に当たって音をたてるのを防ぐため棹の先端を布でくるんだという。どうも川の水神は静謐を好んだようで、本話の恪（つつし）まざる者も、廟前を通過する際に騒がしい音や声をあげた者である可能性が考えられる。騒がしくすることが、恪まざる事の一つとして考えられるだろう。

（榎本あゆち・都築晶子）

（3）温嶠

巻二九四

欧明や中宿県の人が水中で見た壮麗な御殿は、水神の世界がまさに異世界であることを示している。ただ水底は、昼なおほの暗く、夜間ともなれば果てしなく黒々とし、鬼神の棲む世界として不気味さをもって語られるものでもあった。

古今相伝、夜以火照水底、悉見鬼神。
温嶠平蘇峻之難、及於湓口。乃試照焉、果見官寺赫奕、人徒甚盛。又見群小児、両両為偶、乗軺車、駕以黄羊。睢盱可悪。温即夢見神、怒曰「当令君知之」。乃得病也。

『志怪』

【注】

○温嶠…字は太真。東晋初期の重臣。文武両面に優れ、王敦・蘇峻の反乱を平定するのに大きな功績を挙げた。

○蘇峻…字は子高。東晋初期の軍閥、三二七年に朝廷に対し反乱を起こし、都の建康を占領したが、温嶠らに討伐された。

○湓口…鄱陽湖の北、長江に接する地点。今の江西省九江市の西。古来軍事上の重要拠点であった。

○官寺…役所。寺も役所の意味。

○赫奕…光り輝くさま、物事が盛大なさま。

○群小児…群れをなす子どもたちのこと。

○両両為偶…二人で並んで、向かい合って、の意味。

○軺車…①一頭立ての手軽で便利な車、②使者が乗る車、③朝廷の緊急な勅令を伝える使者。ここは①の意味であろう。

○睢盱…目を見開いて睨む様。

【書き下し文】

古今相ひ伝ふ、夜 火を以て水底を照らせば、悉く鬼神を見る と。
温嶠 蘇峻の難を平らげて、湓口に及ぶ。乃ち試みに焉を照らせば、果たして

官寺の赫奕(かくえき)として、人徒甚だ盛んなるを見る。又群小児を見るに、両両偶を為し、軺車(えうしや)に乗り、駕するに黄羊を以てし、睢盱(くゐく)悪(にく)むべし。温　即ち夢に神を見るに、怒りて曰はく、「当に君をして之を知らしむべし」と。乃ち病を得るなり。

【現代語訳】

昔からの言い伝えでは、夜に火で水底を照らせば、必ず鬼神が見えるという。温嶠が蘇峻の反乱を平定した後（根拠地の江州武昌に帰る途中）湓口に至ったとき、そこで試しに水底を照らしてみると、本当に立派な役所や多くの人々の姿が見えた。そのうえたくさんの少年たちが二人ずつ組となって、黄色の羊に引かせた小さな車に乗りながら、こちらを憎々しげに睨みあげているのが見えた。その後すぐに温嶠の夢に神が現れ、怒って「きっと君に思い知らせてやろう」と言った。なんと温嶠は病気になってしまった。

【出典】

『志怪』　唐代に作られた図書目録『隋書』経籍志には、①『志怪』祖台之撰、②『志怪』孔氏撰、③『志怪記』殖氏撰、の三種類が載せられている。祖台之は東晋末の人。孔氏と殖氏は不明。この話がどれを出典とするか不明。

【コメント　晋書の記載との差異】

この話に相当する記事が『晋書』巻六七の温嶠の伝と志怪小説集『異苑』にあるが、かなり違ったものとなっている。ここでは『晋書』の内容を紹介しよう。

蘇峻の乱を平定した後温嶠は、中央で大臣としてとどまるようにとの朝廷の意見を振り切り、根拠地の江州武昌に帰ろうとし、途中で牛渚磯に至った。その水深は計り知れず、世間ではその水底に怪物が多く棲むと言っていた。温嶠はそこで貴重な犀の角を燃やし水底を照らさせた。すぐに奇形異常な形の水中の生き物が（水面に映った）炎を覆い隠すほど集まってきた。さらに赤い衣を着て馬車に乗っている者の姿も見えた。その夜、温嶠は、ある人物が自分に向かって「君と私は幽明（異界と人間界）道を異にしているのに、どういうつもりで私の姿を照らし出すのだ」という夢を見て、大変気味悪く思った。嶠は前々から歯痛を患っており、そこで抜歯したが、そのために病となり、武昌に帰って十日もたたぬうちに亡くなった。

『晋書』では、話の舞台が湓口ではなく都建康近くの長江の岸辺牛渚磯となっている。夢の中に現れた人が「幽明道を異にする」と言っているが、温嶠が明界（人間界）の者であるのに対し、その人が幽界（鬼神の住む世界）の存在であることを意味する。『志怪』の話にはこうした記述はないが、水底に「鬼神」が棲むといっており、やはり水底は鬼神の世界とされている。その異世界にも官寺、

即ち役所があるというのは志怪小説によく記載されている。

死者の世界にも官寺、即ち役所があるというのは冥界話によく記載されている。水中の世界は、異世界であると共にまた死者の世界であることがこの話からわかる。

なお溢口は、蘇峻らの反乱軍に襲われた都建康を救援するため温嶠軍が最初に集結した場所、牛渚磯は反乱軍が長江北岸から建康を襲撃するため渡江した地点、共に蘇峻の乱での重要地点となっている。このためこの二つの同じような話が形成されたと思われる。

（榎本あゆち）

（4）洛子淵　　巻二九二

以上三話の舞台はどれも中国南部であるが、この「洛子淵」の舞台は北部、北魏の都洛陽を流れる洛水のほとり。短い話ではあるが、読む者を不思議で不気味な世界に誘ってくれる。またその背景には歴史の栄枯盛衰と動乱が見え隠れしている。

後魏孝昌時、有虎賁洛子淵者。自云洛陽人。孝昌中、戍於彭城。其同営人樊元宝得仮還京師、子淵附書一封云「宅在霊台南、近洛水郷。但至彼、家人自出相接。」元宝如其言、至霊台南、見無人家、徙倚欲去。忽見一老翁。問云「従何而来、徬徨於此。」元宝具向道之。老翁云「是吾児也。」取書、引元宝入。遂見館閣崇寛、屋宇佳麗。既坐、命婢取酒。須臾、見婢抱一死小児而過。元宝甚怪之。俄而酒至。酒色甚紅、香美異常。兼設珍羞、海陸備有。飲訖告退。老翁送元宝出云「後会難期、以為悽恨。」別甚殷勤。老翁還入、元宝不復見其門巷。但見高崖対水、渌波東傾。一童子可年十四五、新溺死。鼻中血出。方知所飲酒、乃是其血也。及還彭城、子淵已失矣。元宝与子淵同戍三年、不知是洛水之神。

『洛陽伽藍記』

【注】

○後魏…北魏（三八六～五三四）ともいう。南北朝時代、鮮卑族の拓跋珪（たくばつけい）が建てた北朝の国。始め平城（現在の山西省大同市）に都を置き、孝文帝の時（四九四）洛陽に遷都した。

○孝昌…孝明帝の年号。五二五～五二八。

○虎賁…王や王宮を守る兵士。

○彭城…地名。今の江蘇省徐州市。南朝梁との国境に近くにあった。孝昌元年には徐州の長官元法僧が叛乱を起こし、宋王と号して梁に降った。彭城に徐州の役所があった。

○戍…国境を守備する。

○営…兵営。軍隊の編成単位。

○仮…休暇。

○京師…都。当時は洛陽に都があった。

○書…手紙。

○但至彼…「但」は仮定条件を表す、「彼」は遠称で「あれ・あそこ」の意味。

○霊台…後漢の光武帝（在位二五～五七）が築いた天文・気象を観測し、吉凶を占うために築いた高台。盛土して突き固めて築き、その上で天文・気象を観測し、吉凶を占った。元は高六丈（約十四メートル）方二十歩（約二十メートル四方）だったという。洛陽は北魏以前に、東周・後漢・三国魏・西晋が都を置いた。『洛陽伽藍記』に、当時霊台は崩れていたもののまだ五丈余り残っていたと記されている。洛水はこの南を流れていた。

○徙倚…さまよう、うろつく、ぶらつく。

○忽…たちまち、突然。

○傍徨…彷徨に同じ。

○須臾…少しの間、わずかの時間。

○俄…まもなく、おっつけ、やがて。

○珍羞…珍しいご馳走。

○殷勤…しきりに、くり返し。

○渌…澄み切ったさま。

○可…ばかり。数詞や数詞を含む語の前において概数を推しはかる語。

【書き下し文】

後魏の孝昌の時、虎賁（こほん）の洛子淵といふ者有り。自ら云ふ洛陽の人なりと。孝昌中、彭城を戍（まも）る。其の同営の人樊（はん）元宝 仮を得て京師（けいし）に還るに、子淵 書一封

を附して云ふ、「宅　霊台の南に在り、洛水郷に近し。但だ彼に至れば、家人自ら出でて相ひ接へん」と。

元宝　其の言の如くし、霊台の南に至るも、人家無きを見て、徙倚して去らんと欲す。忽ち一老翁を見る。問ひて云ふ、「何く従り来りて、此に徬徨するや」と。元宝　具に向ひて之を道ふ。老翁云ふ、「是れ吾が児なり」と。書を取り、元宝を引きて入る。遂に館閣崇寛にして、屋宇佳麗なるを見る。既に坐し、婢に命じて酒を取らしむ。須臾にして、婢の一死せる小児を抱きて過ぐるを見る。元宝甚だ之を怪しむ。俄かにして酒至る。酒の色甚だ紅く、香美常と異なる。兼ねて珍羞を設け、海陸　備く有り。飲み訖りて退くを告ぐ。老翁元宝を送り出でて云ふ、「後会期し難し、以て悽恨と為す」と。別ること甚だ殷勤なり。

老翁還りて入れば、元宝復た其の門巷を見ず。但だ高崖の水に対し、渌波東に傾くを見るのみ。一童子の年十四五可り、新たに溺死す。鼻中より血出づ。方に飲む所の酒、乃ち是れ其の血なるを知るなり。彭城に還るに及び、子淵已に失ふ。元宝　子淵と同に戍ること三年、是れ洛水の神なるを知らず。

【現代語訳】

北魏の孝昌の頃、洛子淵という虎賁の兵士がいて、自分は洛陽の人だと言っていた。孝昌年間には彭城の守備をしていた。部隊の同僚の樊元宝が休暇を得て都洛陽に帰ることになると、洛子淵は彼に一通の手紙を託して言った、「私の家は霊台の南、洛水郷の近くにあります。そこへ行きさえすれば家のものが自分から迎えに出てきます」と。

樊元宝は彼の言うとおり霊台の南に行ってみたものの人家が見えなかったので、あたりをうろうろしてから立ち去ろうとした。するといつの間にか一人の老人が現れて「あなたはどちらから来て、ここを行ったり来たりしておられるのかな」と尋ねた。元宝はそこで詳しく事情を話した。老人は「それは私の息子です」と言って手紙を受け取り、元宝を連れて行った。すると高く寛い屋敷が現れ、建物は美しく造作されていた。席に着くと老人は下女に酒の用意を命じた。まもなく下女が死んだ子どもを抱いて通り過ぎるのが目に入ったので、元宝は大変いぶかしく思った。やがて酒が出されると、その色は真っ赤で、香りも味も常ならぬおいしさだった。さらに水陸の産物がそろった珍しいご馳走も出された。食事が終わり元宝がいとまを告げると、老人は彼を送り出して「もう二度とお目にかかれないでしょう。とてもつらく残念です」と言い、何度も別れを惜しんだ。

老人が屋敷に戻っていくと、元宝には屋敷の門が見えなくなってしまい、ただ高い崖が洛水に臨み、澄み切った波が東に流れていくのが見えるだけだった。十四、五歳ぐらいの子どもが溺死したばかりのようで、鼻から血が流れていた。元宝はこの時、飲んだあの酒はこの子の血だったと悟った。彭城に戻ると子淵はも

ういなくなっていた。元宝は子淵と三年間ともに宿営していたが、洛水の神だと知らなかった。

【出典】

『洛陽伽藍記』　北魏末の楊衒之（ようげんし）の著。全五巻。

伽藍は仏教寺院。北魏は歴代皇帝を始め皇族・貴顕が篤く仏教を信仰していた。平城から洛陽に遷都すると、彼らは競うように壮麗な寺院を建立し、仏像を荘厳に飾り立てた。しかし、永熙三年（五三四）に北魏が東魏と西魏に分裂し、それぞれ都を鄴（現在の河北省邯鄲市）と長安（現在の陝西省西安市）に置くと、洛陽は急速に荒廃した。東魏の武帝五年（五四七）に職務で洛陽を訪れ、廃墟となった寺院と荒れ果てた旧都を目の当たりにした楊衒之は、かつての洛陽寺院の隆盛を記録することにた。記述の対象は寺院のみに留まらず、周りの様子や様々なエピソードが挿入されている。入矢義高氏は、「その内容は、北魏の洛陽を舞台として、政治・経済・社会・民俗・学芸など、当時の文化の万端にわたって、精細かつ壮大に展開された大パノラマである」と言う。

「洛子淵」は第三巻、洛陽城外の南にあった秦太上公二寺（双女寺）とその付近について述べられた後に附されている話である。このあたりの様子と当時の情勢が語られているので、引用する。

東に秦太上公の二つの寺（俗称双女寺）が景明里の南一里にある。…二寺とも門を並べて洛水に近く、茂りあった木々の枝葉が四方に蔭をおとしていた。…寺の東には霊台があり、その礎は崩れていたが、なお高さは五丈余りあって、まさに後漢の光武帝の建てたものであった。霊台の東に辟雍（大学）があって、これは魏の武帝（曹操）の建てたものであった。我が正光年間（五二〇～五二五）になって、辟雍の西南に明堂を建てた。上は円く、下は方形で、八つの窓と四つの扉があった。汝南王（元悦、皇族）が霊台の上に更に磚（レンガ）の仏塔を作った。孝昌（五二五～五二七）の初め、奸賊が四方を侵し、州も郡も賊の手に落ちた。朝廷は募兵の御触書を掲げて明堂の北で兵士を集め、従軍するものに　は曠野将軍・偏将軍・裨将軍などの官を授けた。当時、この兵士たちを明堂隊と呼んだ。

この後に続けて、洛子淵の話が語られる。建造されて五百年後にもなお偉容を誇る霊台、三百年前に曹操が建てた辟雍、現代の明堂、霊台の上に新たに設けられた仏塔、そして変わらずに流れる洛水のほとりの緑陰の風景。この後十年も経たないうちに洛陽の都は放棄された。その端緒となった戦乱の始まりを告げた後に洛子淵の話が語られている。

参考図書

・『洛陽伽藍記／水経注（抄）』入矢義高訳　平凡社『中国古典文学大系21』

・『洛陽伽藍記』入矢義高訳　平凡社『東洋文庫』

【コメントⅠ　水神に手紙を届ける話】

託された手紙を水辺に住む人に届けると、届けた相手は神で、水中の御殿に招かれもてなしを受けるという話は『太平広記』にいくつか見られる。ここでは直前に紹介した巻二九一神一「観亭江神」に加え、巻二九三神三「胡母班」巻四一九龍二「柳毅」の二篇を紹介したい。

「胡母班」の主人公胡母班は、泰山の側をとおりがかったところ突然木の間から太山府君の使いに宮殿に連れて行かれる。泰山の麓にはあの世への入り口があり、死者の魂はここから冥界の府（役所）に連れて行かれ、太山府君に裁かれると信じられていた。胡母班はもてなしを受け、府君の娘が嫁いでいる婿の河伯（黄河の神）に手紙を持っていくよう頼まれる。河伯のところでももてなしを受け、府君への返書を託される。胡母班はそのまま長安へ行き一年を過ごした後に太山に戻り、返書を府君に届ける。太山府君と河伯の宮殿に出入りするときは、どちらも目をつぶるように言われ気がつくと移動していた。（後半は別の話に展開して込み入ってくるのでここでは省くことにする。）

「柳毅」は「洛子淵」「観亭江神」「胡母班」が所謂「六朝志怪小説」であるのに対し、唐代に作られた「伝奇小説」で、「洞庭霊婣伝」とも題する本もある。「欧明」でも取り上げた話であるが、内容は唐の高宗の儀鳳年間（六七六～六七九年）から玄宗の開元末年（七四一年）まで長きにわたる。

柳毅は科挙に落第して故郷の湖南に帰ろうと都を出てまもなく、洞庭湖の竜王の末娘と名のる羊飼いの女性に出逢い、父への手紙を託される。洞庭湖は郷里への途中にある。柳毅は無事手紙を竜王に届け、盛大なもてなしを受け、竜王の親族にも会う。曲折があって後、柳毅はこの末娘と再婚し、最後は仙人となって姿を消した。

二人が初めて出会う場面、洞庭湖の宮殿での出来事、再会し結婚したいきさつ、その後の二人の生活など凝った話に練り上がっている。岩波文庫『唐宋伝奇集（上）』に収録されている。

「洛子淵」に最も類似しているのは「観亭江神」であるが、それと「洛子淵」と異なっているところもあるように思われる。

「観亭江神」では、手紙を届けた人は水中から人が現れるのを見ているので、手紙を託した人が江神の一族であることがはっきりしている。「洛子淵」の場合は、洛子淵の父はどこからともなく現れ気がつくとそこにいた。樊元宝が、彼らが洛神であることを悟るのは父と別れた直後のことである。そもそも「洛子淵」なる名前は、洛水の淵という意味であるが、なぜ洛水の神の一族である洛子淵が虎賁の兵士となっているのか、なぜこんな形で樊元宝に自分が洛水の神の一族で

あることを明かしたのか、明かしておきながらなぜ姿を消したのか、なぜ死んだ子どもの血を酒にし、しかもそれがわかるようにこどもを放置したのか、「洛子淵」の方が謎とつじつまが合わないことが多いといえよう。「観亭江神」「胡母班」「柳毅」の三篇とも不思議な話だが、「洛子淵」のような不気味さは感じられない。子供の死によって語られるその不気味さは、王朝の死・滅亡をも予測させるものとなっている。

【コメントⅡ　古代の手紙のやりとり】

郵便制度がない時代、遠い異郷に住む人への手紙は、これらの話のようにその地に行く旅人に託したようである。次の詩は後漢時代の無名氏（詠み人知らず）の詩（古詩）である。

古詩十九首　其十七　（『文選』巻二九）

孟冬寒気至　孟冬　寒気至り
北風何慘慄　北風　何ぞ慘慄（さんりつ）たる
愁多知夜長　愁ひ多くして夜の長きを知り
仰観衆星列　仰ぎて衆星の列（つら）なるを観る
三五明月満　三五にして明月満ち
四五蟾兎缺　四五にして蟾兎缺（せんとか）く
客従遠方来　客　遠方従り来りて
遺我一書札　我に一書札を遺る
上言長相思　上には長く相思ふと言ひ
下言久離別　下には久しく離別すと言ふ
置書懐袖中　書を懐袖中に置きて
三歳字不滅　三歳なるも字滅せず
一心抱区区　一心に区区を抱き
懼君不識察　君の識察せざるを懼る

（注）慘慄…身の毛もよだつほど寒い。
孟冬…旧暦十月。
三五、四五…十五日、二十日。
蟾兎…ヒキガエルと兎、月の中に住むと言われる。
区区…小さい、取るに足らない。自分の心をへりくだって言う。

この詩の主人公は、遠く旅にでて帰らない夫を待ちわびている。愁いに沈む妻は眠られぬ夜を星の移り変わりと月の満ち欠けを眺めて過ごしている。そこへある日、見知らぬ旅人が夫の手紙を届けてくれた。そこには「おまえのことをずっと思っている。長く別れているね」と書かれている。その後は音信がないのだろう、妻は三年経ってもこの手紙を大切に懐にしまっている。詩には書かれていな

いが、手紙を届けた人はきっと篤くもてなされたことだろう。

杜甫の「春望」に「家書万金に抵(あた)る」という句がある。手紙のありがたさを端的に示している。一日に何度もラインのやりとりし、既読がつかない、既読がついても返信がないのにヤキモキする現代の我々にはにはこのありがたさは全く想像がつかないかも知れない。こうした手紙に対する昔の人々の感情を、「観亭江神」「胡母班」「柳毅」の三篇とこの「洛子淵」を読む際には踏まえておく必要があるだろう。

（道家春代）

（5）「水の神」のまとめ

以上四つの話から、水神（川の神・湖の神）について、水上交通の安全を司るもの、水中の異世界の主という性格があることが分かる。、そうした異世界の主は「府舎（役所）」（欧明）「赫奕とした官寺（立派な役所）」（温嶠）に住まうとされているようだが、それは水中の異世界に役所と官僚機構が存在したというイメージに繋がっている。この点については、道教、とりわけ五斗米道（天師道）との関連を考慮すべきであろう。そこでは水の神（「水官」）の世界において、特に懲罰の任務を担う官僚機構があり、生前に罪を犯した者が石を運び河川の護岸工事を強制され、また罰として「水官に頭皮を輸す（差し出す）」とされる※。「観亭江神」の冒頭にあった廟前で不遜な態度をとった者を虎にしてしまう神がこの懲罰を司る水官と関わりがあるのか、また「欧明」に現れた清洪君のように己に敬虔な態度を取る者に恵みを与えることが水官にあるのか、今のところ不明であるが、六朝小説に見られる異世界としての水中世界とこの五斗米道の水官の支配する世界とは、おそらく互いに呼応しながらそのイメージが生成されたのであろう。

※宮川尚志氏「天地水三官と洞天」（『東方宗教』七八　一九九一年）

（榎本あゆち）

二　山の神

水の神に次いで山の神を紹介する。中国では、様々な山々が神聖なものとされ、特に五岳（嵩山・泰山・衡山・華山・恒山）は国家祭祀の対象とされてきた。また泰山は死者の魂が集う場所とされ、民間信仰の対象でもあった。ただ『太平広記』の神の部に登場する山の神は、そうではないようである。

(1) 白道猷　巻二九四

山中に住まいを定めた仏僧の前に、この山の元の主、山神が現れ恐ろしげな姿と声で追い出そうとする。しかし仏僧は動じなかった。さて山神はどうしたのか。

章安県西有赤城山。周三十里。一峰特高、可三百余丈。晋泰元中、有外国道人白道猷、居於此山。山神屢遣狼、怪形異声往恐怖之、道猷自若。山神乃自詣之云、「法師威徳厳重。今推此山相与、弟子更卜所託。」道猷曰、「君是何神、居此幾時。今若必去、当去何所。」答云、「弟子夏王之子、居此千余年。寒石山是家舅所住。某且往寄憩、将来欲還会稽山廟。」臨去、遣信贈三匳香。又躬来別、執手恨然。鳴鞞響角、凌空而逝。

『述異記』

【注】

○章安県…今の浙江省台州市椒江区。

○赤城山…　台州市天台県の西北約二キロにある天台山系の一峰。仏教・道教の聖地として名高い。切り立った岩壁が赤色で、あたかも城壁のように見えるこ

とから赤城山と呼ばれたという。

○三十里…一里は約四百メートル　三十里は約十二キロ。

○三百余丈…この時代の一丈は二・四メートル、三百丈は約七百メートルとなるが、実際の標高はその半分ほどである。

○晋泰元中…　泰元は東晋の孝武帝の年号、正しくは太元。三七六～三九六。

○外国道人白道猷…外国道人とは外国、特に西域・天竺出身の仏僧のこと。ただしその詳細については不明。

○威徳厳重…威厳があり、人徳が重厚な様。

○推…譲る。

○卜…選ぶ。

○託…よる、身を寄せる。

○若必…若も必も仮定条件を表す副詞。

○弟子…仏教徒の間で用いられる謙称の一人称、わたくし。

○夏王…おそらく夏王朝の始祖である禹のことであろう。

○寒石山…天台県の西約十二キロにある。唐代の詩僧寒山子が隠棲した山として有名。

○家舅…家は他人に対して肉親の年長者を指すときに謙遜してつける言葉、舅は母方のおじ。

○会稽山廟…会稽山（浙江省紹興市の南）にある禹を祀る廟。

○信…使い、使者。

○匳…箱、入れ物。

○恨然…残念に思う様子。

○鳴鞞響角…鞞は鼓、角は角笛。ともに陣中にあって兵士への合図に用いられる。

○凌空…空に舞い上がる。

【書き下し文】

章安県の西に赤城山有り。周り三十里。一峰特に高く三百余丈なる可し。晋の太元中、外国道人白道猷有りて、此の山に居す。山神　屢狼を遣はして怪形異声

もて往きて之を恐怖せしむるも、道猷自若たり。山神乃ち自ら之に詣りて云はく、「法師は　威徳厳重たり。今此の山を推して相ひ与へ、弟子は更はりて託する所を卜せん」と。道猷曰はく、「君は何の神にして、此に居ること幾時ぞ。今若し必ず去れば、当に何所に去らんとす」と。答へて云はく、「弟子は夏王の子にして、此に居ること千余年。寒石山は是れ家舅の住む所なり。某且く往きて寄憩し、将来会稽山の廟に還らんと欲す」と。去るに臨み、信ひを遣はして三匳の香を贈らしむ。又躬ら来りて別れ、手を執りて恨然たり。鞞を鳴らし角を響かせ、空を凌ぎて逝く。

【現代語訳】

章安県の西に赤城山がある。その周囲は三十里である。その中の一つの峰が特に高く、三百丈あまりほどもある。東晋の太元年間に外国僧の白道猷というものがいて、この山に住んだ。山の神がしばしば狼を送って怪異な姿形やおそろしげな声で道猷を脅させたが、道猷は動ずることがなかった。山神はそこで自ら道猷のもとに行き、言った、「法師は威厳も人徳も非常におありになる。今この山をあなたにお譲りし、私はそのかわり身を寄せる場所を選ぶことにします」と。道猷は言った、「あなたは何の神で、ここにどれほどの年月居たのですか。いまもしここを去るのなら、どこに行こうというのですか」と。山神が答えて言った、「私は夏王の息子で、ここには千年あまり住んでおります。寒石山はおじの住まいです。私はそこに行ってしばらく身を寄せ休み、将来会稽山の廟に戻りたいと思います」と。山神はこの山を去るに際し、使いの者を遣って三箱の香を贈らせた。また自ら別れにやってきて残念そうに道猷の手を握った。軍鼓や角笛をならし、空に舞い上がって去っていった。

【出典】

『述異記』　南斉の祖沖之編纂のものと梁の任昉編纂のものとがある。この話は祖沖之編纂のものが出典と思われる。

【コメントⅠ　山神と白道猷】

ここに登場した山神は、夏王、おそらく禹王の息子とされる。禹王は治水に勤め儒家において聖王とされる存在であるが、その息子である山神は、この話の舞

台となる天台山・赤城山・寒石山・会稽山を含む一帯、すなわち今の浙江省東南地域の土地神と言えるだろう。

また白道猷は外国出身の仏僧とされている。その人物については不詳であるが、この話と同様のものが梁の慧皎撰の『高僧伝』巻十一習禅 釈曇猷伝に見える。ただし曇猷（一名 法猷）は敦煌の出身とされ、外国僧ではない。また『高僧伝』巻五 義解 竺道壱伝に帛道猷なる仏僧が登場する。しかしそれも会稽郡山陰県の人とされ、外国僧ではない。さらに釈曇猷伝の直前に記される帛僧光（一名曇光）伝にもこの話とほぼ同じ内容の話が収められている。ただしその舞台は赤城山の西北にある石城山とされている。次にその話を簡単に紹介してみたい。

帛僧光はどこの出身かわからない。若くして禅業を修め、東晋の永和年間（三四五～三五六）に江南地方にやって来て、剡県の石城山にとどまろうとした。山の民が、「この山には古くから猛獣の害があり、山神は乱暴の限りを尽くすので誰も近づこうとはしない」と言ったが、僧光はかまわず、人に道を切り開かせ進んでいった。すると突然風雨が吹き荒れ、群れをなした虎が吠えるのが聞こえた。山の南側に石室（洞窟）見つけ、そこを修行の場とした。三日経って山神が虎や大蛇に変身して僧光を脅そうとする夢を見たが、一向に動じなかった。また三日たち夢に山神が現れ、「章安県の寒石山に移り、この石室をあなたにお譲りすることにした」と語った。（後略）

こうした類話の存在から、先住の土地神が高徳の仏僧にその住まいである山を譲るというモチーフは、仏教が中国江南社会に浸透し、それ以前に人々の信仰の対象であった土地神を凌駕していく過程で、様々な仏僧を主人公とし、様々な山を舞台として語られたものと考えられる。白道猷はおそらくそうした話が語られる中で、多くの仏僧の姿が投影され、形成された人物像の可能性がある。その姓が白であるのは、神異僧として名高い外国僧仏図澄（西域亀茲出身、俗姓白）のイメージを重ね合わせたのかもしれない。赤城山を仏教の聖地として開いた人物としては、この白道猷の名が後世に伝えられ、唐代の道士徐霊府の『天台山記』には、その名が赤城山の開祖として記されている。『述異記』の記事の浸透ぶりがうかがえる。

このように山神は仏僧の力によってその地を去ることになるが、その道猷との会話、なごり惜しげな別れの様子からは、仏教と土地神との親和性がうかがわれ、この地域への仏教の浸透が平穏のうちに行われたと考えられる。

【コメントⅡ　仏僧はなぜ山に籠もるのか】

この話の舞台となった赤城山を含む天台山系は、神仙思想で有名な東晋初めの

人葛洪の『抱朴子』において、神聖な名山とされる。さらに至高の仙薬とされる金丹は、世俗を離れたこうした名山でなければ作ることができないとする。また山中には神仙術を修行する場も設けられた。白道猷は太元年間にこの山に籠もったとされるが、それは東晋後期にあたり、東晋初めから浸透しつつあった神仙思想の影響を受け、仏僧にとっても名山は修行に最適な地と見なされたのであろう。因みにこの東晋期には、北方の五胡十六国の戦乱を避け、外国僧を含む多くの仏僧が華北から江南地方へと流入した。主人公白道猷が外国僧とされるのには、そうした時代背景があった。

〈参考文献〉都築晶子氏「六朝後半期における道館の成立ー山中修道ー」（『小田義久博士還暦記念　東洋史論集』　一九九五年）

（榎本あゆち）

（2）顧邵

巻二九三

予章郡の長官に赴任した顧邵は廬山廟を淫祀として取り壊した。すると夜中に彼の寝室に奇怪な姿の鬼が現れた。廬山廟の神の廬君と名のり、顧邵に『春秋左氏伝』について議論を挑んだ。廟の復活を求めたのだった。大激論をしたが決着がつかなかった。そして三年後、顧邵と廬君はまた相まみえるが、その結末はどうなったのだろうか。

顧邵為予章。崇学校、禁淫祀、風化大行。歴毀諸廟、至廬山廟。一郡悉諫、不従。夜忽聞有排大門声、怪之。忽有一人、開閤逕前。状若方相、自説是廬君。邵独対之、要進上牀、鬼即入坐。邵善左伝。鬼遂与邵談春秋、弥夜不能相屈。邵歎其精弁。謂曰「伝載晋景公所夢大厲者。古今同有是物也。」鬼笑曰「今大則有之、厲則不然。」灯火尽、邵不命取。乃随焼左伝、以続之。鬼頻請退、邵輒留之。鬼本欲凌邵、邵神気湛然、不可得乗。鬼反和顔、求復廟、言旨懇至。邵笑而不答。鬼発怒而退。顧謂邵曰「今夕不能讐君、三年之内、君必衰矣。当因此時相報。」邵曰「何事忽忽、且復留談論。」鬼乃隠而不見。視門閤、悉閉如故。如期、邵果疾篤、恒夢見此鬼来

撃之。並勧邵復廟、邵曰「邪豈勝正」。終不聴。
後遂卒。

『志怪』

【注】

○顧邵…三国呉の重臣顧雍の子。顧氏は呉郡の四姓（顧・陸・朱・張）と呼ばれる名族の一つ。顧邵は広く学問に通じ、人倫道徳を大切にしていた。二十七歳のとき初めて仕官し、予章太守となり、在任五年で亡くなった。『三国志』巻五十二「呉書七」に伝がある。

○予章…郡名。今の江西省の北部。

○淫祀…礼の制度にない神を民間で勝手に祀ること。

○風化…為政者が道徳で民を導き教えること。

○歴…「あまねく」と読んで「次々と、すべてにわたって」の意味。

○廬山…今の江西省九江市の南にある山。予章郡の北東は長江に接し、彭蠡沢（鄱陽湖）がある。廬山は長江の南側、彭蠡沢の西に面してそそり立っている。

○排…押し開く。

○閤…寝室。または寝室の小門。

○逕…「ただちに」と読んで、「まっすぐに」の意味。

○方相…疫鬼や山川の妖怪などを駆除する鬼神。また、古代宮中に於いて年末に逐疫の儀（大儺）が行われ、方相氏と称する官が熊の皮を身につけ黄金の四つ目の面をつけ、矛と盾を持ち、赤い着物を着て練り歩いた。

○廬君…廬山廟の神

○左伝…『春秋左氏伝』のこと。『春秋』に左丘明が解説を施したとされる書。『春秋』は春秋時代の魯の国の年代記。孔子の著とされる。

○弥夜…一晩中。

○伝…ここでは『春秋左氏伝』のこと。

○晋景公…春秋時代、晋国の君主。補注参照。

○厲…悪鬼。たたりをする死霊。

○随…「ただちに、すぐ後から」の意味

○輒…「すなはち」と読んで「その度にいつも」の意味。

○神気…気力。精神。

○湛然…落ち着いて静かなさま。

○乗…つけ込む。しのぐ。

○懇至…真心があって至れり尽くせりであること。
○忽忽…あわただしいさま。
○閣…閤に同じ。
○並…「ならびに」と読んで「そろって、みな」の意味。→并に変えた？

【補注　晋景公が夢みた大厲とは】

『春秋左氏伝』成公十年（前五八一）、病気になった晋の景公の夢に、大きな厲（悪鬼）が長髪を振り乱し踊るように現れ、「わしの子孫を殺したのは不義だ。わしは天帝から仇を討つお許しを得たぞ」と怒鳴った。公が奥の部屋に逃げても、戸を壊して入ってきた。夢が覚めて巫に夢占いをさせると、「今年とれる麦は召し上がれないでしょう」という。病が重くなり、秦から名医を呼び寄せたが、医者が着く前に、公は病気が二人の子どもの姿になって「名医が来るからこちらがやられそうだ。肓の上、膏の下に隠れよう」と話し合う夢を見た。医者は着くなり「もう治療はできません。肓の上、膏の下は、灸も針も届かず、治療できません」といった。その後景公は新麦を献上させて調理させ、夢占いをした巫にその様子を見せた上に、夢占いが外れたことを責めて殺した。しかし食べる直前に腹の調子が悪くなって厠に行き、落ちて死んだ。

※「病膏肓に入る」の故事。「膏」は心臓の下部、「肓」は膈膜の上部

【書き下し文】

顧邵予章と為る。学校を崇び淫祀を禁じ、風化大いに行はる。歴く諸廟を毀ち、廬山廟に至る。一郡悉く諫むるも従はず。夜忽ち大門を排くの声を聞き、之を怪しむ。忽ち一人有りて、閤を開き逕ちに前む。状　方相のごとく、自ら是れ廬君なりと説く。邵独り之に対し、進みて牀に上がるを要むれば、鬼即ち入りて坐す。邵　左伝を善くす。鬼遂に邵と春秋を談じ、夜を弥るも相ひ屈する能はず。邵　其の精弁を歎ず。謂ひて曰はく「伝に晋の景公の夢みる所の大厲なる者を載す。古今同じく是の物有るなり」と。鬼笑ひて曰はく「今大なるは則ち之有るも、厲は則ち然らず」と。灯火尽くるも、邵取るを命ぜず。乃ち随ひて左伝を焼き以て之を続く。鬼頻りに退くを請ふも、邵輒ち之を留む。鬼本より邵を凌がんと欲するも、邵　神気湛然として、乗ずるを得べからず。鬼反つて顔を和らげ、廟を復するを求め、言旨懇至たり。邵笑ひて答へず、鬼怒りを発して退く。顧みて邵に謂ひて曰はく、「今夕君に讐ゆる能はざるも、三年の内、君必ず衰へん。当

に此の時に因りて相ひ報ゆべし」と。邵曰はく「何事か忽忽たる、且く復た留まりて談論せん」と。鬼乃ち隠れて見えず。門閣を視れば悉く閉づること故のごとし。期のごとく、邵果して疾篤く、恆に夢に此の鬼の来たりて之を撃つを見る。並びに邵に廟を復するを勧むるも、邵曰はく「邪豈に正に勝たん」と。終に聴かず。後遂に卒す。

【現代語訳】

「顧邵は予章郡の太守となった。学校を重んじ、淫祀を禁じ、民の教化は大いにすすんだ。次々と淫祀の廟を取り壊し、廬山廟の番となった。予章郡の官吏たちはこぞって取り壊しを止めるよう諫めたが、顧邵は従わなかった。夜中に突然役所の正門を押し開く音がしたので怪しく思っていると、たちまち何者かが寝室の扉を開けてまっすぐ顧邵の前にやってきた。その姿は方相のようで、自分は廬君だと名乗った。顧邵は誰も呼ばずに一人でこれに応対し、こちらに来て寝台に上がるよう勧めると、鬼はすぐ入ってきて座った。顧邵は『春秋左氏伝』を良く学んでいた。鬼は顧邵と『春秋』について議論したが、一晩中議論しても論破することができなかった。顧邵は鬼の弁論の精緻さに感嘆した。顧邵が「『左伝』に晋の景公が、大厲が出てくる夢をみたことが記載されているが、昔も今も同じことがあるものですな」というと、鬼は笑って言った、「今大きい物はここにいるが、厲かといえばそうではない」と。灯火が消えても顧邵は僕(しもべ)に代わりの灯火を持ってくるようにいいつけず、すぐに『左伝』を焼いて灯火の代わりにした。鬼は何度も帰らせてほしいと言ったが、顧邵はその度に引き留めた。鬼はもともと顧邵を圧倒しようと思っていたのだが、顧邵の心神は落ち着き払っており、付け入るすきがなかった。鬼は一転して顔つきを和らげ、廟を復活させるよう求め、あれこれ言葉を尽くして懇願した。顧邵が笑って答えないと鬼は激怒して退き、顧邵を顧みて言った、「今夜は貴君に報復することはできないが、三年の内に、貴君は必ず衰えるだろう。その時になったら報復してやるぞ」と。顧邵は「何をそんなに慌てているのですか。もうしばらくここで議論しましょう」と言った。鬼はすると姿を隠して見えなくなった。門や戸を見るとすべて元通り閉まっていた。三年後、顧邵は鬼の言ったとおり重い病気にかかり、常に夢にあの鬼が現れて彼を打った。部下たちはみな廟を再建するよう勧めたが、顧邵は「邪が正に勝つことがあろうか」と最後まで聞き入れなかった。そしてその後亡くなった。

【出典】

『志怪』　編者不明　「水の神」（3）温嶠の項、参照。

【コメントⅠ　淫祀を禁じるのはなぜか】

古代中国でも日本の八百万の神と同じく、天地山川・自然現象・歴史上の人物など、多くの神が祀られてきた。そのなかで代表的なもの、天地や全国区の大山岳・大河川などは天子が祭祀を行い、土地神や地方区の山川などは諸侯や地方の長官が祀っていた。いわば公認の神様である。一方で民衆により民間でも多くの神様が祀られていた。科学が発達していなかった古代において、人びとが自然物や自然現象に畏怖を抱き、過去の英雄や非業の死を遂げた人物を畏敬し、これらを祀って、御利益を求めたり祟りを怖れたりするのは、なんら不思議なことではない。しかし為政者にとってそれは社会秩序を乱す危険なものと判断されることがあった。たとえば、戦乱や自然災害、官による苛斂誅求などに追いつめられた人民が宗教にすがり、信仰を核に集団となって為政者に対抗し、世直しを唱えていわゆる宗教反乱を起こし、時には王朝を揺るがすに至ることが、歴史上何度もあった。それほど大きなことでなくても、小さな地域の廟神も、信仰が行き過ぎると、熱をあげた民衆が競争するように供物を捧げたり献金して家財を蕩尽したり、中には神を騙った詐欺師に大金や土地家屋を巻き上げられたり、宗教行事や祟りを怖れて農作業を怠ったり、祭礼の混雑に乗じて犯罪行為が頻発したりという弊害が起こる。これらは為政者にとっては不都合なことであり、官は「邪神」としてその芽を早く摘み取ってしまいたい。これが「淫祀を禁じる」理由である。冒頭でいうように「学校を崇ぶ（人倫道徳を教える）」ことと併せて「淫祀を禁じる」ことが「風化が大いに行われる（人民が礼儀正しく従順であること）」ことにつながる。さらに予章郡はもともとは漢族から見れば蛮人である原住民（少数民族）の土地であり、廬山廟は彼らが信仰する神を祀るものだったと思われる。原住民は漢族支配に反抗する恐れもあり、彼らが信仰する神はより危険な神であったであろう。彼らのために学校を開いて、儒教に基づく教育を行い、迷信を廃し、従順にすることが反乱を抑えることにつながる。そのために顧邵は学校を重視し、淫祀を禁じることに力を注いだと言えよう。

【コメントⅡ　廬君について】

廬山は長江と湖を見下ろす位置にそそり立つ数々の峯からなる高山で、全体は現在世界遺産となっている。古来仏教・道教の聖地でもあり、陶淵明・李白・白居易ら多くの詩人にその姿を謳われてきた。廬君は廬山の神であるとともに、その下を流れる長江や広がる彭蠡沢を守る神で、ここを通る旅人が、船の航行の安全を祈った。『太平広記』巻二九二 神二に「張璞」という話がある。

呉郡太守の張璞一行が赴任地から帰る船旅の途中、張璞の子女が廬山の祠をお参りに訪　れた。その時、婢が冗談で神像に向かって「お嬢様をおまえのお嫁さんにしましょう」と言ってしまった。その夜、張璞の奥方の夢に廬君が現

れて娘を要求する。一行は逃げようとしたが船がどうしても動かない。奥方は璞の亡兄の娘を身代わりにして水中に置き去りにしたが、気づいた張璞はそれでは世間に面目が立たないと言って自分の娘を水中に投げ入れた。結局盧君は張璞の義に敬意を表して二人の娘を返してくれたのだった

この話の盧君が「顧邵」の盧君を同一だとすれば、たとえ娘を返してくれたとしても顧邵が「邪神」だと考えるのもうなずける。

【コメントⅢ　鬼か神か】

本文中、顧邵が「伝に晋の景公の夢みる所の大厲なる者を載す。古今同じく是の物有るなり」というと、盧君は「今大なるは則ち之有るも、厲は則ち然らず」と答えている。これはどういう意味か。本文中では盧君のことを「鬼」と読んでいる。「鬼」はオニではなく、死者の霊魂、あるいは鬼神のことである。中国人の死生観では、人は死ぬとみな鬼となる。基本的に善悪は関係ない。死者の霊魂、あるいは死後の人の姿といえるかもしれない。「厲」はその中でも人に禍をもたらす存在、悪鬼（悪霊）である。『左伝』の中で景公の夢に現れた大厲は「余の孫を殺すは不義なり」と言っている。景公は以前趙氏一族を皆殺しにしている。「大厲」は趙氏の先祖の悪鬼（悪霊）で、天帝から子孫が殺された復讐を許可されたと宣言し、実際に景公は死んでいる。顧邵は盧君のことを「大厲」と見なし、神ではないと考えている。これに対し盧君は、自分は「大」ではあるが「厲」ではない、つまり「鬼」ではない、「神」だ、と言っているのであろう。「顧邵」の地の文で盧君を一貫して「鬼」と称しているのは、顧邵の認識にしたがっていると言えよう。

【コメントⅣ　左伝を焼く】

灯火が消えると、顧邵は盧君との対決を邪魔されたくないのか、下僕をよんで代わりの灯火を持ってこさせることなく、手元にある左伝を燃やして灯りにしている。この左伝は紙の書物なのか。この頃（三国時代）、紙はまだ貴重品で、竹簡に書かれた書物もまだ多かった。おそらくこの左伝も竹簡を糸で繋いで作ったものと思われる。顧邵は竹簡を一枚一枚糸から外し、火をつけて燃やしたのだろう。これなら灯火の代わりになりうる。

さて鬼や神は昼間が苦手である。盧君は夜が明けるのを恐れているようだ。顧邵は反対に「何をそんなに慌てているのですか。もうしばらくここで議論しましょう」と引き留め、余裕を見せているのは面白い描写である。

（道家春代）

【コメントV　勝ったのはどっち】

廬山の山神廬君はその廟を打ち壊そうとする顧邵を春秋左氏伝についての論議で圧倒して、廟の廃棄を押し止めようとした。しかし論議は引き分けの状態、廬君は夜明け前に退散する。顧邵は春秋左氏伝をはじめとした儒教の経典を修めた知識人（士大夫）であり、廬君はそのフィールドで勝負しようとしている。ここが面白い点である。コメント1にあったように顧邵が廬山廟を淫祠として廃棄しようとしたのも儒教の教えが大きく影響している。儒教と廬山廟の土地神信仰とは対立関係にあったのだが、自称「神」、相手からは「鬼」とされる廬君は相手の懐に入って相手を圧倒しようとしたのであろう。もとより春秋左氏伝が持ち出されたのは「大厲」の話題を引き出すためのプロットかも知れない。論争の三年後病気にかかった顧邵の夢に廬山神が現れ彼をいためつける。それを知った周囲の人々が廟の再建を許可し廬山神の許しを得て病から回復することを進言するが、顧邵はそれを聞き入れずそのまま病死する。この話を伝えた人々はこの対立が引き分けに終わったということでは納得せず、廬山神の報復の成功（最終的勝利）を言いたかったようである。ともあれ土地神信仰（民間信仰）と儒教との対立はなかなかに深刻だったと言えよう。同じ六朝期江南地方にあって、統治の理論である儒教と民間信仰とのこの対立は、前話に見られた仏教と土地神信仰（民間信仰）との親和性と対比して興味深い。なお山の神であるとともに湖の神でもあるという複雑な性格を持つ廬山神については、「水の神」の「欧明」の項で触れたように宮川尚志氏が詳しく論じている（宮川氏『中国宗教史研究　第一』（一九八三、同朋舎出版）第七章第二節　廬山神の信仰）。併せて参照されたい。

（榎本あゆち）

（3）欒巴　　巻十一

先に紹介した山神に関する二つの話では、仏教・儒教との関係が示された。それでは道教との関わりはどうか。『太平広記』神の部では適当な話がないため、同書 神仙の部から「欒巴」の話を紹介する。

欒巴者、蜀郡成都人也。少而好道、不修俗事。時太守躬詣巴、請屈為功曹、待以師友之礼。巴到、太守曰「聞功曹有道。寧可試見一奇乎。」巴曰「唯。」即平坐、却入壁中去、冉冉如雲気之状。須臾失巴所在。壁外人見化成一虎、人並驚。虎径還功曹舎。人往視虎、虎乃成巴也。

【注】

○欒巴…後漢末の宦官出身の官僚、『後漢書』に伝があるが、その内容はこの神仙伝の内容と大きく異なる。詳しくは後述のコメント参照。

○蜀郡成都…今の四川省成都市

○功曹…漢代、郡の属官、人事を司り、かつ郡の政務全般にも関与した。

○師友…交際て自分の学問や人格の向上に役立つ人。

○寧可試―乎…この「寧」は、文末の乎（か）と呼応して「あるイハ」と読み、推量の語気を添える。「試」は「どうか―」と懇願する語気を表す。

○唯…「はい」と返答する語。

○冉冉…もうろうとした状態。

○径…真っ直ぐに、すぐに。

後挙孝廉、除郎中、遷予章太守。廬山廟有神。能於帳中共外人語、飲酒空中投杯。人往乞福、能使江湖之中分風挙帆、船行相逢。巴至郡、往廟中、便失神所在。巴曰「廟鬼詐為天官、損百姓日久。罪当治之。以事付功曹、巴自行捕逐。若不時討、恐其後遊行天下、所在血食、枉病良民、責以重禱。」乃下所在、推問山川社稷、求鬼踪跡。

【注】

○孝廉…漢代の官吏登用制度のひとつ。孝にして清廉な人物を郡の太守などが朝廷に推薦した。

○郎中…官名、宮中に当直し警護にあたる。実際にはエリート官僚予備員をプールしておくポスト。孝廉によって召し出された者は多くこの官に任じられた。

○予章太守…豫章郡の長官。漢代の豫章郡は、今の江西省のほぼ全域をカバーする広大な境域を管轄していた。郡治は南昌県（今の南昌市）。

○廬山…彭蠡沢（別名宮亭湖、今の鄱陽湖の北半分）の西岸にそびえる。廬山廟は廬山の麓、湖岸にあった。廬山及び廬山廟については、前話 顧邵を参照。

○廟鬼…鬼はこの場合、化け物の意味。

○天官…官はこの場合神を意味する。天の神。道教の五斗米道（天師道）において天官・地官・水官の三神が信仰の中心的対象とされた。

○血食…祖先の霊や神が供えられた生け贄を食べるの意味から、子孫や信者の祭りを受けるの意味となり、また、祖先や神を祀ることをも表す。

○枉病…悩ませ苦しめる。

○重禱…鄭重で手厚いお祈り。

○所在…いたるところ・あちらこちら。

○社稷…土地と五穀の神。国や地域の守り神。

此鬼於是走至斉郡、化為書生、善談五経。太守即以女妻之。巴知其所在、上表請解郡守、往捕其鬼。巴謂太守「賢壻非人也。是老鬼詐為廟神、今走至此。故来取之。」太守召之不出。巴曰「出之甚易。」請太守筆硯設案、巴乃作符。符成長嘯、空中忽有人将符去、亦不見人形、一坐皆驚。符至、書生向婦涕泣曰「去必死矣。」須臾、書生自齎符来至庭、見巴不敢前。巴叱曰「老鬼何不復爾形。」応声即変為一貍、叩頭乞活。巴敕殺之。皆見空中刀下、貍頭堕地。太守女已生一児、復化為貍、亦殺之。

巴去還予章。郡多鬼、又多独足鬼、為百姓病。巴到後、更無此患、妖邪一時消滅。

（後略）

『神仙伝』

【注】

○斉郡…今の山東省臨淄市。

○賢壻…相手の娘婿を丁寧に指すことば。

○長嘯…嘯はうそぶく、口をすぼめ、高く長く引く声を出す。古代では招魂の方術だった。また道教においては道士が鬼神を呼び出し使役する際の方術。

○案…机。

○符…公文書、お札。

○貍…山猫。

○敕…一般的に戒める、責める、あるいは天子の命令という意味であるが、道士が用いる護符や呪文上の命令という意味がある。

【書き下し文】

欒巴なる者は、蜀郡成都の人なり。少くして道を好み、俗事を修めず。時に太守躬ら巴に至り、屈して功曹と為るを請ひ、待するに師友の礼を以てせんとす。巴到り、太守曰はく、「功曹 道有りと聞く。寧いは試みに一奇を見すと。巴曰はく、「唯」と。即ち平坐し、却きて壁中に入りて去る。冉冉として雲気の状のごとし。須臾にして巴の在る所を失ふ。壁外の人 化して一虎と成るを見、人並びに驚く。虎 径ちに功曹の舎に還る。人 往きて虎を視れば、虎乃ち巴と成るなり。

後 孝廉に挙げられ、郎中に除せられ、予章太守に遷る。廬山廟に神有り。能く帳中より外人と共に語り、酒を飲めば空中に杯を投ぐ。人往きて福を乞ふに、能く江湖の中に、風を分かち帆を挙げ、船行をして相ひ逢はしむ。巴 郡に至り、廟中に往けば、便ち神の在る所を失ふ。巴曰く、「廟鬼詐りて天官と為り、百姓を損ひて日久し。罪当に之を治むべし。事を以て功曹に付し、巴自ら行きて捕逐せん。若し時に討たざれば、恐らくは其の後天下を遊行し、所在に血食し、良民を枉病し、責むるに重禱を以てせん」と。乃ち所在に下り、山川社稷に推問し、鬼の踪跡を求む。

此の鬼 是に於いて走りて斉郡に至り、化して書生と為る。善く五経を談ず。太守即ち女を以て之に妻す。巴其の所在を知り、上表して郡守を解くを請ひ往きて其の鬼を捕へんとす。巴 太守に謂ふ、「賢壻は人に非ざるなり。是れ老鬼の詐りりて廟神と為り、今走りて此に至るなり。故に来たりて之を取らんとす」と。太守之を召すも出でず。巴曰はく、「之を出すは甚だ易し」と。太守に筆硯を請ひて案を設け、巴乃ち符を作る。符成りて長嘯すれば、空中に忽ち人の符を将て去る有るも、亦た人の形を見さざれば、一坐皆驚く。符至り、書生婦に向かひて涕泣して曰はく、「去れば必ず死せん」と。須臾にして書生自ら符を齎し来たりて庭に至り、巴を見るも敢へて前まず。巴叱りて曰はく、「老鬼何ぞ爾の形に復らざる」と。声に応じて即ち変じて一狸と為り、叩頭して活くるを乞ふ。巴敕して之を殺す。皆空中より刀下り、狸の頭地に堕つるを見る。太守の女已に一児を生むも、復た化して狸となれば、亦た之を殺す。

巴去りて予章に還る。郡に鬼多く、又独足鬼多く、百姓の病ひと為る。巴到るの後、更に此の患ひ無く、妖邪一時に消滅す。

【現代語訳】

欒巴は蜀郡成都県の人である。若い頃から道術を好み、俗事には関わらなかった。郡の太守が自ら巴のもとにやってきて、頭を下げて郡の功曹と為るようにと願い、巴を（部下ではなく）師友として待遇した。巴が郡の役所にやってくると、太守が言った、「聞くところによると、あなたは道術を心得ておられるとか、一つ珍しいものを見せてはいただけないか」と。巴は「はい」と言った。そこで床に座ったまま後ずさりし壁の中に入っていったが、もやもやとした雲のような状態と為った。まもなくそのありかが分からなくなった。壁の外にいた人はそれが一匹の虎に変化したのを見て、皆驚いた。虎はまっすぐに功曹の官舎に帰っていった。人々がそこにいって虎を見ると、それは巴に変化していた。

後に孝廉に推挙された。郎中に任じられ、予章太守に昇進した。（予章郡の）廬山病には神がおり、帳の中から外にいる人に語りかけ、酒を飲む際には杯を空中に投げたりすることができた。人々がその廟に行き福を祈願すると、（廬山神は）長江から彭蠡沢にいたる範囲で風の方向を（上りと下りの二つに）分け帆を挙げ、船で（互いに反対方向に）進む人々を出会わせるようにした。巴が郡に到り廟にやって来るとその神のありかが分からなくなった。巴が次のように言った。「廟の鬼が天神と偽り民衆を苦しめて久しい。その罪は処罰すべきである。（郡役所の）仕事は功曹に任せ、我自ら出かけ捕らえよう。もしこの機会に退治しなければ、恐らくこの後あちこち渡り歩き、至る所で供物を受け、良民を苦しめ、鄭重で手厚い祈禱を要求することになろう」と。そこであちこちに出向き、山川の神や土地の守り神に尋問し、鬼の行方を捜した。

この鬼はそこで斉郡に逃げ、書生に変化し、儒教の五経を巧みに講義した。斉郡の太守はそこで娘を鬼に嫁がせた。巴は鬼の所在を知り、朝廷に上奏し豫章太守の任を解くように願い出て、斉郡に行きその鬼を捕らえようとした。巴は斉郡太守に次のように言った、「婿殿は人間ではありません。それは年を経し鬼が偽って廟神となり、今ここに逃げてきた者です。そのためここに捕らえにやってきたのです」と。太守は壻を呼び出したがやってこない。巴は「召し出すのはいとも簡単です」と言った。そこで太守に筆と硯を借り机を設け、お札（ふだ）を書いた。お札が書き上がり長嘯すると、空中に突然人がやってきてお札を持ち去っていったが、その姿を現さなかったので、そこに居る者一同皆驚いた。お札が届けられると、書生は妻に向かって涙を流し、「行けば必ず死ぬだろう」と言った。すぐに書生は自らお札を持って役所の庭に到り、巴の姿を見ると前に進もうとはしなかった。巴が叱りつけて言った、「老いさらばえた化け物め、どうしてお前本来の姿に戻らぬのか」と。その声に応じて書生は一匹の山猫に変化し、頭を地面に打ち付け命乞いをした。巴が是れを殺すよう命じた。一同空中から刀が振り下ろされ、山猫の頭が地面に落ちるのを見た。太守の娘は已に子供を一人出産していた

が、その子もまた山猫に変化したので、これも殺した。
巴は予章郡に帰還した。郡には鬼が多く、また一本足の鬼が多く民衆の煩いとなっていた。巴がやってきた後になって、その煩いはもうなくなり、妖怪はぱたりといなくなった。（後略）

【出典】
『神仙伝』　葛洪撰。葛洪は西晋末から東晋にかけて活動した神仙思想家。現行本は全十巻、九二人の神仙（仙人）を記述する。

【コメントⅠ　欒巴についての二つの記録】
この話には続きがある。洛陽の朝廷に召し戻された欒巴が、正旦の宴会の席上西南方向に酒を噀（噴き出）した。それははるか成都の市場でおきた火事を消すためだった、というのである。そのため欒巴は噀酒仙人と呼ばれるようになる。この後半の話と相まって、この神仙伝の欒巴は、官僚でありながら仙人としての性格を強く持つ人物として描かれている。
ところが『後漢書』列伝巻四七のその伝の内容は大きく異なる。出身は成都ではなく魏郡内黄県（今の河南省安陽市）とされ、後漢順帝の時後宮に出仕した宦官とされる。しかし他の宦官とは距離を保ち、学問を修めていた。後男性機能が復活し（「陽気通暢」）、士人として郎中・桂陽太守を歴任する。桂陽郡は南方の辺境のため秩序が整っていなかったが、彼は葬祭の礼を定め、学校を建て、民衆の教化に務めたという。まるで前話の顧邵と同じである。尋いで中央官を経た後、豫章太守となり、本話にもあったように淫祠が民衆の生活を破綻させているとして多くの廟の建物を破壊した、とされる。そこで「巴もともと道術ありて能く鬼神を使役す。乃ち悉く房祀を毀壊し姦巫を翦理す」と多少本話の内容に繋がる記述があるが、どのようにして廬山廟神をやっつけたのかなどと言う記述は一切ない。さらにその最期については、第二次党錮の禁において濁流宦官勢力によって殺された清流派士大夫の指導者陳蕃と竇武を冤罪と訴えたため、獄につながれ自殺したとする。そこでは経歴は異常ながら、清流派士大夫として儒教的信念をつらぬいた人物として描かれている。
宦官だったというその経歴には全く触れず、エリート官僚として出仕した欒巴が実は神仙だったとする『神仙伝』と、宦官だったにもかかわらず士大夫的信念を貫いたとする『後漢書』の記述の対照は、極めて興味深い。

【コメントⅡ　鄱陽湖の風】
本話の中で、廬山神の超能力として、鄱陽湖（彭蠡沢）を吹く風を支配するという点が強調されている。同じ時点で少し離れた場所で互いに反対方向に風をふ

かせるというのであり、それは商旅にとって風待ちをしなくてもよいという利点を与えるもので、廬山神を信仰する者に対する恩恵とされる。ただ客観的に言えば、廬山から吹き下ろす風は、鄱陽湖上で、複雑な方向に吹いているということであり、少し風向を読み誤れば横風・横波をうけ、危険な事態に繋がることをも意味する。鄱陽湖は船の運航上非常に危険な場所だったと言えよう。それが、水の神で紹介した「欧明」の冒頭、主人公が湖の神に恒に捧げ物をするという行為につながるのである。前話「顧邵」の【コメントⅡ】で「張璞」の話をもとに説明したように、この廬君は鄱陽湖の船の運航を支配する湖の神でもあった。廬山神は、その吹き下ろす風によって、山の神であると共に、湖の神ともなるのであろう。

（榎本あゆち）

（4）「山の神」のまとめ

以上三話に紹介した山神は、仏僧に対しては敬虔な態度で山を譲り、儒学の徒には対抗し、道教の神仙には散々にやっつけられる対象とされた。中国三大宗教に対する山の神は、いずれも神々しい存在とは言えない姿に描かれている。

ではなぜこのような態度の違いが生まれたのだろうか。実在性があやふやな白道猷とは異なり、この地域で活動した実在が確かな仏僧として支遁がいる。彼は呉郡（今の蘇州市）・会稽郡（紹興市）そして都建康（南京市）などで活動し、清談の名手として貴族社会にも出入りした。その後白道猷の項で紹介した石城山に移り、そこで病没している。彼は格義仏教の代表者として知られるが、それは仏教の教義を、老荘思想の概念を用いて解説するというもので、中国の伝統文化と仏教の融合を目指したものと言えよう。支遁はその後の中国、特に江南地方の仏教発展の基礎を築いたとされ、その流れは、南朝末期から隋代にかけて活動し、中国仏教形成の第一人者とされる天台智顗へと繋がっていく。赤城山の山神と白道猷との融和的な関係は、江南地方における仏教側の中国伝統文化に対する融和的な姿勢の反映かもしれない。

顧邵の廬山廟破壊の意図については、顧邵【コメントⅠ】に記されている。民衆反乱の拠点になりかねない、またその過度な祭祀が民衆生活を圧迫しかねない事への危惧がそこに見て取られる、儒学の徒の民間宗教に対する通時的な態度と言えよう。この話について特に興味を引かれるのは、廬君（廬山神）と顧邵との間に交わされた春秋左氏伝についての議論である。左氏伝については、前漢末の劉歆による称揚以降、後漢代・三国期を通して徐々にその研究熱が高まり、西晋の杜預の『春秋経伝集解』の成立に到る。顧邵と廬君との論争は、そうした研究熱の高まりを背景にしていると思われ、興味深い。

欒巴によってやっつけられた廬山神の正体は貍であったという。それは貍が化けて神を名乗っていたということか、あるいは民間信仰などというものは、そうした狐狸の類いに化かされたものだという、道教・神仙思想側の主張だったかもしれない。いずれにしても道教・神仙思想側の民間宗教に対する優越を主張する態度が見て取られる。宮川尚志氏はこの欒巴をはじめとする道士・神仙の話は、廬山神など土地神がその神通力を発揮できるのは地元の限られた範囲であり、それに対し道士・神仙は地域に限定されることなくその力を示すことができるというその優越性を物語ると述べる（前話末尾所掲「廬山神の信仰」）。

このようにこの三話は小説ではあるが、そこから当該時期の社会の有り様を探る手がかりを与えてくれる。六朝小説の大きな特徴と言えよう。

（榎本あゆち）

「自然神」のまとめ

水の神と山の神の二項目にわたり、中国中世の自然神に関する話をいくつか紹介してきた。水の神については、その性格を水上交通の安全を司るもの、また異世界の主とし、山の神については、儒・仏・道三教とのかかわりを通してその特徴を考えてみた。神であるからには、人間の力を超えた超越的な力を発揮する側面もそこには見られた。主人公を病から死に至らしめ（温嶠）、その寿命を定め（顧邵）、船の運航に関わる風を支配する（欒巴）などして、それが超越的な存在であることを示した。しかし一方ではきわめて人間臭い側面をもっていた。高僧に敬意を示し、別れを惜しみ（白道猷）、士人と経書の知識を張り合い（顧邵）、身内からの手紙を届けてくれた人物は篤くもてなし（観亭江神）、自分に敬意を示した者には贈り物をしようとする（欧明）。これはこの時代の自然神が、人々にとって一面超越的なものでありながら、また一面、神々しい遥か遠くに存在するものではなく、人間社会に近しいものと捉えられていたことを物語っている。この二面性が中国中世の自然神の特徴といえるのではなかろうか。

（榎本あゆち）

【完】

＊本研究会は、「中国中世の研究ー『太平広記』を題材にしてー」という名称で活動してきた。その前身となるのは河合塾の漢文講師たちが河合文化教育研究所のもとで行っていた漢文訓読研究会である。漢文講師たちが自らの仕事に役立てようと約三十五年にわたって漢文を読むことを続けてきた。ただ、漢文を読むばかりではつまらないという思いから、故谷川道雄先生（京都大学名誉教授）に指導をお願いして、書かれている話の内容について議論するようになった。谷川先生が亡くなると、岡田充博先生（横浜国立大学名誉教授）に、指導を継いでもらった。研究所は二〇二三年に活動を終了したのだが、河合塾の支援によって研究活動を続けることがみとめられたので、研究課題を設け、新たにメンバーを加え、三年間ほぼ毎月のように研究会を開催してきた。本篇は本研究会の研究活動の成果である（藤堂光順）。

＊河合塾からは、この三年間にわたって本研究会の活動にかかる研究費、開催場所の提供、また本篇公開の機会など多大なご支援をいただいた。ここに深く謝意を表したい。

＊本篇の編集には、木村瑠里・小池翔平両氏の全面的な協力を得た。お二人の尽力に感謝したい。

（二〇二六年三月三一日）

〔執筆者〕

藤堂光順（研究会代表）

榎本あゆち

都築晶子

道家春代